魔王誘拐

三浦平原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王誘拐

【Ｎコード】

Ｎ２７６６Ｗ

【作者名】

三浦平原

【あらすじ】

中年男が幼女誘拐していろいろする話。

あらすじ

「お嬢ちゃん、おじさんと楽しいところに行かない？」
「いきます。つれてって！」
「えっ？」

◆――◆――◆

《遠見の水晶》と《予言の絵本》。

アカンナ王国はこの二つの秘宝により国民の支持を得ていた。

《予言の絵本》は国内の大きな災禍に関する全てを予見した。

《遠見の水晶》は指定した場所を空から見下ろすかのごとく眺めることができた。

二つの秘宝を使い、国内に『魔王』を生み出し、それを『勇者』が倒すのだ。

魔王候補となる娘の居場所は知れていた。

大国スズカゼとの国境沿い、その森にある村。領土で揉めている地であった。

他国に横槍を入れられてはかなわぬ。王は考えた。

「娘を攫（さら）い、王都で暴れさせよ」

王が勇者に告げた翌日、秘宝と共に外務長官が姿を消した。

驚愕の報は三日後に届く。

『次代魔王誘拐。犯人は外務長官』

「探せ！なんとしてでも探し出し、魔王もろとも長官を殺せ！」

こうして。

中年男と幼女のわくわく勘違いラブコメは始まった。

1．魔王誘拐（前書き）

いろいろな意見を取り入れて書いていきたいです。

1．魔王誘拐

「お嬢ちゃん、おじさんと楽しいところに行かない？」
「いきます。つれてって！」
「えっ？」

◆――◆――◆

黒目石の床に水晶玉の破片が散らばっている。
月詠の間には多くの武官文官が集まっていた。
「いったい誰がこんなことを」
勇者アルファが気だるげに呟いた。
この男、民の評判は極めて高いが、王宮内では陰険で知られる剛の者である。この場で口を開ける者は彼をおいては一人よりいなかった。
「なんとしてでも犯人を探し出すのだ」
子を奪われた魔猿の形相で王が言った。
優れた統治者が必ずしも優れた父とは限らぬ。そんな言葉を身を持って証明してみせた脳髄不具の息子である。前王亡きあと、女十人で貴族からの税率変更要求に応じた彼の英断は後世にまで高く評価されたものであった。その政治力たるや他国の民を笑わせ、自国民には暴動という形で国政参加への意欲を示させるほどのものだ。
この男こそ、未来この国が大陸のどこより早く民主化することの因として、五百余年の永きにわたり語り継がれる名暴君である。
「ところで、外務長官殿がいらっしゃらないようですが？」
「シグマの奴は熱が上がって動けぬそうだ」
「ほう、熱が。それはそれは」

この時、勇者の笑みに企みの色を見た者は一人としていなかった。

◆――◆――◆

《予言の絵本》と《遠見の水晶》。

これら二つの秘宝により、この国《アカンナ王国》の王家は大きな災いの発生する時と場所を事前に知ることが出来た。《予言の絵本》は国内の大きな災禍に関する全てを予見し、《遠見の水晶》は指定した場所を空から見下ろすかのごとく眺めることができた。伝説を創作するのにこれ以上有用なアイテムはない。王家は二つの秘宝を最大限に活用した。

災いは起こるであろう。ただしそれを未然に防いだのでは意味が無い。かといって遅すぎて被害が嵩むのはいただけない。適度に国民の恐怖を煽り、颯爽登場、即時解決。英雄はこうでなくてはならない。

王家はこれまでそうして何度も『災い』を作り上げ、始末してきた。

本来、《予言の絵本》は災いが起こらぬよう物語で持ち主に指示を出す魔法の絵本だ。しかし王家は逆の使い方をした。わざと物語を乱す真似をし、災いが大きくなるように仕向けるのだ。時に森を切り開き、時に田畑を荒らし、時に対象の親兄弟を殺すなどして『災いのもと』を成長させた。そうして『災い』が適度に災厄をばらまいた頃に解決し、国民の支持を得てきたのである。

今回の災いは五年ぶりの『魔王』であった。

飢饉や自然災害では面白みに欠けるし、見返り――つまり民衆の熱狂も薄いものとなる。どんと大きな事件が起こり、それを王家が

愛と勇気で解決してこその『災い』だ。国を動かすには敵が必要なのである。その点、魔王は実に効果的だった。
まず、自国に魔王という名のテロを起こす。
王家は悪を許すなと国民を扇動する。
王自らが指揮を取り、魔王を討伐する。
国民は熱狂。支持率はうなぎのぼり。
簡単なものだった。
例外といえば五年前の一件、勇者誕生の事件くらいのものであろう。王以外の者が一歩先に魔王を仕留めてしまったのだ。このとき王家はやむなく『勇者』というシステムを作ることになってしまったが、幸い勇者は素直な男であったから殺さずに済んだ。幼い頃より王家の子飼いであったというふうに過去を捏造したのだ。彼は謁見の間で「金と地位を頂けるなら喜んで」と恭しく頭を垂れた。

さて、問題は場所だった。

今回の魔王候補の娘が住むのは隣国スズカゼとの国境にほど近い村だ。《予言の絵本》によればその村に住む娘が今月末に魔力を暴走させるということであった。親は既に野盗を抱き込んで殺し終えているし、村人の祖父への差別も万全。娘が狂うのも時間の問題だった。そうなればあとはいつもどおりにやるだけだ。
しかし、今回は場所が場所だった。
国境にほど近いといったが、これは極めて『こちら寄り』の表現で、あちら側からみればその村はスズカゼ王国の領土なのだ。そんなデリケートな位置でドンパチやろうものなら宣戦布告ととられかねない。アカンナ王国が攻めてきました。返り討ちにしたらいい。そうですね。――両国の戦力はそれくらい差があるのだ。
くわえて、《予言の絵本》は国の中心から離れるほど力が弱くなっていく性質があった。即ち国境沿いでは予言がひどく曖昧になるのだ。娘の魔力暴走が今月末なのか来月初めなのかも実はあやしい

ところなのである。
とどめに国境のすぐあちら側には《戦士の街》ジソがあった。問題が起これば屈強な兵たちがすぐに駆けつけてアカンナの兵を捕虜にするだろう。そうなればせっかくの自作自演が台無しだ。それだけはなんとしても避けねばならない。
しかして王はない頭を絞って考えた。

「よし。娘を攫って王都で事件を起こさせよう」

早速、王は勇者と外務長官を呼び、拙(つたな)い計画を語って聞かせた。
「一分の隙もない素晴らしい計画で御座います、国王陛下」
勇者は模範的な解答を披露した。
「……わかりました、陛下」
いっぽう外務長官の返事は赤点スレスレだった。
翌朝、王宮・月詠の間において《遠見の水晶》が何者かの手によって割られているのを勇者が発見した。
そのニ時間後、《予言の絵本》がどこにも無いことに王が気付いた。
外務長官の屋敷がもぬけの殻になっていることが王に報告されたのは更に八時間が経った頃だった。
王宮は大混乱に陥り、魔王拉致計画は延期されることになった。
三日後、国境沿いの村を監視していた兵が報告を持って王宮に現れた。
「魔王候補の娘が誘拐されました！攫ったのは外務長官殿であります！」

◆――◆――◆――◆――◆

★予知欠落／ある少女の独白

今よりもっともっと小さいころから、わたしには空気のユラユラが見えました。
ユラユラにさわると、わたしはげんきになりました。
どうしてかはわかりません。
ユラユラにさわるとげんきになって、おとなのひとに蹴られたきずも治りました。
おなかがへっても、ユラユラにさわるとまんぷくになりました。
あるとき、ユラユラが森の木にまきついているのに気づきました。
空気のユラユラはとうめいなのに、木のユラユラはみどり色でした。
木のユラユラにさわると、いつもよりもっといっぱいげんきになりました。
でも、木は枯れました。
その日から村のひとはわたしに近づかなくなりました。
わたしはあぶない子なんだなあと思いました。
あぶなくて、ダメな子なんだなあと思いました。
だからおじいちゃんが、わたしのかわりにいじめられるんだと思いました。

あるひ、へんなひとがわたしに会いにきてくれました。
そのひとは、黒いかみのけのおじさんでした。
やさしい目をしたおじさんでした。
怖いひとじゃないのはすぐにわかりました。
おじさんはにこっとわらって言いました。
「楽しい所に行きたくないかい？」
わたしは言いました。

「おじいちゃんもいっしょじゃダメ？」
おじさんはわらいました。
「キミの幸せに必要なら、なんだって持っていくといい」
わたしはわらって、おじさんもわらいました。
わらいながら、わたしはないていました。

こんなわたしにも、すきなひとができました。

1．魔王誘拐（後書き）

ネタバレあとがきコーナー。

・外務長官シグマはこれまでもたくさんの魔王を国外に逃している。
・国外にはシグマに命を救われた有力者がたくさんいる。
・実はシグマこそがもっとも危険な魔王で、今も国家転覆を企んでいる。

こんなお話。

2．転機の光

「ねえねえ、お年はいくつなの？」
「いくつに見える？」
「うーん。わからないわ」
「今年で３６になります」
「すごおい！」
「年齢に対して凄いだなんて、いや、おじさん初めて言われたなあ」
「わたしには聞いてくれないの？」
「お嬢ちゃんはいくつなんだい」
「もうすぐ十才になるわ」
「凄いなあ。十歳かあ。十歳……うん。おじさん、心が抉られるようだよ」
「ねえねえ、あなたのお名前はなんていうの？」
「おじさんかい？おじさんはねえ、シグマ・ユーニっていうんだ」
「すてきなお名前ね！」
「ありがとう。呼ぶときはシグマでいいよ。本当は区切る箇所が違うんだけどね」
「なあに？」
「いやあ、なんでもないよ。独り言さ。ところで、お嬢ちゃんの名前はなんていうんだい？おじさんに教えておくれよ」
「わたしはね、ニュウっていうの。かわいい？」
「可愛いとも。可愛いキミにぴったりの可愛い名前だ。きっと心も可愛らしいんだろうね」
「シグマったらお上手ね！」
「はっはっは」

◆――◆――◆

うっそうと茂るたんぽぽ杉の森の中を幌馬車の隊列が進む。国外逃亡をはかる犯罪組織の一団だった。
隊列のちょうど真ん中をゆく軍用馬車の中、アカンナ王国元外務長官シグマは膝に少女を載せて歓談に興じていた。この少女こそ今次救出作戦の中心人物、魔王になる『予定』だった少女である。
少女ニュウは誘拐一日目で既にシグマに懐いていた。当初、祖父と二人で別の馬車に乗る予定であった彼女がここにいるのも、シグマと離れることを嫌がって泣いたためだ。
シグマは彼女に故郷の物語を語って聞かせ、ニュウはそれを蕩(とろ)けた顔で聞いた。
ニュウにはシグマが物語から出てきた勇者のように見えた。恋に恋する幼い彼女は突如現れた救いに憧れを見たのだった。
一方のシグマはニュウを扱いかねていた。9つの少女にどんなことを話していいものか、彼にはまるでわからなかったのである。ニュウを助けたのは打算からだ。懐かれて悪い気はしないし、実際いまの状況は彼が望んだ以上のものだが、対応に困っているのもまた事実なのだった。
シグマには夢があった。今回、彼が地位さえ捨ててニュウを助けたのもその野望のためだ。シグマの夢はアカンナ王国への復讐だった。それを叶えるためには優秀な人間と大きな力が山ほど必要となる。《予言の絵本》で見たニュウの異質さは彼が長年求めた力の一つであるように思われた。
石を踏んで馬車が揺れた。ニュウがシグマにしがみつく。シグマはニュウの頭を撫でた。
少女はエヘヘと笑い、男もまたへらりと笑った。
予言では、このままニュウを放置すれば彼女のいた村は月末にも滅びることになっていた。原因はニュウの暴走だ。それを『魔王』の所業として王と勇者が力を合わせて倒す、というのがアカンナの

描いたシナリオだった。

痛い気持ちに狂った女の子は、魔法の力をあふれさせ、村を食べてしまいました。

《予言の絵本》には挿絵と共にそう記されていた。食べるという表現はわからないが、ともあれ村一つを滅ぼすほどの力を持った個人。シグマは是非とも彼女を手に入れたいと思った。彼女は彼の復讐に必要な人材だった。――だから攫った。ヒーローを装い、これまでもそうであったように、拐かした。シグマには彼女が必要であり、なんとしてでも好かれていなければならなかったのである。

ニュウはシグマの膝の上に座り、彼と楽しく話しながらも、心の三分の一では不安を感じていた。それは誰もが一度は感じる不安、他者との距離から来る不安だった。重くないかな？迷惑じゃないかな？本当はくっつかれるの、嫌だったりしないかな？そんなことを彼女は考えていた。両親が野盗に殺されて以後、彼女の『まとも』な話し相手は祖父だけだった。話すといっても祖父は寡黙な男で、幼い少女が一所懸命に話すのに対し、しわしわの顔で頷くだけだった。ニュウには人間がよくわからなかった。ニュウはシグマを気に入っているが、シグマが自分をどう思っているのかはわからなかった。気に入られたい。しかし、気に入られ方がわからない。もっと仲良くなりたいのに、どこまで突っ込んでいいかわからなくて二の足を踏んでしまう。距離感が掴めないのだ。

このときシグマとニュウは、理由は違えど全く同じ願いを互いの胸に持っていた。即ち、「嫌われたくない」という願いを。

関所で二時間ほどとまり、いよいよ国境を越えるというところで、ニュウはシグマの腕に傷を見つけた。彼が背伸びをしたときに偶然見えたそれは、火傷の痕だった。

これが彼女の転機となる。

彼女はこのとき、余計なことは一切思わず、ただ「治してあげたい」とだけ考えた。そうして自然に彼女の手は傷跡へと伸びていた。
シグマはニュウが自分にペタペタ触るのを特段不思議には思わなかった。彼はそれを子供によくある意味のないスキンシップ行動だと思った。だが違った。

「なおれ」

ニュウが呟いた。
しかして、光は暴れた。
ニュウの体から緑色の光の線が溢れ、馬車の中を眩しく照らした。線は束になり、その束は渦となった。それはまるで、光でできた小さな竜巻だった。その竜巻をニュウは手に持っていた。彼女はそれをシグマの腕へと押し付けた。
「待て。何を――」
言葉は途切れた。ニュウがシグマの腕を握っていた。彼女は虚ろな目でシグマの腕の、ある一点だけを見つめていた。シグマは自分の腕がこれまで触れたことのないほど温かくて優しいものに包まれてゆく感覚を味わった。やがて光はおさまり、優しい熱も余韻を残して消えた。シグマは自分の腕を見つめた。そこに火傷の痕はなかった。
「あれ？」
パチリとまばたきし、ニュウが首を傾げた。不思議そうな顔だった。起きたら知らない場所にいた、とでも言い出しそうな顔だ。事実、このとき彼女は自分が何をしたのかまるでわかっていなかった。
シグマはゴクリと唾を飲み込んだ。
「すばらしい……」
彼は熱に浮かされたように呆然と呟いた。傷を治す魔法など物語を除いては聞いたこともなかった。彼は目の前の少女を見つめてただ「すばらしい」を繰り返した。

ニュウはまた首を傾げた。シグマが何を言っているのか彼女にはさっぱりわからなかった。しかし次の言葉は彼女の心に届いた。
「ああ、なんて素晴らしいんだ。僕は――キミが欲しい」
「ええっ！？」

この先ながい時間をともに過ごす二人の、最初の勘違いであった。

◆――◆――◆

★命廻す娘／ニュウの独白

たいへんなことになりました。
シグマに愛のこくはくをされました。
シグマとお話をしていて、ちょっぴりねむたくなって、はっとしたらこくはくでした。
シグマはすっごくシンケンな顔をしてました。
あたまがふらふらしてよくおぼえてないけど、すごいことを言われた気がします。
「キミが欲しい。キミさえいればなにも要らない。愛しているよ、ニュウ」
たぶんそんなかんじのことを言われました。
おぼえてないけど、だいたいそんなかんじでした。
どうしよう。どうしよう。うれしい！
わたしはあんまりかわいくないけど、シグマはかわいいって言ってくれます。
シグマはわたしをさらってくれた勇者さまだから、そばにいるとほこほこします。

わたしはシグマが大好きで、シグマもわたしが大好きです。
わたしたちは好きどうしになりました。

好きどうしのお話をいっぱいしようと思ったのに、シグマはお外にいっちゃいました。
いま、お外でシグマのけらいのひとたちと、せきしょの兵隊さんがさわいでます。
「今の光は何だったんだ！」
「説明してくれ！危険なモノを通すわけにはいかない！」
「魔法を使った新型の馬車が故障してしまっただけですよ。なにも問題はない」
「そんな嘘で我々を騙せると思っているのか！」
わたしは、シグマ早く帰ってきて、と思いました。
シグマと恋人のお話をしたいなあと思いました。
シグマに頭をなでてほしいなあと思いました。
おじいちゃんにも教えてあげようと思いました。
おじいちゃんはいつもわたしを心配するから喜ぶなあ、と思いました。
わたしはむねがいっぱいになりました。
おひさまのたくさんあたった土になったみたいな気持ちです。
わたしはいま、とってもしあわせです。
これからもっともっとしあわせになるんだなあ、と思いました。
シグマのかくれがにつくのが楽しみです。
ちょっとだけ涙が出ました。

わたしでもしあわせになれるんだなあ、と思いました。

3. 気配

「シグマのかみのけは真っ黒ね」
「黒い色は嫌いかい？」
「好きよ。夜の色だから。夜はみんなねむるから、誰もわたしをいじめないの」
「……ニュウの髪も可愛いよ。とても素敵だ。夕陽を浴びた麦畑の色だ」
「わたし、シグマと一緒にいると、たのしいわ。おなかとおむねの真ん中がふわふわするの」
「そんなこと言われると、おじさん照れちゃうなあ」
「ねえシグマ。シグマのおひざに乗ってもいい？」
「かまわないよ。おいで、ニュウ」
「くっつくの、イヤじゃない？」
「嫌じゃないよ。どうして？」
「イヤだったら、ちゃんとゆってね？わたし、シグマにきらわれたくないわ」
「同じだね。おじさんも、ニュウには嫌われたくないよ」
「シグマ、ずっといっしょにいてくれる？」
「はっはっは。ニュウと一緒にいられなくて困るのは、おじさんの方さ」
「わたし、いま、とっても幸せよ」
「……」
「？」
「……ところで、ニュウ。キミはさっきの、緑色の光を覚えているかい？」
「さっき？わからないわ。いつのおはなし？」
「いや」
「？」

「……わからないなら、いいんだ」

◆――◆――◆

国境を越え、アカンナ王国からスズカゼ王国へ。
多額の贈賄により関は難なく越えられた。金貨三十枚の支出をシグマは別段惜しいと思わなかった。減った財の補填は同志に任せておけばよい。それは、自分の役割ではない。なにより今、彼の手の中にはニュウがいる。この娘の力は貴重なものだ。金などいくらでもつかってやろう。――シグマの心は半分が凪のように穏やかであり、もう半分は血に酔った牛のように興奮していた。
「ニュウ、食べたいものはないかい？欲しいものは？なにかあったら、なんでもおじさんに言うんだよ？」
「シグマにいっしょにいてほしいわ」
シグマは駆け引きの笑みを浮かべ、ニュウは純粋に彼の言葉を喜んで笑った。
「キミは、本当に素晴らしい子だ」
――まずは、この娘の力がどういう類のものか調べなくては。
シグマは幼い少女を膝に抱きながら、アジトに戻った後のあれこれに思いを馳せた。
――かくれがについたら、シグマのお部屋を見せてもらおう。わたし、こんなにぽかぽかでいいのかな……。
ニュウは男の膝の上で、幸せな現在に涙を零した。
「お、おいおい。どうしたんだい、ニュウ？おじさん、なにか気に障ることを言ったかな？」
「ううん、ちがうの……。ただ、胸がいっぱいで……幸せがくるしいだけ」
「……」

馬車は進む。アジトへ向けてゆっくりと。

◆――◆――◆

「昨日のあれ、何だったんでしょう？」
「昨日のって、あの、緑色の光のことか？」
隊列で進む幌馬車の中、二人の男が話し合う。
まだ１７の針金みたいに細い少年と、４０過ぎの大男だった。彼らは組織の中でも特に大きな力と役割を持った二人である。
「ええ。大将の馬車でしたよね。あんなの、見たこともありません。大将、またなにかすごい道具でも発明したんでしょうか？」
「いや、おそらく違うだろう。大将の馬車にはあの娘が乗ってる。光の原因は娘だろう」
少年は絶句した。やがて彼は語気を荒げて言った。
「なんですかそれ！そんなの聞いてませんよ！彼女にはおじいさんと一緒の馬車が用意されていたはずでしょう？どうして教えてくれなかったんだ……危険すぎる。今すぐにでも――」
「落ち着けエータ。大将には大将の考えがある。俺たちには決して届かない考えだ。彼は遠い人だ。あの人が自ら娘を近くに置いたというなら、それは必要なことだったに違いない」
「でも、もしも大将の身になにかあったら僕は……」
「だったらどうする。あの娘を殺すか？大将が外務長官の地位を失ってまで『救った』あの娘を」
その言葉に少年エータはたちまち黙り込んだ。シグマによって救いだされた。その境遇は二人も同じであった。大男は岩のような手で少年の頭を何度も叩いた。
「俺たちは俺たちの仕事をしていればいい」
この無骨な男は、これで優しく撫でているつもりなのである。エ

ータは苦笑し、岩のような手を押しのけた。
「痛いですよ、先輩」
大男はむう、と唸って手をおろした。少しだけ残念な気分である。彼はエータを息子のように思っていた。エータもまた大男を父のように慕っていることを、彼は知らなかった。
もうすぐ、と大男は言った。「あれだな、アジトに着くな。準備をしておけよ」。実に不器用さがよく出た声だった。「了解です、先輩」とエータは答えた。
エータは自分たちの旗頭と同じ馬車に乗る幼い娘のことを考えた。自分と同じく魔王にされるはずだった少女のことを。自分とは違い、一歩手前で救い出されたニュウのことを。
優しくしてやらなきゃな、と彼は思った。大将もきっとそうするだろう。僕や他のみんなと同じく、可哀想な境遇の子なんだ。怖がらせるようなことをしちゃいけない。エータは少女を害そうとした自分を恥じた。
――大将が僕らにしてくれたように、僕もあの娘に優しくしてあげなきゃ。

また一つ、勘違いの種が生まれた瞬間であった。

◆――◆――◆

「あれがシグマのかくれがなのね！」
アジトが見える位置まで来るとニュウは馬車から顔を出して大はしゃぎであった。
「大きい！すてき！おばけが出そう！」
「おばけでそんなに喜ぶ女の子は、おじさんちょっと、初めて見るなあ」

その屋敷は山の麓(ふもと)に立っていた。いちばん近くの街まで一日かかるという巫山戯た立地条件で、まさしく隠れ潜(ひそ)むための不動産であった。
「シグマは見ないの？窓、かわる？とっても大きいのよ！」
「ニュウが見てていいよ。懐かしくはあるけど、おじさん、もう何度も通ってるから。ただ、あんまり身を乗り出して落ちないようにね。そこだけ気をつけなさい」
「はーい！」
気をつけるように言いながらも、シグマの中にはニュウの背中を押してやりたい衝動があった。この娘の力はどの程度まで傷を治すんだ？過去の火傷の痕程度のものまでか？或いは、走行中の馬車から落ちたような大怪我でも――
そこでシグマの思考は遮られた。
「――閣下」
軍用馬車の屋根に取り付けられた『受話口』から、シグマにだけ聞こえるように声がかかった。不自然なまでに感情の色の無い声だった。組織一のシノビの声だ。彼の顔を知る者はこの組織にシグマ一人しかいない。
ご苦労、とシグマは答えた。
「確認を終了いたしました」
「どうだった」
「屋敷にも、アジト周囲にも不審な者はいません」
「わかった。さがれ」
「はっ」
音もなく、頭上からシノビは消える。
シグマは溜息をついた。味方だとわかっていても、死角から声をかけられるのはどうにも心が気が落ち着かなかった。やがてニュウが頭を引っ込め、振り向いた。彼女は満面の笑みを浮かべて言った。
「もうすぐよ、シグマ！もうすぐつくの！楽しみね！」
そうだね、とシグマはこたえた。

「ニュウは元気いいなあ。おじさん、元気のいい子は大好きだよ」
「わたしも、シグマのこと、大好きよ！」
シグマは未(いま)だ少女に懐かれていることに安堵し、ニュウは『恋人』に愛されていることを確認して喜んだ。
「シグマ、わたしにかくれがを案内してくれる？」
「おじさんでいいのかい？まだ話してないだろうけれど、エータやラムダや、ロー……はいないけど、若くて恰好いい男が、おじさんの仲間にはいっぱいいるんだよ？強いのがいいならガンマもいる」
「わたし、シグマがいいわ。いちばん素敵なのはシグマだって、知ってるもの」
「はっはっは。参ったなあ。そんなこと言われたら、おじさんニュウにメロメロになっちゃうよ」
「めろめろ？」
「遠い国の言葉で、好きで好きでたまらないって意味さ」
「シグマはわたしのこと、めろめろ？」
「そうだね。ニュウにメロメロだ」
「わたしもシグマのこと、めろめろよ！」
「はっはっは。女の子にそんなこと言われたの、おじさん初めてだよ」
やがて馬車がとまった頃、そうだ、とニュウが言った。シグマは彼女を膝からおろし「なんだい？」と聞く。そうして彼女はシグマの度肝を抜いたのだった。
「さっきの屋根のひと、シグマのおともだち？ぜんぜん『けはい』がなくて、すごかったわ！」

◆――◆――◆

★感じ取る者／ニュウの独白

かくれがにつきました。
そばで見ると、とっても大きくて、わたしもおじいちゃんもびっくりしました。
かくれがなのにかくれてないなあと思いました。
シグマはわたしを抱っこして、かくれがを案内してくれました。
シグマは雨のあとの森のにおいがするから、抱っこはうれしいなあと思いました。
かくれがのおやしきには、お部屋がいっぱいありました。
メイドさんもいました。５人も！
すごい！お金持ち！
エータっていうお兄さんが丸い甘いのをくれました。アメっていうんだって。
ガンマっていうでっかいおじさんはヒゲもじゃでこわい顔でした。でも、やさしいのはすぐにわかりました。かたぐるまって、はじめてされたわ！
クシーっていうメイドのお姉さんとあったかいお風呂に入りました。
クシーはガンマのこと、めろめろなんだって！
「大将さんの方針でね、ここでは毎日お風呂に入るんだよ。凄いでしょ？」
わたしは、毎日あったかいお風呂に入るなんてお金持ちだなあと思いました。
クシーはわたしに服をくれました。かみのけのくしもくれました。
クシーは「妹ができたみたいで嬉しいわ」と言いました。
わたしは、うれしいのはわたしのほうなのにへんなの、と思いました。
ごはんはみんなで食べました。

かくれがにはいっぱい人がいました。
みんなシグマのなかまなんだって。みんなシグマが大好きみたい。
でも、シグマの恋人はわたしなのです。ひょーい！

わたしとおじいちゃんは、なんと、お部屋をいっこもらいました。
きれいなお部屋で、ベッドもイスも二つありました。
わたしもおじいちゃんも、今日からみんなのなかまなんだなあと思いました。
これからはおじいちゃんがいじめられないからうれしいなあと思いました。
いま、おじいちゃんはぐっすりねむってます
わたしもねむるところです。
でも、わたしはねむりたくないなあと思いました。
ぜんぶゆめだったらイヤだなあと思いました。
だんだんねむたくなってきました。

明日も、このおやしきで、起きられたらいいなあ。

3．気配（後書き）

4．どんぐりの約束

「シグマは鳥が好き？」
「大好きだとも」
「なんの鳥が好き？」
「焼き鳥だね。おじさん、あれには目がないんだ」
「やき、とり……？それは、キレイなの？」
「ああ、濁った肉汁がとっても綺麗だよ。冷えた麦酒と一緒にやるのさ」
「シグマは鳥が大好きなのね」
「はっはっは。愛していると言っても過言じゃあないね」
「わたしとどっちが好き？」
「ニュウに決まってるじゃないか。おじさん、焼き鳥七本よりもまだニュウのことが好きだよ」
「わたしもシグマのこと、大好きよ！どんな鳥よりも好き！」
「なんとまあ、嬉しいことを言ってくれるじゃないか、こいつめ」
「えへへへ」
「ニュウは、どんな鳥が好きなんだい？」
「わたしはどんぐりが好き！」
「……うん？」

◆――◆――◆

スズカゼ王国南部、モルイの街から馬で一日。近くに家はなく、周囲は木ばかり岩ばかり。ちょっと歩けば川こそあるが、魔物が出てきてさあ大変。山に登れば鳥の化け物が炎を飛ばしてお出迎え。そんな立地の素敵な隠れ家は、名を《どんぐり屋敷》といった。名

付け親はこの隠れ家の『大将』ことシグマである。仲間内でひっそりとおこなわれた命名式の際には、その奇妙な語呂を巡って以下のようなやり取りがあった。
「大将、どんぐりって何です？」
「随分と男らしさを感じる響きですが、どういう意味なんです？」
「獣の名前じゃなかろうか」
「ええ。大将さんがお決めなったんですもの、きっと魔獣かなにかですわ」
「案外、鳥だったりせんかね？世にも美しい玉模様の羽をもつ青き大鳥。目は爛々と輝き、鋭い嘴を持つが争いを好まない。――そんな鳥がいたら、まさに『どんぐり』の名に相応しいと思うんじゃが」
「それだ」
「それだな」
「ぜったいそれだ」
「それに違いない」
「異議なし」
「……そうでしょうか？私は、御主人様のことですから、木の実かなにかだと思うのですが」
「それはない」
「ないね」
「どんぐりなんて木の実、聞いたこともねえよ」
「これだからラムダは」
「ラムダは本当に顔だけの奴だよ。ガキの頃からそうだった」
「みんなすまねえな、うちのラムダが。こいつは本当に顔だけの男だから」
「私がいったいなにをしたと言うのか……」
実はひとり正解者がいたのだが、それを知るシグマが「秘密にしとくよ」とお茶を濁したまま席を立ったため、仲間たちはどんぐりの正体を「なにやら綺麗な鳥」として納得することを選んだ。彼らはああでもないこうでもないと架空のどんぐりについて語り合い、

屋敷の正面扉に大きな鳥の絵を描いた。作業には八時間もの時が要された。彼らはシグマを正面玄関に呼んだ。見てください大将、どんぐりです。そんな言葉とともに掛け布は取り払われた。その先にある美しい絵を見つめてシグマはぽつりと一言、呟いた。

「完全にクジャクだこれ」

仲間たちにその言葉の意味はわからなかったが、彼らは笑うシグマを見て、「やはりどんぐりは鳥だったのだ」と満足した。これ以後、彼らの間でどんぐりは神聖なものとして考えられるようになり、どんぐりという言葉は生き様の美しさや振る舞いの麗しさを表現する最上級の褒め言葉として用いられるようになった。街におりたときにも彼らがそんな言葉を使うので、今やモルイの街にどんぐりの意味を知らぬものはなかった。

「おまえは本当にどんぐりだな」

「ありがとよ。おまえこそどんぐりだぜ」

「儂も若い頃はどんぐりじゃった」

「聞いてよ。靴の直しを頼みに行ったら、そこの店長さん、あたしのことどんぐりだって！」

「やだ、それきっとあんたに気があるのよ！」

今ではそんな会話をあちこちで聞くことができた。

シグマだけはどんぐり呼ばわりされることをひどく嫌ったが、仲間たちは彼の態度を謙遜と褒めた。俺たちの大将は強くて物知りで、おまけに謙虚だ。彼こそまさにどんぐりだ、と。

そんなどんぐりどんぐりしたどんぐり屋敷の庭で二人の少女が洗濯物を干していた。

一方は栗色の髪のメイド。１６になったばかりの恋する乙女、クシー。もう一方はストロベリー・ブロンドのあどけない子供。今年で十歳のニュウである。二人は出会って一日でだいの仲良しに、三日が経った今ではオレンジ水で義姉妹（ぎきょうだい）の盃（さかずき）を交わし友達以上恋人以上家族以上の関係にまでなっていた。今はクシーの仕事をニュウが手伝っているところであった。

「クシー、これでおしまいよっ」
ニュウは籠(かご)から最後のシャツをとり、クシーにはいと渡して言った。
「ありがとう、助かったわニュウ。ニュウは本当にどんぐりね」
「どんぐり？」
「偉いっていう意味よ」
「わたし、どんぐり？」
「ええ、ニュウはどんぐりよ」
「それなら、クシーもどんぐりだわ！」
「ありがとう。でもね、ニュウ。このどんぐり屋敷で一番のどんぐりは――」
「？」
「――ガンマさんよ！あの人はまさにどんぐり！どんぐりの中のどんぐりだわ！あの逞(たくま)しいお髭と筋肉……ああっ、なんて素敵なのかしら！」

「なんて素敵なのかしら！」
テーブルに身を乗り出してニュウが歓喜の声を上げた。
クシーは苦笑し、そうね、とニュウの頭を撫でた。
「わたし、シグマの役に立てるのね！」
「ニュウったら、ほんと、大将さんが大好きなんだから」
「ええ、めろめろだわ！」
朝の仕事をひと通り片付けた二人は、居間で仲良く『おべんきょう』をしているところであった。どんぐり屋敷では、シグマの案で『義務教育』という制度が生活方針に取り入れられている。即ち、「子供だろうが大人だろうが、ある程度の知識は持っておかなくちゃ駄目だよ」というお話である。
「僕も『ここ』に来たばかりの頃は苦労したもんさ。ものを知らないってのは、つらいよ。女の子は特にそうさ。この世界じゃ女に学は要らないなんて言われてるけど、それって、考えないお人形さん

を欲しがる人たちの主張だからねえ。そんな人の所に貰われていった後のことを考えてごらん？」

１１歳でここに来たクシーには、シグマのそんな言葉が恐怖の呪文に聞こえたものだ。

今は読み書きのできないニュウにクシーが文字と算数を教えているところであった。一日一杯までと決められているオレンジ水をこっそり二杯ほど飲みつつ彼女たちは熱心に教え、教わっていた。とりわけ集中力が化け物じみているのはニュウで、彼女はみるみるうちに字と単語、簡単な文、そして数字と足し算・引き算を覚えていった。乾いた土のように知識を飲み込んでいくニュウが面白くて、クシーは彼女に知識の水をどばどば与えた。ニュウは瞬く間にそれを飲み干した。

ニュウの並外れた集中力の原因となっているのは勿論、シグマであった。クシーが「読み書きができたら大将さんの役に立てるわよ」と言い終えた瞬間、ニュウの脳は最高のパフォーマンスでもって演算を開始していたのだった。大好きな恋人の役に立てる。大好きな恋人が喜んでくれる。いま、学習以外のことでニュウの頭にあるのはそんな思いだけだった。

今日の分の『おべんきょう』を終えたニュウは、クシー以外のメイド四名と庭で遊んでいた。クシーがいないのは、彼女が『じゃんけん』で負けてジャガの芽取りの当番になったためだった。

今やっているのはゴンギンである。ゴンギンはこの大陸の子供なら奴隷でもなければみんな知っている、石と葉っぱを使った簡単な点取り遊びだ。ニュウはこれをメイドたちに教えてもらっていた。ゴンギンでもしましょうか、とメイドの一人が言い「なにそれ？」とニュウが聞いた時など、みな一様に悲しげな顔をしたものだった。

ゴンギンが三ゲーム目に突入した丁度その時、ニュウが突然顔を上げた。

「――いる」

森の一点をじっと見つめてニュウが呟いた。
「どうしたの？」
メイドのリーダー格、ファイが聞いた。楽しくなかったのだろうか、と彼女は思った。ニュウは森のある一点をただじっと見つめている。「どうしたの、ニュウ？」。ファイはもう一度聞いた。ニュウは顔をあげ、ファイを見上げて森を指さした。
「森に誰かいるわ。二人。こっちを見てる」
メイドたちは顔を見合わせ、やがて笑った。彼女たちは次々にニュウを「すごい」「たいしたものだ」と褒めた。ニュウはわけがわからず、「なんのこと？」と聞いた。
やがてファイが言った。
「ニュウ、あんたは森に人がいるのがわかるのね？獣じゃなくて、人が」
「わかるわ」とニュウはこたえた。
「それはどんな人？」
「クシーより少し大きい女のひとと、シグマよりちょっとだけ小さい男のひとだわ。イヤな感じとか、怒ってるわけじゃなくて、ただこっちを見てるの」
「……驚いた。そこまでわかるの？」
ファイは呆れて溜息をついた。こいつは本物だ、と彼女は思った。残りの三人も一様に驚いていた。ファイはニュウの頭を撫でた。ニュウは喜び、エヘヘと笑って目を閉じた。
「それは、見えるの？」
「ううん、ちがうわ。感じるの」
ファイは確信した。目の前の少女が只者ではないことを。ファイ自身、九年前に魔王に仕立て上げられた化け物もどきだ。『そういった』素質は充分に持っている。しかし、そんな彼女からでさえニュウの才能は常軌を逸して見えた。ファイは言った。
「ニュウ。あたしにはわからないけれど、たぶん、あんたが感じてるのはシノビの人たちよ」

「シノビ？」
「ええ。悪意は感じなかった――つまり、嫌な感じはしなかったんでしょう？」
「しなかったわ。どっちかってゆうと、ほわほわして、やさしい感じよ」
「だったらやっぱり、それはシノビだわ。シノビの人たちは昼も夜も交代で、影からこのお屋敷の周囲を守ってくれてるの。あんたはシノビを見つけちゃったのね」
「わたし、悪いことしちゃった？」
「まさか。悪いことなんかじゃないわ。ただ、仲間以外には言っちゃだめ。これはあたしとの約束。いい？」
「わかったわ。わたし、約束する」
「じゃあ、指切りげんまんしましょ」
「ゆびき、げん……なあに？」
「指切りげんまん。大将さんの故郷で、平民同志が神聖な約束を交わすときにする簡略化された儀式行為なんですって」
「シグマの！？やるわ！ユビキリげんま、やる！」
「ニュウちゃん、あたしとも指切りしようよ」
「あ、じゃあわたしも」
「指切りげんまんと聞いちゃあ黙ってられねえなあ。ひひひ」
こうしてニュウはメイド四人と神聖な約束を交わしたのだった。
この後、遅れてやって来た姉貴分が仲間はずれにされたと拗ねるのだが、それはまた別の話である。

◆――◆――◆

「やられたな」
「やられましたね」

「まさか、あれほどまでとは」
「でも、目標ができましたね」
「ああ。俺もまだまだ修行不足だとわかった。成長してやるさ、あの嬢ちゃんに見つからないくらいにな」
「頑張りましょう、先輩」
「おう。宜しく頼むぜ、相棒」
「ところで、話は変わるんですけど、明日の非番、わたしと一緒に――」

どんぐり屋敷の見える森の中。シノビの二人がなにやら悪くない雰囲気を作っていたのだが、これもまた別の話である。

◆――◆――◆

★ニュウの日記

くしい　は　とつても　やさしい　です。
くしい　は　がんま　が　めりめり　です。
しぐま　は　かっこうよい　やさしい　どんぐり。
わたし　は　しぐま　が　すきです　ます。
ふあい　と　みんな　と　ゆびきげまりん　したです。
おじいちやん　は　おさけ　すきです　ました。
しのび　は　どんぐり　ですか。
きよう　も　たのしかつた　でした。

おやすみなさいました。

5. 結婚

「シグマ、こどものお名前はなにがいい？男の子と、女の子よ」
「エータの奴だな。今度は何を拾って来たんだ？」
「シグマ、お名前よっ。お名前、なにがいい？」
「……わかったよ。まったく、ニュウには敵わないな。いいよ、好きに名前をつけなさい」
「ちーがーうーの！シグマにつけてほしいの！」
「えーっ、おじさんかい？おじさん、動物飼ったことないんだよ」
「むうぅ」
「わ、わかった。決めるよ。いま決めるからね。おじさんすぐ決めちゃうぞ。……あー」
「……」
「うー……イエシゲ……ヒデタダ……ヨシムネ……」
「……」
「た……タロウ、ってのはどうかな？」
「タロウ？」
「そう、タロウだ。タロウ……いい響きじゃないか！おじさんの生まれ故郷ではね、男の子に付けられる最もポピュラーな名前の一つがタロウなんだ。いや、むしろ全ての少年がタロウであると言っても過言ではないくらいさ！空も飛ぶ！」
「すてき！タロウ……うん！カッコいい気がするわ！」
「はっはっは。そうだろう、そうだろう。おじさん動物いっぱい飼ってたからね」
「シグマ、女の子は？」
「ハナコで」

◆――◆――◆

「いやはや、さっぱりわからないなあ」
「さっぱりなの？」
「さっぱりだね。さっぱり妖精さ」
「さっぱりょんせってなあに？」
「遠い国の妖精だよ。なんだかよくわからないことがあったときに、どこからともなく現れて消えていくだけの可愛い奴さ。ぐるぐる模様の扇子を持ってる」
「せんす？」
「扇子っていうのは、風を起こす道具だね」
「シグマはせんす、見たことある？」
「あるとも。竜巻を起こしたこともある」
「すごおい！」
「そうだろう、そうだろう」
「さっぱりょんせは？シグマ、さっぱりょんせは見たことある？」
「さっぱり妖精かい？もちろんあるとも。おじさん、あれの唐揚げが大好物でね。運ばれてきたらすぐにレモンをかけちゃうよ。みんなが取り皿に取り分ける前にかけて顰蹙（ひんしゅく）買っちゃう。そりゃあもう大顰蹙さ」
「すごおい！」
「はっはっは。そうだろう、そうだろう」
「また大将はわけのわからんことを言う。ニュウが真に受けるでしょうが」
どんぐり屋敷で最も見晴らしのいい部屋、シグマの書斎で三名の紳士淑女が歓談していた。シグマ、ニュウ、ガンマの三人だ。彼らはニュウの持つ『不思議な力』について話し合っていた。そして脱線していた。ニュウ誘拐及び『緑の光』の一件から既に六日が経過していた。
その間、シグマはニュウに嫌われない限りのあらゆる実験をおこ

なっている。しかし収穫は殆どゼロ。緑の光の正体はわからず、ニュウを喜ばせるだけの結果となっていた。わかったことと云えば、ニュウの『生き物の気配を察する力』が異常に高いということだけである。それにしたってシグマのいない所でばかり発揮されるのだから、彼としてはたまったものではなかった。一方のニュウは『年上の素敵な恋人』に毎日かまってもらえて幸せであった。

ニュウはシグマに一つだけ隠し事をしていた。それは『ユラユラ』のことだった。彼女はなにもない宙空や植物に『よくわからないゆらゆらしたもの』が漂っているのを見ることができた。ユラユラにはそれぞれ薄く色がついており、色の着いた部分を意識して触れるとなぜか元気になるのだった。どんぐり屋敷に来てからのニュウは肉体精神ともに『元気』である。だからユラユラには触れていない。彼女はこのアジトの仲間たちに、とりわけシグマにはユラユラのことを知られたくなかった。嫌われるのは嫌だった。また『あの目』で見られるのは嫌だった。この幸せな場所を失えば、自分という生き物はただ生きるだけの物になってしまうのではないか。そんな気がしていた。

「……こりゃあ、失敗だったかなあ。まったく、僕はいつもこうだ」

シグマは小さく呟き、自嘲の笑みを浮かべた。その様子にニュウとガンマが首を傾げた。

「なにか言いましたか、大将？」

「シグマだいじょうぶ？おなかいたい？」

シグマは胸の内で苦笑し、いつものとぼけた笑みを浮かべた。

「いやあ、おじさんちょっとお昼寝したくなっちゃったよ。昨日あんまり寝てなくてね。あー二時間しか寝てないわー。実質二時間しか寝てないわー」

「なっ！？なんてことを！早く部屋に戻って寝てください！大将はいつもいつも無理しすぎなんだ！大将になにかあったら俺たちはどうすればいいんだ！」

「シグマ寝なきゃだめ！寝なきゃだめ！」

「え？あ……うん。わかりました」
シグマは押されるようにして書斎を出た。冗談の通じない善人ほど厄介なものはない。心を刺す小さな罪悪感を彼は努めて無視した。
「眠くなんてないんだがなあ。……ま、いいや。書類整理でもしますかね」
三時間後、夕食に呼びに来たメイドのファイが部屋の戸を開けて絶句した。
「大将さん、寝ずに仕事してたわ！」
どんぐり会議（家族会議のどんぐり屋敷版）が開かれた。ファイは怒り狂った。ガンマとエータは呆れ返った。ニュウはシグマ死なないでと泣いた。クシーがそれを慰めた。シグマは皆に叱られた。

◆――◆――◆

どんぐり屋敷にもすっかり馴染んできた誘拐八日目の朝、ニュウはシグマの部屋へとずんたか向かった。ニュウは彼女の体にぴったりと合った小さなエプロンドレスを着ていた。クシーのお古を彼女が作り直してくれたものである。これを着てシグマを起こすのがニュウの朝一番の仕事だった。
ニュウは二度ノックして戸を開けた。返事がなくても入っていいよ、とはシグマの言葉である。彼はアカンナ王国への復讐のため、ニュウに嫌われるわけにはいかなかった。しかしてニュウはこの言葉を特別な意味に受け取った。かけられた言葉そのものも「恋人なんだから当たり前じゃないか」というキザな台詞が後付けされるかたちで変換され脳へと収納された。頭の中のシグマは目がキラキラしており、男前度が九割ほど水増しされていた。それでも水が溢れないあたりがシグマであった。断っておくが、器が大きいという意味ではない。

シグマは枕を抱いて寝ていた。彼の目は険しいふうに閉じていた。それなのに口はだらしなく開いていた。よだれも垂れていた。黒い髪はボサボサで、顎には髭がちょっと生えていた。それがニュウにはどんな美男子よりも恰好よく見えた。クシーの前では言わないが、ガンマでは足元にも及ばぬ男前に思えた。

しばし幸せな気持ちでよだれおやじを眺めたニュウは、やがて我に返って職務を思い出した。

ニュウは飛んだ。

もちろん着地点はシグマの上。この起こし方はファイに教わったのだった。

インパクト。「むぐう！」とシグマが意味のない呻きを発した。

「シグマ、起きてえ！えいっ、えいっ、えいっ！」

ニュウは舌っ足らずな声をあげ、シグマにのって跳ねた。シグマは寝ぼけた頭でこの暴挙をやめさせる方法を考え、ニュウを布団の中に引きずり込んだ。

シグマの腕の中でニュウはふるえた。それは果てしない喜びからくる魂の震えだった。

――けっこんだわ！

ニュウはシグマを抱き返した。手が背中を回り切らないのが残念だったが些細なことである。

ニュウはクシーやファイや他のメイドたちから『けっこん』の話をよく聞いていた。ニュウは『けっこん』を正しく理解していた。即ち、『けっこん』とは布団をかぶって抱っこすることだ。これを毎日するのが『ふうふ』である。

この日からニュウは、シグマを起こす前に彼の布団に一度潜り、彼のからだをぎゅっと抱きしめることになる。結論から言うと、この行為はニュウが真実を知るまでの二年間ほぼ毎朝続けられる。

しかし朝に弱いシグマがこれに気付くことは終ぞなかった。

◆――◆――◆

★ニュウの日記

わたしは　しぐまと　けつこんしました。
わたしは　しぐまと　ふうふします。
くしいは　すごいねえつぎわたしばん　といいました。
ふあいは　やつぱりそゆうしみだたか　といいました。
くしいと　ふあいは　にこにこしました　です。
おじいちやんは　しぐまに　よろしくおねがいます　といいました。
ふうふは　こどもが　つくります。
わたしは　こどもが　ふたり　ほしい　ます。
わたしは　おとこのこと　おんなのこと　いいです。
わたしは　うれしいなあ　とおもいました。
わたしは　たのしいなあ　とおもいました。

ねるます。
おやすみなさい。

6．気付き

「シグマ、シグマ」
「なんだい、ニュウ」
「屋根の上に、だれかいるわ」
「――えっ？」
「あのね、みんなでここに来るときに、馬車のうえにいた、シグマのおともだち」
「おじさんにはわからないけど……あいつ、いま屋根の上にいるのかい？」
「いるわ。じっと立って――あっ、いなくなっちゃった」
「いや、驚いた。ニュウは凄いな。あいつの気配まで感じ取れるのか」
「『けはい』じゃないわ。シノビのひとよりずっと静かで、とうめいな、もにゃもにゃした感じ」
「彼はね、シノビの隊長さんなんだ」
「たいちょうさん？」
「シノビでいちばん偉い人さ」
「すごいの？」
「すごいとも。いつもおじさんのことを、影から守ってくれてるんだよ」
「シグマだけ？」
「はっはっは。おじさん、敵が多いからねえ。それにおじさん、弱っちいから」
「たいちょうさんがいたら、シグマは大丈夫なの？死なない？」
「死なないとも。あいつはとんでもなく強いからね。ニュウが来るまでは、誰にも気付かれずに僕を守ってくれてたんだよ。もしかしたらあいつ、落ち込んでるかもしれないな。小さなレディに見破られちゃったぞ、って」

「れで？」
「女のひとのことさ」
「ふうん。――ねえシグマ。わたし、たいちょうさん、好きだわ」
「……うん？」
「だって、シグマを守ってくれるひとだもの。シグマと、クシーと、ファイと、おじいちゃんと、みんなの次に好き！」
「ああ。……それじゃあ、そう伝えておくよ。あいつもきっと喜ぶ」
「おねがいするわっ！」

◆――◆――◆

朝ぼらけの森をシノビが駆ける。シノビは山麓に座す大きな屋敷を視界に収めると、その玄関に向けて文の筒を投げた。戸口でナイフを磨いていたガンマが気付き、それを拾う。彼は辺りを見回すと、見当違いの方向に手を振った。声はないが口が動く、いつもありがとうよ、と。
シノビは満足し、仲間たちを影から守る職務に戻った。
どんぐり屋敷の朝は早い。そろそろメイドたちが起きだす頃である。
次の休みはあいつを誘って飲みに行こう、と彼は思った。

◆――◆――◆

本日の『おべんきょう』を終えたニュウはシグマの書斎で『おままごと』をしていた。ニュウが亭主で栗（くり）が妻、きのう拾った綺麗な石ふたつが子どもだ。息子は名をタロウといい、娘はハナコといっ

た。机の下で繰り広げられる仲良し家族のほのぼのドラマには練りこまれた細かい人物設定と舞台背景があった。
　机の上ではシグマが各所に送る書状の内容に頭を悩ませていた。膝の間からときおりにゅるっと顔を出しては「おてがみおわった？」と聞くニュウに、彼はその都度「もうすぐだよ」「もうちょっとかな」と曖昧にこたえた。
　部屋の戸がノックされる。大将さん、と戸の向こうで声が言う。
　声はクシーのものだった。
「大将さん、こちらにニュウいますか？」
「いるよー、どうぞー」
　シグマは手紙を向いたまま言った。いつでもどこでも気怠さを隠さぬ男である。ぱっと顔を輝かせたニュウが机の下からぬるりと這い出る。この子タコみたいにカラダ柔らかいな、とシグマは思った。
　戸が開き、クシーが顔をのぞかせる。彼女は言った。
「ニュウに教えたいことがあるので、お借りしていいですか？」
「いいよー、どうぞー」
「ありがとうございます。ニュウ、おいで」
「はあい！」
　ニュウは元気よく答えると、ふと思いついたようにシグマの机に石を二つ、そっと置いた。彼女は言う。
「こっちがタロウで、こっちがハナコよ」
「うん？」
「二人をおいていくから、寂しくなったら撫でてね」
　そうしてシグマの背中を一度ぎゅっと抱きしめると、ニュウは書斎を出ていった。
　戸が閉まる。廊下をゆく元気な足音がする。大将さんと何してたの？秘密よ。そんな会話が届く。階段を慎重におりる音が聞こえ、やがて書斎に静寂が訪れた。
　少し考え、シグマは手紙の文面を決めた。そこが決まってしまえばあとはあっという間で、彼は一時間で全ての手紙を書き終えた。

ふわあ、とあくびし腕を伸ばす。庭からニュウとメイドたちの楽しげな声が聞こえた。
シグマは溜息をつくと、「ふむ」と呟き、丸い二つの石ころに目をやった。その一つを人差し指で撫でる。意外と表面はざらざらしていた。
「ええと、大きい方がタロウだったっけ？オレンジ水を飲み過ぎて栗に叱られていたのは、おまえだよな」
無表情で撫でられているのはしっかり者のハナコであった。

ニュウはメイドの先輩たちから、お出かけ用の靴の磨き方を教わっていた。どんぐり屋敷では、靴磨きは手の空いているメイドがする仕事であった。ニュウはその仕事ぶりを認められ、ファイより一昨日から正式に『メイド見習い』の肩書きを与えられている。見習いとはいえ、誘拐から十日目での正社員登用。これはクシーに四日も勝る記録であった。
きめ細かい泥のような専用のクリームをいらなくなった布に少しだけ付けて、靴にまんべんなく塗る。水をちょろっとかけてゴシゴシ磨く。もう一度クリームを塗る。また水をかけて磨く。ニュウは靴磨きに没頭した。力のいる作業だったが、コツを覚えると楽しいものだ。履いた人がどんな気持ちになるか考えると胸がふわふわした。
塗って、磨いて。
塗って、磨いて。
ニュウがシグマの靴を片方終えた頃には、先輩メイドたちは今日の予定分、一人二足ずつをすべて磨き終えてしまっていた。途中、ガンマの靴ばかり熱心に磨くクシーがファイに叱られるというエピソードもあったが、これは毎度のことである。ニュウがシグマの靴を両足とも磨き終えるまでには四十分の時間が経かった。最初はそんなもんよ、とファイは笑った。
「できたわ！」

「どれ、見せてみなさい」
「どうかしら？」
「あら、これ、なかなか……」
恋って凄いのね、とファイは言った。
ニュウが磨いたシグマの靴は他の誰の物よりピカピカだった。

仕事が一段落すると、ニュウはクシーから『おさいほう』を教わった。これができると男の人に大事にされるのよ、と以前に先輩メイドが言っていたことを思い出したのだ。彼女は仲間内で一番うまいのはクシーだ、とも言っていた。思えばガンマの服には色とりどりの豪華な刺繍が施されていた。
ニュウは「おねがい！」と姉貴分に頼み込んだ。「修行は厳しいぞよ」とクシーは言った。そうして笑った。
二人は庭の大きな栗の木の下で『おさいほう』をした。
「縫い物や編み物はね、着る人のことを思ってするとどんぐりよ。あっという間に時間が過ぎちゃうんだから」
「お靴とおんなじね！」
「そうね。おんなじ」
ニュウはまた一つ役立つ技を身につけて喜び、クシーは洗濯籠から勝手に持ってきたガンマの服を存分に楽しんだ。ガンマの上掛けには『花をくわえた虎』の刺繍が増えた。
独身のガンマは、しかし街では知り合いの多くに妻帯者として見られていた。顔なじみに、今度紹介しろよ、などと言われる度、彼は「誰のことだろうか？」と首を傾げるのだった。
「クシー、どうかしら？」
「うん。最初にしては悪くないわ」
栗の木の足元、二人の少女は針を動かし続けるのだった。

◆――◆――◆

「明日はラムダが帰ってくるそうだぞ。朝、シノビが教えてくれた。みんなもう聞いてるか？」
思い出したようにガンマが言った。夕食時のことである。
「聞いてないですね」とエータが言った。「朝に言ってくれればよかったのに」
「聞いてないですね」とクシーが言った。「でも、そんなガンマさんが好き」
「いや、大将には言っておいたんだがな」
「そうなんですか？」
仲間たちの目がいっせいにシグマを向いた。
シグマは気の抜けた平時の笑みを浮かべて言った。
「いやあ、おじさんすっかり忘れてたよ。はっはっは」
仲間たちはみな「嘘だな」と思った。大将のすることだ、なにか意味があるに違いない。彼らは一様にそう考えた。この屋敷の人間はここに誘拐されてきた経緯から、みなどこかシグマを英雄視している節があった。実際のところ、シグマは報告を忘れていただけである。こうした意思疎通のクロスカウンターが彼らにはよくあった。
さて、今はシノビを除いた屋敷の全員が居間にあつまり、めいめい床に座って談笑しながら今日の夕食、スープとジャガを食べているところである。研究職も営業職もメイドも、ここで暮らす限り夕飯だけはみんな揃って居間で食べること、というのがどんぐり屋敷の決まりである。シグマの方針だ。屋敷には大勢の人間が暮らしており、テーブルや椅子があったのでは居間に全員が入り切らない。そのため、夕食時だけはこうした不行儀が許されているのだった。
「シグマ、おかわりは？スープのおかわりいらない？」
「いやあ、おじさんもう、けっこう食べたからねえ」
「……そっかぁ」
「ああ、いや、もらおうかな。うん、半分だけもらおう。頼めるか

い？」
「待ってて！すぐ持ってくるわっ。えへへへ」
「うっぷ。……はいるかな」
「チビは本当に甲斐甲斐しいな。あれ絶対いい嫁になるぞ」
「おいおい、爺さんの前でそんなこと言ってやるなよ」
「ニュウが幸せなら、それ以上は望まんですじゃ」
「ニュウちゃん、俺にも頼むよ。ちゃんと肉いれてなー」
「うちのニュウを顎で使ってんじゃないわよ」
「なんだよ、じゃあファイ、おまえに頼むよ」
「いやよ。自分で立ちなさい」
「ちぇ。おーい、クシーちゃん、俺にスープ――」
「ガンマさん、お髭にスープが付いてますよ？動かないでくださいね。すぐ取りますから」
「む？いや、自分でできるが」
「あん、もう。動かないでくださいよう」
「むう」
「おーい……誰か俺にスープのおかわりを……」
「僕、持ってきますよ。ついでだから」
「エータ、おまえ良い奴だなあ……。あ、肉いれてな？」
「すいません、肉は駄目です。僕が食べるんで」
楽しいなあ、とニュウは思った。彼女はみんなが一箇所にあつまる夕飯の時間が大好きだった。食べ終わると仲間の半数は庭に出て井戸の水で洗い物をし、もう半分はテーブルや椅子をもとに戻す。この片付けの時間さえニュウには愛しく思えるのだった。

翌朝、ニュウは玄関の掃除をしながらラムダを待っていた。ラムダはニュウ誘拐作戦のあとすぐに別の仕事に向かった仲間だとシグマから聞いていた。ニュウにとっては始めて顔を見る仲間である。どんなひとかしら？おやしきのみんなみたいにやさしくしてくれるかしら？シグマの仲間だから、きっといいひとね！ニュウはわくわ

くしていた。
やがてもうすぐ昼、という時刻。馬に乗った青年が屋敷の庭へとやってくる。その『ふんいき』を感じ取ったニュウはピクリと顔を上げた。
「どうしたの、ニュウ？」
エータが言った。彼はよくニュウに砂糖の入ったお菓子をくれる。今も「あとで食べな」と飴を貰ったところであった。
「だれか来たわ」とニュウは言った。そうして首を傾げた。
「なにかしら？知ってるのに、知らない感じ。とうめいで、かたい感じ……」
「ニュウのその感覚は僕にはよくわかんないけど、たぶんラムダさんじゃないかな？今日帰ってくる予定だから。行ってみようか？」
昼時だが、料理だけはまだ許されていないニュウには仕事が無い。ニュウはエータと二人で、帰ってきた仲間を迎えに出た。
ちょうど、厩舎に馬をいれたラムダが向かってくるところであった。
「おかえりなさい、ラムダさん」
エータが言う。
「ただいま戻りました。いやあ、疲れました」
ラムダが人のいい笑みを浮かべる。ニュウは彼をじっと見つめた。ラムダは大きな荷物を持っていた。彼はクシーと同じく栗色の髪をした、キツネ目の、美しい青年だった。
「大将が、戻ったら書斎に来るように言ってましたよ。あ、荷物持ちます」
「すみませんねえ。いや、エータ君は本当にいい子ですねえ」
「ラムダさん、僕もう１７ですよ」
「おや、これは失礼」
二人が楽しげに話す様子をニュウはあることを考えながら見つめていた。やがて「うん」と納得した彼女はラムダの服をちょん、と引っ張った。

ラムダは小さな少女に目を落とし、そして丁寧にお辞儀をした。
「やあ、これははじめまして。ラムダといいます。こうして会うのは初めてですね」
「わたし、ニュウっていうの。よろしくね」
「はい、こちらこそよろしくお願いしますね、ニュウさん」
二人は笑顔で握手をした。
「わたし、あなたのこと、好きだわ。とってもどんぐり」
「おやおや、嬉しいことを言ってくれますね。私もニュウさんが好きですよ。ニュウさんだけでなく、どんぐり屋敷の人みんなが好きです」
「わたしも！」
ニュウが笑い、ラムダもまた朗らかに笑った。「気に入られましたね」とエータも笑った。
しかし、続くニュウの一言がラムダの笑顔を凍りつかせることになる。
少女は無邪気な笑顔で『おれい』を告げた。
「たいちょうさん、いつもシグマを守ってくれてありがとう！今日は『けはい』があるのね！」

◆――◆――◆

★ニュウの日記。

わたしは　きょうは　いっぱいの　べんきょうを　しました。
べんきょうは　じとかず　だけではないです。
わたしは　おくつのこするやつも　おさいほうも　べんきょうと

おもいます。
わたしは　きょうは　しぐまのおくつを　こすって　きれいにしました。
ふぁいは　じょうずだねえ　といいました。　うれしい。
わたしは　つぎは　おじいちゃんのおくつを　こする　とおもいました。
おさいほうは　くしーが　すごいかった　でした。
わたしは　くしーに　おさいほうを　おしえてくれて　もらいました。
おさいほうは　ちいさいくて　でも　たのしいです。
わたしは　おさいほうは　じょうずでは　もっとたのしいだろうとおもいました。
わたしは　がんばる　とおもいました。
あしたは　らむだ　というの　なかまが　かえってきます。
わたしは　たのしみだなあ　とおもいます。

すいみんします。
おやすみなさい。

7．事件／三人の目から

★ニュウの日記

きょうは　わたしは　ひみつです。
しぐまと　らむだと　わたしは　ひみつを　しました。
さんにんが　ゆびきりげんまんを　しました。
よるは　わたしは　おおきいのが　なくのが　ききました。
おおきいのは　うれしくて　なきました。
おおきいのは　もりに　います。
おおきいのは　おおきいのでないのが　きらいです。　とっても。
おおきいのは　どんぐりやしきも　きらいです。
わたしは　おおきいのと　みんなと　なかよくしたいなあ　とおもしました。
しぐまは　しんぱいしなくてよいよ　といいました。
わたしは　しぐまかっこうよい　とおもいました。
わたしは　しぐまに　かっこうよいのだからすきだなあ　とおもいます。
わたしは　しぐまとふうふだからがんばる　とおもいます。

ねます。
おやすみなさい。

◆――◆――◆

★クシーの独白

今日は、おかしなことがたくさんあった日でした。

朝、ファイさんの機嫌が妙によかったのがはじまりでした。

別に、いつもは機嫌が悪いっていう意味じゃなくて、むしろ普段から明るい、さっぱりした人なんだけど、それでも、鼻歌をうたったりはしない人です。それなのに、今日は朝からくるくる回って、歌ってました。

五年もここにいるけど、今日みたいなファイさんは初めて見ました。

なにがあったんだろう？

お昼には、ニュウが書斎に呼ばれました。

お昼ごはんも食べずに、大将さんとラムダさんの『秘密会議』に参加したらしいんです。

私はてっきり、ニュウが我儘（わがまま）を言って部屋に居座ったものと思っていました。あの子、普段は聞き分けがいいのに、大将さん関連のことだと、途端に頑固ちゃんになるから。

でも、どうやら今回は、そうじゃなかったみたいなんです。

これはエータさんが言ってたんですが、なんでも、帰ってすぐのラムダさんが、是非にとニュウを呼んだんだとか。ニュウはそのとき、ラムダさんを「隊長さん」って呼んだみたいです。

どういうことだろう？

ニュウとラムダさんって、接点は無いはずだよね？

それに、大将さんとラムダさんの秘密会議は、いつも二人だけでやってたのに……。

お勉強が終わってから聞いてみても、ニュウはなにも話してくれませんでした。

いちばん仲良しの、このわたしに、隠し事。

大将さんとの約束だから誰にも言えない、とニュウは言いました。
「指切りげんまんした」とまで言われちゃったら、わかった、と引き下がるしかありませんでした。
わたしにも、誰にも話しちゃいけない話って、いったい何の話だったんだろう？
気になるなあ。

夕飯の時には、山のほうから大きな音がしました。
怖がるふりをしてガンマさんに抱きつけたからよかったけど、あれ、何の音だったんだろう？
ニュウは「おっきいのが喜んでる」って言ってたけど、どういう意味だろう？
ガンマさんは音の正体を知ってるみたいで、誰か（名前は聞こえなかった）に連絡するとか言っていました。大将さんはすぐ手紙を書いて、シノビのササノハさんに渡していました。
なにか起こるんでしょうか？
ガンマさんに五月蝿い子だと思われるのが嫌で黙っていたけど、聞いた方がよかったかもしれません。
ついさっき、また山のほうから音がしました。
夜はやめてほしいです。
せっかく眠ってもあんなのが聞こえたら起きちゃうから。

それにしても、抱きついたときに触ったガンマさんの体、逞しくて、素敵だったなあ。
あーあ。
いつになったら、振り向いてくれるのかなあ。

◆――◆――◆

★ある手紙

親愛なるよぞら殿

秋麗のみぎり、ますますご清栄の趣、大慶に存じ上げます。
日頃何かと心お留めいただき厚く御礼申し上げます。

さて、誠に勝手ではありますが、相談したいことがあり、こうして筆をとっています。
私どものアジトのある山に、ツチクイモドキが出ました。
仲間が言うには、それはどうやら山に巣を作り終えてしまっているようです。
恥ずかしい話ですが、我々はそんなものが山にいたというのに、気付くことができませんでした。
知っての通り、ツチクイモドキは獰猛な魔獣です。
それらは、こちらに人があると気付けば、すぐにでもアジトを襲ってくることでしょう。
一匹や二匹ならともかく、巣を作るほどの数がいてはとても太刀打ちできません。

卑しい願いとはわかっています。
どうか私どもに力を貸していただけないでしょうか。
私どもはここを離れることができません。
どんぐり屋敷には幼い子どももおり、逃げることがままなりません。
どうか我々を助けてください。
どうか、どんぐり屋敷を守ってください。

貴殿の善意と我々の友情を信じています。

貴方の友　西熊勇

8. 理由

「わたし、シグマのこと、好きだわ」
「ありがとう」
「わたし、シグマが悲しいと、イヤだわ」
「ありがとう」
「ねえ、シグマ」
「なんだい、ニュウ」
「痛いときは、ちゃあんと、痛いって、言わなくちゃダメよ？」
「……ああ」

◆――◆――◆

二人と一人が向い合って座っている。一方はニュウとシグマ、もう一杯はラムダだ。
「参ったなあ」とシグマが言った。
「ええ」とラムダがこたえた。「参りましたね」
「へいきよ」
シグマの膝の上、オレンジ水のお椀から顔を上げてニュウが無邪気に笑った。
「わたし、だれにも言わないもの。仲間は信じるものだわ」
ラムダは苦笑し、シグマは額に手を当ててため息をついた。
どんぐり屋敷三階にあるシグマの書斎。そこでおこなわれた秘密会議での一幕である。会議の議題は『ラムダの正体ニュウにばれちゃったよどうすんのこれ』であった。
「エータ君が気づかなかったのが救いですね。彼、誠実ですが、お喋り好きでもありますから」

ラムダがお手上げのポーズで笑う。シグマはテーブルから茶をたぐり、ニュウにかからぬよう唇をつきだして啜った。やがてふう、と息をつき彼は言った。
「まったくだねえ。それにしても、おまえの正体を見破るなんて、ニュウの力は相当なものだなあ。シノビの連中でさえ、隊長とラムダが同一人物だとは誰も気付いていないだろうに」
「えへへへ。わたし、すごいっ？」
「ああ、凄いよニュウは。ちょっと凄すぎるくらいさ。おじさんびっくりだよ」
「本当ですよ。私の術は、声はおろか骨格や匂いまで変えますからね。油断していたとはいえ、御主人様と同等か、それ以上の相手でなければ見抜かれることはないと思っていたのですが……はぁ。地味に『ショック』というやつです」
「僕と同等って、それはなにも凄くないんじゃないかなあ」
「能力においてはそうでしょう。ですが、御主人様と為を貼るほどの卑怯者がいたら、私ごときでは触れることさえかなわずに負けてしまいますよ」
「あのう、あれかな。おまえはおじさんが嫌いなのかな、もしかして」
「愛していますとも」
「わたしも！わたしもシグマのこと、愛してるわ！」
「素晴らしい。それでは私たちは仲良しさんですね、ニュウさん」
「うんっ！仲良しさんだわ！」
「では仲良しさんの握手をしましょう」
「あくしゅ！わーい！」
「わーい」
「うわあい。三つ巴だと思ったら二対一だったよ。なんだろうこの気持ち……言葉にできない」
「御主人様、それは嫉妬です」
「しっと！――しっとってなあに？」

「妬き餅をやくことですよ、ニュウさん」
「シグマはわたしにしっとなの？」
「違うからね。おじさん、いたいけな幼女に嫉妬したりはしないからね」
「では、ニュウさんではなく私に嫉妬しておられるのでしょう。いたいけな幼女を奪られたように感じて、御主人様自身もお気付きでなかった淡い恋心が回転し、小さな小さな火花を飛ばしているのです。それはまさしく満月の夜を駆ける一匹の――」
「いいよそういう喩えは。おまえは何でもかんでもそういう愛とか恋とかいうものに絡めてくるなあ。なんだっけ、なんとかっていう恋愛小説が大好きなんだっけ？おじさん物覚えが悪くてちょっと曖昧なんだけれども」
「ぬ！……恋愛小説と一括りにされるのはいくら御主人様でも勘弁なりませんね。ニュウさんがいなかったらその首叩き切っているところです」
「おまえの辞書の『御主人様』の項を読んでみたいよ。どこまでヴァイオレンスな説明が載ってるか興味ある」
「ばいおれ？」
「暴力のことだよ。――なあラムダ君や、こんどおまえの辞書、おじさんに見せておくれよ」
「私が愛してやまないのはツノマル・ヒナが生み出す幼き愛の叙景的心理描写の数々です」
「あー、無視か。そうくるかあ。まあ、いいけどさ。……でも、叙景的心理描写なんて言葉は無いよね。おじさん初めて聞いたもの。断言するけど、そんな言葉はない」
「そう、かつては無かった……しかし今はあるのです！ツノマル・ヒナがその技法を大陸中に広めたのです！大陸中？いいえ、世界中に！そう、それはまさしくたんぽぽ杉の森を往く一頭の――」
「ニュウ、長くなりそうだから下に行こうか。今日はオレンジ水もう一杯飲んでもいいよ」

「いくわ、下にいくっ！シグマ、だあいすき！」
「はっはっは。嬉しいこと言ってくれるなあ。おじさんもニュウが大好きだよ。さあ、膝から下りて。抱っこしてあげようね」
「うん！」
「その代わり、あれだよ？さっきの約束は、ちゃあんと守っておくれよ？そうじゃないと、おじさんもラムダも悲しいことになっちゃうからね」
「もちろんよ！わたし、だれにも言わないわ！」
「誰にもっていうのは、この屋敷の仲間にもだよ？」
「シグマのためだもの！」
「よーしよし。それじゃあ指切りをしよう。さ、手を出して」
「うん！わたし、ゆびきりげんまん、好きだわ！」
「そうかそうか。おじさん、指切りが好きって子には、ちょっと会ったことなかったなあ」
　こうしてシノビ部隊を率いる寡黙な隊長の秘密は守られたのだった。

「――そこで彼女は言うのです！『こんなに美味しいジャガだって芽には毒があるの。完全なものなんてどこにも無いのよ』と。つまりこれは主人公の苦悩に対する……あれ？御主人様っ？……御主人さまー？どこに行ってしまったのですか？まだ話が終わっていませんよー？」

◆――◆――◆

　夕食時、ニュウは仲間ひとりひとりに皿を手渡す仕事を任された。命じたのはメイドのリーダー、ファイである。ニュウは、食事に深く関与する仕事を任されたのはこれが初めてだった。そのため彼女

は張り切った。張り切りすぎて落とした皿を床面衝突寸前でエータがキャッチする、というアクシデントも二度ほどあった。結果的に被害件数は０であるから失敗ではないとされた。小さな女の子が五枚ずつ皿を持って行ったり来たりを繰り返す光景は屋敷の仲間たちにいたく好評を博した。「こういう人形むかし見たな。なんだっけ、お茶運ぶやつ」というシグマの発言も友好的な意味合いに誤解された。ニュウは幸せな今に感謝し、それを与えてくれたシグマに感謝し、ついでに今朝から妙に機嫌のよかったファイにも感謝した。一方シグマは人形の名前が思い出せず、迫る老いの魔の手に恐怖した。

それは研究部のリーダーとの肉の奪い合いにエータが勝利を収めた、まさにその瞬間のことだった。

突如、大きな音が響いた。

びりびりと屋敷全体がふるえるような――そんな錯覚を住人たちにもたらす音だった。それは鳴き声ではなく『音』だ。どんな、と聞かれれば誰もが返答に窮する、万民を不快にさせる類の音。しかしてその音の正体と本質に気付いた者が居間には一人ずついた。前者がガンマで、後者がニュウだ。ガンマは経験から、ニュウは才能から答えを導き出したのである。

ガンマはこの音がツチクイモドキと呼ばれる魔物の発する音だといち早く気付いた。ツチクイモドキが巣に女王を迎えた時に鳴らす音であると。

一方、ニュウはこの不快な音から大いなる喜びを感じ取った。なにか大きなものが大いに喜んでいる。ニュウはそう直感した。そしてそれは限りなく正解に近い答えだった。途中の式が無いことで説得力がそぎ落とされてこそいるが、個の事実認識としては完全解答だといえた。

ガンマはすぐにシグマの元へ行き、状況を説明した。腕にクシーがぶら下がっているのがシュールであった。

「大将、こいつはツチクイモドキだ。それも、巣を張ってやがる。

場合によっては――」
「いや、いい。どうするのが最適だ？」
シグマは即座にそう聞いた。部下を頼ることを恥じる人格など彼は所持していなかった。使えない部下もまた彼は所持していなかった。ガンマはぽかんと一瞬呆けたあと、口を閉じてニヤリと笑った。彼は説明した。
「まず、シノビを走らせて助けを呼びましょう。奴らは好戦的な暴食家だ。勝てそうな生き物を見つけたら何でもかんでも殺して巣穴に持ち帰る。ここが見つかったら――」
「待て。なら先に手紙を書く。エータ、用意を。ラムダ、おまえはシノビを――そうだな、ササノハを呼べ」
シグマの指示に二人が走る。その僅かな間さえもシグマはガンマから説明を聞き、質問をした。エータが紙とペンを持って現れると、シグマは奪うように受け取り、風のような速さでペンを動かした。その間もガンマの話を聞くことはやめない。やがて二番目に足の速いシノビ、ササノハが現れた頃には、彼は状況を完全に把握し書状も包み終えていた。やってきた赤毛の女にシグマは文の筒を渡した。
「これをジソの街のアカデミーへ。ロカニ王女殿下か、騎士のヨゾラ君に直接渡し、いますぐ読めと伝えろ。なにか言われるようなら『フェイベリオスを知っている』と叫べ。周りの全員に聞こえるようにだ。それで駄目なら争ってでも渡せ」
できるか、とシグマは聞いた。命にかえても、とササノハは答えた。彼女が窓から出ようとするとき、シグマはその背中に命じた。
「必ず戻れよ……必ずだ」
血を吐くような声だった。ササノハはぴたりと動きを止め、小さく頷き闇に消えた。
もはや見えぬシノビの背中をシグマは眺め続けた。『この世界』に落とされてよりこれまで、目的のため、関係した全ての人間を利用して生きていきた彼は、しかし一度身内と定めた者にはとことん甘かった。異常なほどに。仲間が害されでもすれば、加害者の身内

すべてを害してしまうほどに。そんな彼を仲間たちがどんな目で見ているか、彼は知らない。知りたいとも思わない。想われずとも想っていればよい。彼はそう考えていた。――それだけに、仲間を危険な場所に送るのは骨ごと身を切られるような思いだった。

拳を強く握り、立ち尽くすシグマの背中をラムダは黙って見つめた。あらゆる才能をもって生まれたラムダにとって、何の才も無く頂点に立つシグマは光そのものだった。彼の過去をラムダは知っている。敗北と足掻きの繰り返しを隣で見てきた。血の滲むような努力を一瞬で踏み潰され、それでも歩き続ける男の姿をいつも隣で見てきた。その眩しさにラムダは憧れた。いつしか男は仲間を増やし、国と争うまでになった。そんな男のはじまりの理由をラムダだけが知っていた。

『あいつら――おまえを魔王にしやがった。俺の友達を虐めやがった！』

かつて友であり、今や従僕となったある男――ラムダのための復讐。

そんなものが、シグマの出発点だった。

そのために《予言の絵本》を出し抜き、《遠見の水晶》を掻い潜り、復讐に役立つ全ての『魔王』を救済（ゆうかい）してきた。何度も失敗したけれど、攫（さら）うと決めた者だけは必ず攫いだして進んできた。その男が今また苦しんでいる。仲間のために苦しんでいる。

ラムダにはそれが苦しく、誇らしく、そして眩しいのだった。

もうやめようと言えない自分が苦しく、言ったとしてもやめないかつての友が誇らしく、そうして最後までまっすぐ歩き続けるであろう主人が眩しいのだった。

万感の思いでラムダが見つめる先、ニュウがシグマに近付いてゆき、その大きな握りこぶしを両手でそっと包み込んだ。シグマはい

つもの気の抜けた顔をつくり、ニュウを見下ろした。
「どうしたんだい」
シグマは言った。
「わかるもん」
ニュウはにっこりと笑って言った。
「わたし、シグマが痛がってるの、わかるもん」
ニュウは花のように笑い、シグマは悲しげに笑い返した。
そんなことはないよ――その言葉はどうしても出てこなかった。
シグマはまだ知らない。
彼の心の深い部分で、この少女が既に身内としてカテゴライズされていることを。
「わたし、ずーっとシグマのそばにいるわ。ずーっとよ！」
少女の場違いな告白に、男は慰めと癒しの光を見たのだった。

「おい！エータの野郎、肉おとしてやがる！勿体ないだろうが！俺から勝ち取った肉をよ！」
シグマたちから離れた位置。静まり返っていた部屋の真ん中で、タイミングを見計らったように研究部のリーダーが落ちた肉を拾って食べた。
居間は爆笑に包まれた。

◆――◆――◆

★慰めの少女／ニュウの独白

シグマとラムダと、ひみつの約束をしました。
ラムダはたいちょうさんでした。すごい！

わたしはちゃんとラムダに、ありがとうってお礼を言いました。
わたしとシグマとラムダと、三人仲良しで、お約束！
約束をしたから、わたしはラムダのことを誰にも言わないのです。

よる、みんなでご飯をたべるとき、山のほうで大きいのが喜んでました。
むずかしいのはわからないけど、あぶないんだって。
シグマはとおいところにお手紙を書きました。シノビのお姉さんが持って行きました。
シグマはやさしいから、お手紙のお姉さんのこと、心配みたい。
わたしもすごく心配です。
わたしは、シグマが悲しいのはイヤだなあと思います。
シグマはやさしいのに、やさしくないことを言うから心配です。
シグマは痛いときも、痛くないよっていいます。
わたしはシグマと夫婦なので、シグマの心を抱っこしてあげたいです。

大きいのが来るかもしれないから、今日からはあんまりお外に出ちゃダメです。
シグマが出ちゃダメって言いました。
大きいのは危ないことするんだって。
わたしは、大きいのもわたしたちも仲良くすればどんぐりだなあと思いました。

ねむたくなってきちゃった。
もう寝ようっと。

9．籠城（前書き）

日間ユニークが３０００人を超えたので急遽アップ。

9. 籠城

「シグマ、これも？」
「それもだよ」
「シグマ、これは？」
「それもだよ」
「ぜんぶこわすの？」
「ああ、全部壊すんだ。全部ね」

◆――◆――◆

「気をつけてね？」
「うんっ！」
「こぼさないようにね？」
「うんっ！」
「重かったら言うのよ？」
「うんっ！」

幼女と少女が廊下をゆく。ニュウとクシーだ。二人はサイズの違うたらいを抱えて風呂へと向かう。クシーが大きいたらい、ニュウが小さいたらい。それぞれ七分目まで水が入っていた。

どんぐり屋敷の女風呂は特殊な構造をしている。特殊といえば聞こえはよい。要は井戸から遠いのである。男風呂は外にあるが、女風呂があるのは屋敷の中なのだ。男風呂が竹の水路によって井戸のポンプから直接水を入れられるのに対し、女風呂は外の井戸と屋敷の中の風呂を往復して水を貯めなければならなかった。風呂の支度はメイドの仕事である。この仕事がいちばん面倒だ、というのは屋敷のメイドの総意であった。なにせ屋敷の女風呂、大人の男五人が

ゆうゆう入れるほど広いのだ。メイドたちはこの仕事の担当者を毎日『じゃんけん』で決めていた。今日負けたのはクシーだ。妹分のニュウは彼女の『おてつだい』をしているかたちであった。ニュウは、『お風呂じゃんけん』では負けなしだ。彼女は、みんなどうしておそだしするのかしら、と不思議に思っていた。

今は早朝である。平時であれば風呂に水を張るのは夕方だが、ある理由により、きのうから厠などやむない事情を除いて日暮れ以降に屋敷を出ることは禁じられていた。

風呂に水を貯め終えると二人は土間に向かい、『かめ』からオレンジ水を一杯ずつ汲み、飲んだ。リーダーのファイにも黙認されている『お風呂当番』の秘された特権であった。ニュウが『おてつだい』を申し出たのもこれのためである。彼女は逞しく育っていた。

「今日は十よりいっぱいの数の足し算引き算です」
「わたし、ゆび、１０本しかない……。そうだわ！石っ！」
「ふふん。なんとわたしは指も石も使わない方法を知ってるのです」
「くりをつかうのね！」
「栗もジャガもなにも使いません」
「すごい！おしえて！」

居間で『おべんきょう』をするニュウとクシーを見つめ、ガンマは微笑ましい気持ちで口元に笑みを浮かべた。笑みが髭でわからず、その怖い顔と巨体が相俟って熊が獲物を狙っているようにしか見えないのはなかなかに不憫な話であった。このときクシーはガンマの視線に気づいており、彼を意識していつもより上品に微笑んでみたり、無意味に腰をくねらせてみたり、胸を寄せてみたりもした。これはニュウを笑わせ、ガンマに首を傾げさせるだけの結果に終わった。クシーはガンマの反応を「効果あり」と見ていた。こちらもまた不憫な話であった。

奇妙な動きをするクシーを不思議に思いながら、ガンマはシグマの書斎へ向かった。居間を出てすぐに「ガンマさん、きっと照れち

ゃったんだわ。キャー」というクシーの声が聞こえた。ガンマはますます首を傾げた。

◆――◆――◆

書斎ではシノビを除いた戦える者たちが集まって会議を開いていた。ツチクイモドキが現れたときの対策を考える会議だ。ガンマはノックをし「遅れてすまん」と言って部屋に入った。書斎にはシグマ、エータ、ラムダ、ファイ、そして研究部の人間が二名いた。アカンナ王国でかつて『魔王』や『化け物』にされた者たちが暮らす屋敷とはいえ、そのすべてが暴力に分類される力をもっているわけではない。例えばクシーの『意識して目をとじている間は誰からも視認されない』という能力のように、極めて限定的な場面でしか役に立たない力を持った『魔王』も多かった。攻めてくる魔物を相手に戦える類の技能を持った人間は一握りなのである。

「話はどこまで進んでます？」

席に着いて早々にガンマが聞いた。

「バリケードを張ることは決まったよ。いま、それ以外をどうするか話し合ってたとこ。ガンマはなにかいい案、あるかい？」

通常運行の気怠げな顔でシグマが言った。

「ばりけえど？」

ガンマが聞き返す。エータが答えた。

「大将の故郷の言葉で、防柵のことだそうです」

研究職二人の案は、予め玄関以外の全てをバリケードで封鎖してしまう、というものだった。そうすれば魔物は馬鹿正直に正面玄関だけを攻めてくるだろう、と。

「不便にはなりますが、命がかかってますから、そこは我慢してもらわんと」

この案で行けば研究部で開発した『炎の瓶詰め』や『冷気の瓶詰め』などを二階三階の窓から投げることで非戦闘員も攻撃に参加できる、というのが彼らの主張だった。エータがこれを支持した。

一方、この案に異を唱えたのはラムダだった。バリケードはいいが、研究部の『魔法の瓶詰め』は数が少ない。戦えない者は予め街にでも逃がしておくべきだ、というのが彼の主張だ。実際、シグマが発案し研究部が開発した『魔法の瓶詰め』は呪文を唱えず誰でも使えるという利点はあるが、材料が高価なため在庫はそれほど多くない。くわえて威力も、同じ効果をもった魔法を放つより弱かった。勿論、弱いといっても人間の頭を吹き飛ばすくらいのことはできる。しかしそれがツチクイモドキに効くかは不明だった。魔物の中には魔法を食べるものもいる。ツチクイモドキがそれであったら餌でしかない。

ツチクイモドキは、五年ほど前にここスズカゼ王国で発見された、珍しい魔物だ。この場でツチクイモドキと戦ったことがあるのはガンマ一人だけだった。ガンマは魔法を使わない。かつてツチクイモドキに襲われた時も、彼は斧で頭を叩き割って仕留めた。そのためガンマにも、ツチクイモドキに魔法が効くかどうかはわからなかった。ガンマは中立を宣言しながらも他の案はないかと考えた。

ファイは中立だった。彼女の場合はそうならざるを得なかった。それというのも、彼女は魔法剣士のラムダやエータとも、怪力自慢のガンマとも違い、完全な魔法特化タイプなのである。魔法の効かない敵が相手では、他のメイドと同じでまったく役に立たない。しかし彼女は、もしツチクイモドキに魔法が効くならば屋敷の誰より戦果をあげられる自信があった。彼女のつかう『かみなり』の魔法は一瞬で敵を炭にする。聞けば、ツチクイモドキはガンマより少し小さいくらいの――つまり体長2メトゥルほどの、巨大な虫だという。ガンマはそれを「頭を叩き割って仕留めた」と言った。ならば敵はかなり硬いのだ。ガンマが本気で斧を振るったにもかかわらず『真っ二つにした』や『叩き潰した』と言わなかったのだから。そ

んな相手であれば自分こそが最も役に立つだろう、とファイは思った。彼女の『かみなり』の前に敵の硬さは意味を持たないのだから。
この場の誰とも違う作戦を提案したのはシグマだった。彼の案は『全ての出入口をバリケードで封鎖して籠城する』というものだった。これにはラムダを除く全員が難色を示した。
「むう。大将のことだからなにか考えがあるんでしょうが、俺は……。ちょっと考えさせてください」
「籠城となると、食べ物の問題が重要ですよね。ファイさん、今ある分でどれくらい保つか、わかりますか？」
「屋敷から出ないんじゃ、森でイノシシや鳥を獲ってくることもできないんでしょう？そうなると、せいぜい一週間……ううん、五日かな」
「肉が食えないのかあ……。まあ、仕方ないか……」
「くわえて風呂もなしですよ。あ、大将。厠はどうするんです？」
いやあ、と彼は言った。
「籠城って言っても、今日これからバリケードを作って、明日一日引き篭もるだけだよ。水は女風呂にでも貯めておけばいいし、トイレ――厠は空き部屋を使えばいい」
シグマはへらりと笑い、茶を啜った。ラムダが目を細める。彼は「増援を待つのですね」と言った。そういうこと、とシグマは答えた。
「一日待って彼が来ないようなら、その時は――」
――この屋敷を捨てようと思ってる。
シグマはそう言った。
ラムダを除くみなが絶句した。その様子を眺め、シグマはもういちど茶を啜った。静寂の中、ずずず、という音がいやに大きく響く。やがて彼は言った。
「玄関以外にバリケードを張って、ガンマみたいな強い奴だけが外で戦うとするよね。よしんば相手が思いのほか少なかったとしよう。それならまあ、勝てるだろう。どんぐり屋敷の勝利だ。……けどさ

あ、連中、巣を持ってるんだろう？その巣の中には奴らの女王様がいるんだったね？女王様を一人残して全員で攻めてくるなんてこと、すると思うかい？しないよ。何匹かは残るに決まってる。その時点で僕らは負けてるんだ。襲ってきた分を返り討ちにしたって、女王を殺さない限り奴らは永遠に増え続けるんだから。この先ずっと怯えて暮らすなんてのは、おじさん御免だよ」

「なら」とエータが言った。「こっちから巣を探して――」

「馬鹿を言うな」とガンマが言った。「探して見つかるようなものじゃない」

エータがしゅんと黙り込む。

「見つかったとしても、巣の中に入り込んで女王を殺すっていうのは、僕らじゃちょっと難しいんじゃないかなあ」

シグマは薄く笑った。

あの、とファイが言った。

「ここを出て、どこに行くんでしょう？」

意図せず声が震えた。彼女や他のメイドにはこの屋敷を出ても行き場所がない。『大将』が仲間を捨てるとは思えないが、心のどこかに不安はあった。しかしてシグマは言った。

「みんなでルフォーの所に行こうと思ってる」

彼は『みんなで』の部分を強調した。

「彼女の屋敷はモルイの壁の外だから、一日もあれば着く。彼女のところなら今よりいい生活ができるよ。特にラムダなんか、頼めば何でも買ってもらえる」

「あの魔女かあ……」

「あの人かあ……」

「俺あのひと苦手なんだよなあ」

「得意な人なんかいませんよ」

ファイがほっと表情を緩め、男性陣がいっせいに顔を顰(しか)めた。ラムダなど柄にもなく涙目になっていた。シグマは苦笑して言った。

「まあ、それも増援が来なかったらの話だよ。――誰か、異議のあ

る人いるかい？いなければこの方向でいこうと思うんだけど」
手は挙がらなかった。
会議は終わり、バリケード作りが始まった。

◆――◆――◆

「ばりけえど、ですか？」
「ああ。これからみんなで作るそうだ。庭に集まってくれ」
「了解です。あ、ガンマさんお髭にほこりがついてますよ？わたしがとりますね」
「む。自分で――」
「あん、もう。動かないでくださいよう」
「むう」

「まりけえど？」
「窓や出入口を塞ぐんだと」
「うそ、バケモン来るの？」
「来ねえようにするんだよ」

「まぐにーとー？」
「おう、たしかそんな名前だったと思う。要は薪だの椅子だので化け物が入ってこねえように柵を作るのさ」
「テーブルもか？」
「テーブルもだ」
「机は？」
「机も箪笥（たんす）もベッドも全部だ」
「勿体ねえ」
「命の方が大事だろ。ぜんぶ捨てっちまえ」

「おい、庭に集まれってよ。大将が呼んでるらしい」
「なにすんの？」
「らぶにーと、だっけ？そんな名前の作戦をやるんだとよ」
「ふうん」
「なんか、全てを捨てて引き篭もる、とか聞いたけど」
「なにそれこええ」

◆――◆――◆

★ニュウの日記

９＋４＝１３
１１＋１１＝２２
１２＋１９＝３２

きょうは　わたしは　みんなで　まほめっとを　つくりました。
まほめっとは　てーぶると　いすと　つくえと　こわしました
つくった。
まほめっとは　おおきいのが　はいらないから　つくりました。
わたしは　いすを　なれべました　たくさん。
たのしかった　とても。
わたしは　きょうは　みんなで　いっしょにねます。
わたしは　しぐまといっしょ　ねます。
おじいちゃんは　ひとりで　ねます。
くしーは　がんまと　ねれようと　できなかったでした。
くしーは　あせりすぎたんだあ　といいました。

くしーは　まくらを　ばいおれす　しました。
みんなが　おんなじで　おへやで　いっしょにねます。
わたしは　たのしくてよいなあすごく　とおもいます。

おやすみなさい。

9．籠城（後書き）

総合評価が１０００突破。
今日中にもう一本書いてアップ。

１０．凪の時（前書き）

総合評価１０００突破を記念して本日二本目。

10．凪の時

「シグマ」
「――」
「シグマ」
「――」
「……わたし、しあわせだわ」

◆――◆――◆

「おい、どうしたんだ。さっきからそわそわして」
「小便したくてよ」
「してくればいいじゃねえか」
「だってよ、まほめっとのせいで――」
「ばりけえどだ」
「まぐねっとだろ」
「まぐにーとーだよ」
「らぶにーとじゃなかった？」
「パンツェッタだったと思うが」
「それだ」
「それだよ」
「それだな。――で、パンツェッタがどうしたって？」
「ああ、パンツェッタのせいで外に出られねえから厠に行けねえ、って言おうとしたんだ」
「あん？なに言ってんだ、空き部屋でやるって決めたじゃねえか。おまえ聞いてなかったのかよ」
「聞いてたさ。聞いてたがよ、まだ誰も行ってねえじゃねえか。厠

でも川でも林でもなく、床の上で小便しようってんだ。俺のあとに誰も行かなかったら、俺だけが屋敷を汚したことになるだろうが。最初の一人にはなりたくねえよ」
「おまえは本当に馬鹿だなあ」
「なんだと」
「さっきから何人の女が小便やりに行ったと思ってんだ」
「メイドたちのことか？それとも研究部のパイか？部屋を出たのはそんだけだぞ。俺はちゃんと見てた」
「そいつらぜんぶだよ。それとニュウちゃんもだ」
「メイドたちは毛布の余りが無いか探しに行ったんだろう？ニュウちゃんは見習いだから一緒に行くのは当たり前だ。パイの奴だって、でけえ声で『あたしも手伝います』って言ってたじゃねえか」
「そりゃおまえ、かもふらんすだよ」
「なんだよ、かもふらんすって」
「大将の生まれ故郷の言葉で、誤魔化すとか偽装するとか、そういう意味のアレだよ」
「メイドたちとパイが何を偽装したってんだ」
「厠だよ」
「あん？」
「だから、連中もおまえと同じで、床小便一番のりにはなりたくなかったんだよ。それでも小便はしたかった」
「えっ」
「だから毛布を探しに行くなんて口実でやりにいったのさ。パイの奴はあれでも女だ、気付いたんだろう。もしかしたらあいつも我慢してたのかもな。それで手伝うなんて言ってついてったんだ。だいたい連中、戻った時に何も持ってなかったろうが。少なくとも俺の部屋には毛布があるぜ？一枚も無かったなんてことはねえさ。或いは、小便のときに敷いたのかもな。直接やったら床が傷むし、匂いがつくから」
「そうだったのか……。よし、じゃあ俺も毛布を――」

「馬鹿野郎。同じ手を使う奴があるか。それに一人で行ったら目立つぞ。俺が一緒に行ってやる」
「おまえ、なんていい奴なんだ。俺はおまえのことを誤解していたよ。てっきりただの助平だとばっかり」
「いいってことよ。それじゃあ、俺の言葉にちゃんと乗っかれよ？」
「おう」
「よし。――さーて、ちょっくら酒でもやりに行くかな。部屋に隠してあったのを忘れてたぜ」
「お、俺も行こうかな！俺も、部屋に隠してあった気がする！」
「っ！？――俺もだ！俺も隠してあった！」
「っ！？――なんだよ、おまえもかよ。俺もなんだよなあ」
「っ！？――よう、一口くれよ。いいだろ？」
「いやあ、おじさんも飲みたくなっちゃったなあ。なんちゃって。はっはっは」

「ほんと、男って馬鹿ねえ」
「馬鹿ばっかり」
「なんのおはなし？なんのおはなし？」
「言い訳をせずこの機に堂々と立ち上がるガンマさん……素敵だわ」
「ねえ、なんのおはなし？ねえったら」
「なんでもないわ、ニュウ。もう寝ましょう？」
「むうぅ」

◆――◆――◆

バリケード完成から一夜明けた朝、ニュウはシグマの腕の中で幸せな目覚めを迎えた。平時であれば、彼女は朝シグマの部屋へ行き、布団に潜り込んで『だっこ』をする。それで充分に幸福を噛み締められたものだが、何事にも上には上があった。『夫』の腕の中で目

を覚ますことがこんなにふわふわした気持ちになるものだとは知りもしなかった。ニュウの幸福の上限が更新された瞬間であった。大幅なバージョンアップである。これが『ふうふのあい』なんだわ、と彼女は思った。一方シグマはよだれを垂らしていた。

もうすこしだけ、とニュウは願った。眠気以外の理由から、彼女は今のままの姿勢を保っていたかった。即ち、シグマに抱かれる幼い子どもの構図を。しかしニュウはすぐさまシグマの腕を抜け出した。シグマを起こすのは彼女に与えられた仕事だ。それを放り出してまで欲望を優先させたいとは思わなかった。正確にいうなら、思いたくても思えなかったのである。闇の底から救い出され、家と仲間と幸福を与えられた彼女は、たとえ小さな要素であっても『ここにいられなくなる可能性』を作ることが恐ろしくて仕方がなかった。そんな彼女に『おしごと』を放棄するなどという思考があろうはずもない。

ううん、とシグマが唸った。ニュウは小さな手で彼の頬に触れた。それはあまりに自然な動きで、彼女自身もなぜそんな行動をとったのかわからなかった。

「シグマ」

彼女はそっと呟いた。ううん、と彼はまた唸った。彼女はもう一度「シグマ」と呼んだ。

怖いくらいに幸せだった。

少しだけ泣きたくなった。

彼女以外まだ誰一人として起きていない大広間。ニュウは一瞬だけ――ほんの一瞬だけ寂しげな笑みを浮かべて愛する彼を見つめた。その表情はすぐに消える。よし、と彼女は言った。そうしていつもの明るい笑顔で、いつものように彼を起こす『おしごと』を開始するのだった。

ジャンピング・ボディプレスによって。

◆――◆――◆

「そういえば、一昨日、妙に機嫌が良かったじゃないですか。あれ、なにがあったんです？」
「聞きたいの？」
「聞きたいです」
「ふふふ。いいわ。あのね、一昨日の朝、あたしの勇者様から手紙が届いたの」
「勇者様ぁ？あはははは。ファイさん、いい年してそれはちょっと――」
「ふんっ」
「痛い！」

メイドたちが雑談をしながら荷物をまとめていく。時刻は夜。ササノハは帰っておらず、増援が来たとの報せもまだなかった。明日の朝になっても来なければ、このどんぐり屋敷を捨て、モルイの街のルフォー邸まで旅立つ手筈になっていた。

ファイはこの屋敷で九年を暮らしている。仲間たちと一緒であっても、ここから離れるのはつらかった。どんぐり屋敷そのものが彼女にはもう一人の仲間であるように思えていた。魔物なんて死ねばいい、と彼女は思った。思って、はっとした。それは九年前に彼女の親や、暮らしていた村の人間が、彼女に向けた言葉だった。

おまえなんか死ねばいい。おまえなんか、いなければよかったんだ。

好きでこんなふうに生まれたわけじゃない。彼女は何度もそう思った。それは魔物も同じなのではないのか、と彼女は思った。

ファイは溜息をついた。疲れているんだ、と思った。冗談じゃないわ、とも。たった一日普通でない暮らしをしただけで心がまいっ

てしまっている。笑えない話だった。

「――なにかくる」

ふとニュウが言った。

メイドたちとシグマがいっせいに彼女に目を向けた。誰かがごくりと喉を鳴らした。

クシーが言った。

「ニュウ、どうしたの？」

ニュウは玄関のほうに目をやる。そうして言った。

「なにか……すごく大きいのが来るわ」

「大きいのって、まさか魔物！？」

クシーの言葉にメイド一同は騒然となった。しかしニュウは首を横に振った。

「ううん、ちがうわ。にんげんよ。にんげんだけど、すごく大きいの。……こんなに大きい生き物、はじめて」

ニュウが瞳を大きくして扉の向こうを見つめる。クシーにも、他の誰にもニュウの言わんとしていることはわからなかった。クシーは聞いた。

「大きいって、ガンマさんみたいに背が高いってこと？」

「ちがうの。そうじゃなくって、『なかみ』が大きいの」

「なるほど」とシグマが呟いた。

「もしかして、増援ですか？」

クシーが聞く。シグマは頷いた。

「たぶんね。――ニュウ、その人は人間なんだね？人間だけど、普通じゃない――信じられないくらい強い人なんだね？」

「つよい？……うん。そうかもしれない。とっても大きくて『濃い』わ」

「そうか。来てくれたか」

シグマは笑って何度も頷いた。メイドたちも、いつの間にか聞き

耳を立てていた広間の仲間たちも、みなほっと安心した顔をしていた。
ニュウだけが黙って扉の向こうを感じ続けた。
それは大きな生き物だった。体長ではなく存在が大きな。
ニュウは、確かにそれが人間だとはわかるのに、その生き物が人間であるとは思えなかった。信じられなかったと言い換えることもできる。こんなものが人間であっていいはずがない、と彼女の未熟な常識が告げていた。しかしその認識こそシグマとまったく同じものであった。
シグマもまた、『彼』を人間だとは認めたくなかった。
やがて彼は庭に到着した。それをニュウは感じ取った。ここでようやくもう一人の存在に彼女は気付いた。
「シグマ、もうひとりいるわ。大きいののほかに、普通のにんげんが一人いるの」
シグマは嫌な予感がした。
しかして屋敷正面玄関前のバリケードが吹き飛ばされた。正確に表現するなら、『蹴飛ばされ』た。それをニュウは感じた。感じ取ることのできない仲間たちも音と振動でわかった。魔物対策のために設置したバリケードが、一撃のもとに壊され、排除されてしまったのだと。屋敷の何人かは、シグマの話を聞いていたにもかかわらず魔物が来たと思い込んだ。
シグマは玄関に向かった。ニュウがトテトテとそのあとに続く。シグマは彼女をとめなかった。
やがて扉は開いた。
現れたのは二人の人間だった。
一人はシグマと同じく黒い髪の青年、もう一人はクシーと同じくらいの背の、赤い髪の少女である。青年が少女を抱いている。
シグマはその場に跪いた。
真似したほうがいいかしら？と思いながらもニュウは青年の方が気になって仕方なかった。青年の異常なまでの存在感が。ニュウは

青年をじっと見つめ続けた。青年の方もまたニュウに興味をもったようだった。
黒髪の青年は赤髪の少女をおろした。
そうして赤い髪の少女は言ったのだった。

「遅くなったなシグマ・ユーニ。スズカゼ王国が王女、ロカニ・アキト・スズカゼ――我が恋人ヨゾラと共に貴殿らを助けに参った」

11．光

「――おまえなんかいらない――」

◆――◆――◆

男女と男女が向かい会い、屋敷にたった一つ残されたテーブルを挟んで座っている。片方はシグマとニュウ。もう片方はスズカゼ王国の王女ロカニとその騎士ヨゾラだ。ニュウはシグマの膝に座り、対抗するように王女は騎士の腕を抱き、しなだれかかっていた。

「まさかキミが来てくれるとは思わなかったよ。それも、王女殿下を連れて」

「弟子をやってもよかったんですが、我が主が行きたい行きたい言うので。刺激に飢えているんですよ、いつだってそうだ。俺なんかは退屈なくらいが丁度いいんですが」

「おじさんも争いごとは苦手だよ。賑やかなのは嫌いじゃないけどね」

「男と女の違いでしょうか」

「どうかなあ。おじさん、女心とか、さっぱりだから。ところでササノハは？」

「明日には着くんじゃないでしょうか。俺のスピードについてこれなかったので、置いてきました」

「……」

「それにしても、老けましたね、西熊(にしぐま)さん」
「今はシグマだよ。シグマ・ユーニだ」
「失礼ですが、いくつになりました？」
「三十六になるよ。いや、もうなったかな。ヨゾラ君は？」
「さあ。もう忘れました。西熊さんよりは若いはずですが」
「シグマだよ。シグマ・ユーニだ」
「本当……相変わらずですね」
「そういうキミも変わらない」
「変わりましたよ。愛を知りました」
「そういうところも変わらない」
「ふむ、おぬしが新しい魔王もどきか。小さいのう。まだ子どもではないか。いくつじゃ？ん、申してみい」
「9才よ。あなたはいくつ？」
「妾は今年で十六になる。『ちきゅう』ではようやく結婚できる歳じゃ」
「ちきゅう？」
増援としてやって来た騎士ヨゾラとシグマが神妙な様子で、王女ロカニとニュウが楽しげな雰囲気でそれぞれ話しているその様子を、どんぐり屋敷の住人たちは固唾を呑んで見守っていた。とりわけエータとラムダの二人は額に汗し、恐怖さえ感じながら一人だけを見つめていた。エータの憧れた男、ラムダを負かした男――生きる伝説、騎士ヨゾラを。
エータはちらとラムダを見やった。仲間以外の者がシグマに近づくのを嫌い、いつでも近くに控える彼は、しかし今ヨゾラをじっと見つめるばかりでシグマの隣に行けずにいた。そんなラムダの気持ちがエータにはよくわかった。怖いのだ。直接見たわけではないが、エータはラムダと騎士ヨゾラがかつて勘違いから決闘をしたことがある、という話をガンマから聞いていた。ガンマが審判をつとめ、そして彼の目の前でラムダは負けたのだという。しかしエータはそれだけならば、驚きこそすれ、そのことに恐怖を感じたりはしなか

っただろう。ラムダさんも人間だ、時には負けることもあるだろう。そのようにエータは納得した。彼は未だに仲間うちでガンマとラムダにだけは勝てずにいるが、上には上がいることを知っていた。だが、事実はもっと残酷だった。ラムダの負け方だ。彼は試合開始と同時に気を失ったのである。殴られたわけでも、蹴られたわけでも、魔法をつかわれたわけでもなく、ただの一度も剣を交えずに気絶――敵意を向けられたことが恐ろしすぎて気を失ったのだ。エータはその事実に恐れ慄いた。

――ラムダさんほどの人が、戦いを恐れたんだ。

――いや。ラムダさんほどの人だったからこそ、恐ろしさに気付けたんだ。

それを知った瞬間から、エータの中で騎士ヨゾラは神格化された。

スズカゼ王国の王女ロカニと、その騎士ヨゾラ。エータは、ガンマに話を聞く前からこの二人のことを知っていた。勿論こうして見るのは初めてだが、噂に聞いていたのだ。曰く、スズカゼの王女は化け物を飼っていると。

アカンナの『魔王討伐』は自国だけの、言ってしまえば小国のささやかな儀式殺人にすぎない。それは他国の識者にとっては軽蔑と物笑いの種でしかなかった。《予言の絵本》という類稀な魔導書を発掘しておきながらやっていることはそれかと。周辺諸国にとってアカンナ王国は歴史も浅く特産もない、おまけに軍事力もない、取るに足らぬ小国だ。未だ滅ぼされていないのは隣にスズカゼという強国があるからでしかない。アカンナの『英雄王』や『勇者』など一歩国境をまたげばただの資産家でしかない、というのがアカンナ国民の知らない大陸の現実だった。

しかしスズカゼ王国は違う。スズカゼ王国は大陸一の軍事大国である。軍事魔法の研究は極めて盛んで、その国で『勇者』とされる者などは、もはやその存在が軍事的抑止力であるとさえいえた。

いま、エータの視線の先でシグマと話しているのは、その『勇者一味』の『反乱』をたった一人で鎮圧したと噂される男であった。

公式見解としては、スズカゼ王国はその噂を肯定も否定もしていない。しかし王女の通う王立碩学院のある街・学術都市ジソで聞けば、街の殆ど全員が噂について肯定するという。彼ならそれくらいやるであろう、と。できる、ではなく、やると。可能不可能で言うならば街の全員が答えるそうだ。できるに決まっていると。

それ以外にも彼は数々の『事件』を一人で解決している。その全てに王女ロカニが関係しているということで、巡りの詩人や講談師が今もこぞって彼の物語を語っている。その殆どが王女とのラブストーリーであった。

スズカゼという国にとって王女の騎士ヨゾラは最も新しい伝説なのだった。

「ねえロカニ、ちきゅうってなあに？」

ニュウが首をかしげる。シグマは薄く笑い、仲間たちはハラハラした。ファイが慌てて手を振り「おいやめろ！おいやめろ！」と合図する。ニュウは面白がって手を振り返した。ファイはやさしくて楽しいから好きだなあ、とニュウは思った。すれ違いもいいところだった。

王女ロカニは呆れ顔でニュウを見つめ、やがてその頭を撫でた。ニュウは喜び、にへにへ笑った。「まったく酷いものじゃ」と王女が言った。どんぐりズはいよいよ慌てた。しかし血は降らなかった。

王女は言った。

「こんなに小さな子を魔王などと……。やはりあの国は駄目じゃな。好かん。——ユーニよ。あんな国さっさと滅ぼして、お主が王になってしまえ」

どんぐりズは一斉にシグマを見た。彼は頭を掻き「あー……」と目を泳がせた。

「おそれながら、仰る意味がよくわかりません。何のことでしょう、殿下」

「隠すでない。おぬしら《重苦の刃》はアカンナを作り変える『て

ろりすと』なのであろ？その同志は我がスズカゼだけでも五百にのぼるとか。知っておるぞ。妾の恋人は隠し事をせぬのでな」
王女がニヤリと笑う。
屋敷住人は一同に背に汗を掻いた。シグマはじとじとした目をヨゾラに向けた。ヨゾラは目を逸らし「ばらさない約束だったろうに」と溜息をついた。
――せめてレジスタンスと言ってくれ。シグマは胸中で呟いた。
安心せい、と王女は手をひらひら振った。
「我らに牙を剥かぬ限りは誰にも言わんし、邪魔もせぬ」
「……ありがとうございます」
そう頭を下げながら、シグマは複雑な思いであった。もしも、と彼は思った。もしもこちらの最終目標がアカンナの民主化だと知ったら、王女はどう思うのだろうか？王を必要としない国ができあがる。そんなことになれば、周辺諸国にも、勿論ここスズカゼ王国にも、少なからぬ影響が出るだろう。シグマは溜息をつきたい気持ちをぐっと飲み込んだ。彼女たちとはいずれ敵になるのかもしれない、と彼は思った。
「ねえ、ちきゅうってなあに？ねえ、ロカニ」
ニュウが王女の袖を引っ張る。王女は笑ってこたえた。
「争いと飢えのない豊かな世界――遠い遠い楽園の名じゃよ」
そんな世界は存在しない、とはシグマは言わなかった。

◆――◆――◆

「それじゃあ、殺してきます」
騎士ヨゾラは王女を抱き、さっそく山へと向かって行った。王女を置いていかなくていいのかと聞くシグマに、彼は「俺の隣以上に

安全な場所はない」とこたえて笑った。メイドの一人が「いいなあ」と呟いた。本気で羨ましがる声だった。ファイは「あたしの勇者様のほうが恰好いい」と誰も聞いていないことを主張した。
出発前、ヨゾラはシグマとニュウに一言ずつ声をかけた。
「俺は今からツチクイモドキを皆殺しにします。あなたに頼まれたからです。俺はあなたのために、罪もない動物を虐殺するんだ。そのことを忘れないでください」
シグマは頷いた。
「……わかってる」
彼にも思うところがないわけではなかった。
ニュウもまた、ヨゾラにかけられた言葉に感じるものがあった。
「この茶番をもう二百回以上繰り返しているが、キミに会うのは初めてだ。――おそらくキミは、俺以上のイレギュラーなんだろう。色々と考えて行動しなさい」
意味はわからなかったが、ニュウはなぜか怖い気持ちになった。

「まさかヨゾラ・ナツノが来るとはな」
ヨゾラと王女が屋敷を出ていくと、ガンマは大きく息を吐いて体の力を抜いた。仲間たちも一斉に脱力して座り込んだ。
「大将がヨゾラ・ナツノに手紙を書いたのは見ていたが、まさか本人が来るとは思いもしなかった」
「それも王女様つきだぜ」
「王女様めろめろだったな」
「それにしてもすごい迫力だった」
「ああ。威圧感が半端じゃなかった」
「片手で大木を引っこ抜くらしいぞ」
「指一本で鉄を裂くって聞いた」
「何にせよアカンナ生まれの偽魔王じゃ敵わない、本物の化け物さ」
「お荷物背負って魔物の巣に突っ込むなんて、普通ならただの自殺だよなあ」

「背負うっていうか、抱いてたけどな」
「そもそも大将はどういう経緯（いきさつ）であんな大物と知り合ったんだ？」
「そりゃおまえ、大将だからな。俺らには想像もできない壮大な物語があったんだよ」
――いやあ、生まれ故郷が同じってだけなんだけどねえ。
そんな言葉をシグマは飲み込んだ。盛り上がっているところに水をさすのは気が引けたためである。こうしてまた真実と認識の齟齬は加速した。のちにシグマはモルイの街で英雄ヨゾラの物語を聞く。もう何度も聞いた話であったが細部が変わっていた。英雄ヨゾラには彼と同じく黒い髪のお師匠様がいる。そんな設定が追加されていたのだった。

前へ後ろへと首が揺れる。あぐらをかいたシグマの膝でニュウがうとうとと船を漕いでいた。王女とヨゾラが出てから三時間が経過していた。クシーとファイが毛布まで連れていこうとしたが、ニュウは頑として特等席を動かなかった。
「ほら、ニュウ、行きましょ。ちゃんと毛布で寝ましょう？」
「んうー……いやぁ……」
「もう、ニュウったら。大将さんも困ってるわよ？」
「いやあ、いいよこのままで。ぽかぽかして悪くない」
気をつかったシグマのそんな台詞は、ニュウの日頃の言動もあり、メイドたちの好奇心に疑惑の刺激を投げかけた。もしかして、ニュウの言葉は本当なのではないか？大将さんとニュウは本当に愛しあっているのではないか？噂好きな彼女たちはそう考えた。ヨゾラの存在も理由の一つであろう。彼女たちは物語の英雄を実際に目にしたことで軽い興奮状態にあった。
これ以後、メイドたちはニュウとシグマの仲を本格的に応援するようになる。ニュウはシグマとの時間が増えたことを喜び、シグマは可愛らしい秘書を得るのだった。
そこから離れた位置、広間の隅でガンマとエータ、それに研究部

のリーダー・タウがツチクイモドキの生態について話し合っていた。
「――しっかし、雌が生まれねえってのは凄い話だなあ」
「ああ。だがその代わりにどんな生き物の雌にでも子どもを産ませることができるらしい」
「待ってください先輩！それじゃあ、前に言ってた『女王を迎える』っていうのは」
「ああ、攫うんだ。奴らはそうして女王という名の産む機械を巣に迎える」
「そんな……」
「エゲツねえ話だ。聞けばツチクイモドキってのはおまえよりちょっと小さいくらいだって言うじゃねえか。そうなると攫う種類は必然的に……」
「そういうことだ」
「どういうことです？」
「俺が若い頃に受けた依頼に、ツチクイモドキが捨てた古い巣の奥から娘を助けだしてほしい、というものがあった」
「……その子は、いたんですか？巣穴の奥に」
「直接は見ていない。俺の役割は周辺の警戒だったんだ。そこで一匹と出くわしてやり合ったが、結果的には俺の仕事がいちばん楽だったと思う」
「助からなかったんですね」
「……生きてはいたんだろう。巣に潜った連中は『眠らせてやった』としか答えなかった」
エータは絶句し、タウはがりがりと頭を掻いた。

そのとき、とつぜん笛の音が鳴り響いた。

シノビが緊急事態を知らせる笛だ。一同は一斉に立ち上がり、身構えた。みな一様に壁から離れ、広間の真ん中に集まった。
エータ、ガンマ、ラムダの三人はそれぞれ武器を持って外へと走

った。遅れてシグマとファイも続く。そうして唯一バリケードが撤去されている正面玄関から庭に出た五名は、その光景を目にし、凍りついたように動きを止めた。

「先輩」

エータが言った。

「あれ……なんですか。先輩より少し小さいくらいって、言ったじゃないですか……」

屋敷に向かって迫り来る三体の『それ』をシノビたちが必死に牽制していた。

「うそだろ……俺が見たのはこんなのじゃない」

ガンマが呆然と呟いた。

ラムダが無言で抜剣する。シグマも棒を構えた。

「あれが、ツチクイモドキなの？聞いてたのと随分違うみたいだけど」

ファイが震えながら言った。

そこにいたのは、体長四メトゥルを超える巨大な虫たちだった。

◆――◆――◆

ツチクイモドキの巣穴の奥、王女と騎士は揃って溜息をついた。これまでの道には三メトゥルから、大きいものでは四メトゥルを超える巨大な虫が無数に転がり、しるべとなっている。全ての虫が的確に頭を潰されており、戦闘の形跡は一切なかった。

巣の奥には女王がいた。

それは巨大な虎だった。

虎の体には四肢がなく、黒や緑の粘液がぐるりいたるところに付着している。ヨゾラは苦々しい気持ちを噛み締めて近づいていく。

虎は虚ろな目でヨゾラを見た。王女はウッと口を抑えて目を背けた。
なるほど、とヨゾラが言った。
「どおりで虫どもがデカイわけだ。虎の王が虫の女王にされていたとはな」
虎は黙ってヨゾラを見つめる。騎士と虎の視線が確かに混じり合う。濁った目はヨゾラに告げた。殺してくれと。
ヨゾラは溜息をつき、拳を握りしめた。情を込めて彼は言った。
「一瞬で済む。痛みはないよ」
そうして血が舞った。

「まるで洞窟じゃな」
外に出た王女は巣穴を振り返ってそうもらした。地面に対して斜めに、ぽっかりと大穴があき、深くまで続いている。「ああ」とヨゾラが返す。三メトゥル、四メトゥルという大きさの虫が通るその穴は、もはや虫の巣穴と呼べるレベルのそれではなかった。
「まったくもって嫌な仕事だった」
ヨゾラが言う。王女は笑った。
「仕事でさえないじゃろ。何一つ得るものが無いのじゃからな」
「国内での魔物騒動だ。国家公務員として黙ってはいられない。……ああ、帰ったら風呂に入りたい」
「妾もじゃ。できればヨゾラと入りたい」
「できればってなんだ。いつも入ってくるじゃないか。やめろと言っても嬉々として」
「恋人とはそういうものであるからして」
「初耳だよ」
「妾もじゃ。なにせ子どもの頃から恋物語が嫌いであった。他人の色事にもまるで興味がもてぬ。妾にとって恋に関するものは全てそなたとの初耳初体験なのじゃ」
うれしいか、と王女が言う。
どうかな、と騎士が言う。

王女は笑い、騎士もまた笑った。
「だいたいヨゾラだって毎晩毎晩、妾の寝室に窓から侵入してくるではないか。一国の王女に夜這いとは何事であるかや。斬首ものの蛮行じゃ」
「恋人とはそういうものであるからして」
「初耳じゃ」
「キミだって俺を引き止めるじゃないか。夜明け前に去ってしまうのは寂しいと言って」
「……そういうことも、ないとは言わぬ」
「照れているのか？」
「ぬかせ」
「俺は照れている」
二人がじゃれながら森を歩いていると、不意に、昼間のように眩(まばゆ)い光が辺りを照らした。
ヨゾラは咄嗟に王女を押し倒し、その上に覆いかぶさった。状況は掴めなかったが、体が勝手に動いたのだ。やがて光がおさまってきた頃、ヨゾラは目を細めて顔を上げた。
屋敷の方向に光の正体があった。
それは夜の闇と雲を切り裂き、空まで続く光の柱だった。
「なんじゃ……あれは」
「わからない。でも、誰がやったかはわかる」
「ユーニか？」
「いや。あのイレギュラーの娘だ」
黒の騎士は赤の王女を抱き起こし、光の柱を睨んで呟いた。
「彼女はおそらく――カミヤドリだ」

12．命の紐

遠方の空を見上げ、魔女は言葉を失った。
夜だというのに、モルイの街は人で溢れ返っていた。みなが空を――そこから真っ直ぐ山へと走る光の柱を仰ぎみている。夜闇を突き殺す碧白の槍。天へと向かっているのか、天から落とされたものなのか。彼らはその光景のあまりの美しさと現実感の無さに、崇め、恐れ、或いは畏れて跪いた。老婆が大きく手を掲げ、母たちは子を抱きしめた。男たちは領主の館へ向かい、説明しろと声を荒げた。
恐ろしいなにかが起ころうとしている。そんな予感が誰の胸の内にもあった。
そんな中、魔女であり魔法研究家でもあるルフォーは屋敷の屋根に立ち、ひたすらに光の魔力量を計測していた。
「百人？それとも千人分？こんなの見たこともない。どれだけの命を燃やしているの？いったいあそこでなにがおこなわれているのかしら……本物の魔王でも作ろうっていうの？」
行かなくては、とルフォーは思った。一刻も早くあの場所に行かなくてはならない。研究者としての彼女の性が唾を飛ばしてそう叫んでいた。

モルイの南東二十キロから先に広がるアカマ砂漠。その真ん中に、ポツリと一つ小さなテントがあった。側には二頭の馬と馬車があり、馬車には《ユキオト商連合》のマークが刻まれている。興奮する馬を撫でてあやしながら、青年は遠方の光柱にその心を奪われていた。
「なんと美しく、神々しい光……あれこそまさに女神の槍。あの先には美しい女神がいるに違いない」
諸国巡りの商人は陶酔の眼差しで光柱を眺め続ける。

のちにある少女に永遠の忠誠を誓う男の、はじまりの勘違いであった。

薄暗い部屋の中、蝋燭の灯りが端正な顔立ちを照らしなぞる。学術都市ジソの王立第二碩学院――通称第二アカデミーのとある研究室。一人の少年がはっと顔を上げた。

「なんだろう……？なにか、ザワザワする」

少年は誰にともなくそうもらした。胸が熱い。なにかが始まる予感があった。

少年は急ぎ研究室を出て、職員寮の屋上へと向かった。屋上には先客がいた。彼は少年が近づくと振り返り、ニヤリと笑った。応用魔法学の非常勤講師、少年の師だった。少年は遠くに見える光の柱を見つめ、呆然とした表情で呟いた。

「先生。……あれは、何でしょう」

「私にもわからない。とてつもなく大きな力を持ったなにかだ、ということくらいしかね」

「先生。……僕、あれが気になります。あれのことを、調べたくて仕方がない」

少年は師を見上げる。男は懐から干し肉を取り出し、噛みちぎった。やがて彼は言った。

「私も今、そう思っていたところだ」

アカンナ王国の王宮。そのいちばん高い尖塔のてっぺんに立ち、金髪の青年は目を閉じていた。

「参ったな」

彼は苦笑し、呟いた。

「これ、俺の百倍は強いぞ。あの人でも勝てるかどうか……」
育ての親、世にも珍しい黒髪の『大将』を思い、彼は大きく溜息をついた。
「まあ、頃合いってことかなあ。ここもそろそろきな臭くなってきたし。俺は別に全然平気だけど、ファイの奴は寂しがってるだろうし」
外套をはためかせ、青年はまぶたを上げた。青い瞳が優しく光る。うん、と彼はひとり頷いた。しかして遠く南の空を見つめ、青年は祖国への離反を決意するのだった。
「大将には食い物でいいとして、みんなへの土産は何がいいかねえ……」
この翌日、アカンナ王宮から勇者アルファが姿を消した。

大陸の外。遠洋の上空を一羽の大鷲が飛ぶ。
――あれこそは我らの救い。
――永く夢見た救世の灯。
主人の命に従い、大鷲は微かに見える光の糸へと矢のような速さで向かっていった。

◆――◆――◆

――突き飛ばされたことを覚えている。
ニュウは自分の前に横たわる男を見つめ、小さく「あ」と呟いた。何が起こったのか、彼女にはまるでわからなかった。ただ自分は無事であり、目の前には愛する男が死んでいた。

うつ伏せに倒れたシグマの腹の下から、じわりと血が広がり、土を潤(うるお)してゆく。彼女の命がゆっくりと逃げていく様子をニュウは確かに見た。彼女の愛した黒い髪の男は既に息がなかった。

周囲には二足歩行の巨大な蟻型甲殻虫が三匹と、仲間たちがいる。ラムダ、ガンマ、エータの三人が一匹を抑え、シノビ六名がもう一匹を抑え、残る一匹が四本の腕を揺らしてニュウとファイと、倒れたシグマの前に立っていた。

タウを中心に研究部の仲間たちが魔法の瓶詰めを投げるが、虫型(むしがた)の巨大な魔物に、それは微塵も効果が無かった。

――突き飛ばされたことを覚えている。

ニュウを庇ってファイが両手を広げる。ツチクイモドキがその様を無感情な複眼で見つめる。その複眼にナイフが当たる。続けざまに石が、茶碗が、花瓶がツチクイモドキの体に当たる。離れた位置からは屋敷の仲間が全員で物を投げ、虫の気を逸らそうと援護している。エータは腕に傷を負い、ラムダは肩で息し、ガンマは斧をはじく巨虫の硬い甲殻に舌打ちする。シノビたちは巨虫の関節と目を狙うが有効な攻撃はできずにいる。

そんな中、ニュウはただシグマだけを見つめていた。

どうしてこんなことになっているんだろう、と彼女は思った。ほんの少し前まであんなに幸せだったのに、と。

――突き飛ばされたことを覚えている。

体が揺らされ目が覚めると、大きい生き物の気配が屋敷の庭にあった。ニュウはシグマを目で探し、広間から外へと出ていく彼の背中を見つけた。駄目だ、と思った。理由はわからないが、シグマを外に行かせてはいけない、とニュウは思った。

クシーが止める間もなくニュウは駈け出した。広間を出て、廊下

を走り、そうして玄関を飛び出した。
そこに、体長四メトゥルの巨大な蟻が三匹いた。ツチクイモドキだった。
エータやガンマやシノビの皆が虫に向かっていくなか、「撤退しろ！屋敷に戻れ！」とシグマが叫んでいる。彼だけが冷静に「犠牲なしには勝てない」と判断していた。そして彼は仲間の犠牲を許容できる男ではなかった。
シグマは構えていた真っ黒な棒を膝に叩きつけて折った。すると棒から光が溢れ、庭にいる全員がシグマに気付いた。一度きりの切り札――使い捨ての魔法の棒を捨てると、彼は仲間たちに向かって呼びかけた。
「戻れエータ、戦うな！ガンマ、おまえもだ！ラムダ、ファイ、シノビも全員屋敷に入れ！」

――突き飛ばされたことを覚えている。

そこからは全てが一瞬だった。
争いにならなかったことをニュウは喜んだ。そうして屋敷の中へ戻ろうとした。
撤退を開始した仲間の目が玄関にいるニュウをとらえた。
「ニュウ、どうして！」とファイが叫んだ。
ニュウが振り返る。
同時に三匹のツチクイモドキが一斉に跳んだ。その内の一匹がエータの頭上を飛び越え、屋敷の正面玄関前に着地した。ニュウの目の前だった。
三匹は一斉に羽を鳴らした。それはあの不快な音だった。ガンマが顔を顰めた。ファイが耳を抑えた。ラムダが走った。それより早くシグマが駆け出していた。
ツチクイモドキは、一匹がガンマとエータに襲いかかり、一匹がシノビたちに襲いかかっていった。

最後の一匹がその複眼でニュウをじっと見つめた。ニュウは恐怖を感じなかった。ただ、大きいなあ、と思った。巨大な虫からは敵意を感じなかった。目の前の大きな生き物が自分のことを不思議がっていることだけを、ニュウもまた不思議に感じていた。

羽を鳴らしながら、ぎぎぎ、と虫は言った。その意味は、ニュウにはわからなかった。だが話しかけられていることはわかった。

ここはあなたのおうちじゃないわ、とニュウは言った。それは言葉ではなかったが、彼女はたしかに心でそう伝えた。虫は羽を鳴らすのをやめ、四本ある腕をすべておろした。ニュウは微笑んだ。虫もまた笑ったように彼女には思えた。――そこに、シグマが飛び込んできた。

虫の感情の色が変わるのがニュウにはわかった。それは敵意であり、害意であり、「奪う」という意志の色だった。「だめ！やめて！」とニュウは叫んだ。シグマがニュウを突き飛ばした。虫が四本のうち一本の腕を持ち上げた。ファイが魔法を放った。青い光が何本も走った。それは虫の体に吸い込まれて消えた。「そんな……」、ファイが呆然と言った。

ブツン――と音がした。

ラムダが絶叫した。

ニュウは地面を転がった。ぴちゃり、と彼女の頬に温かい液がかかる。それは血だった。ニュウは顔を上げた。そこには背中に穴を開けたシグマが倒れていた。

シグマは瞳孔の開いた目でニュウを見つめ、僅かに口を動かし、そして眠った。

彼の最期の言葉は「逃げろ」だった。

「あ」とニュウの口から意味を成さない音が漏れた。

ぎぎぎ、とツチクイモドキが『言った』。

屋敷の中から仲間たちがそれぞれ武器になりそうな物を持ち、飛び出してきた。

彼らは横たわるシグマを見つけて、一様に顔を歪めた。

争いが始まった。
ニュウはただ、シグマを見つめ続けた。
ファイが自分を庇うのも、仲間たちが自分を助けようとしてくれているのも、彼女にはわからなかった。

「だめって、言ったのに」

やがてニュウが呟いた。それは感情の色がまるでない声だった。
「やめてって……言ったのに……」
無表情で呟くニュウの頬を涙がつたい、こぼれ落ちた。
ぎぎぎ、とツチクイモドキが『鳴いた』。
ニュウは立ち上がった。そしてファイに守られた位置からツチクイモドキを虚ろな目で見つめた。
「かえしてもらうから」
ニュウは言った。

「シグマを――かえしてもらうから」

ニュウは何も無い宙空に右手を伸ばした。そこにはこの世で自分だけが見ることのできる『ユラユラ』がある。大気と植物にだけ見えていたそのゆらめきが、今はツチクイモドキの体からも無数に、風になびく紐のように流れ、揺れているのがわかる。
見える世界の全てに紐があり、それはゆらめき、漂っていた。石も、木も、草も、花も、人間もツチクイモドキも。今やニュウにはその全ての紐が見えていた。シグマの死を感じた瞬間から、強くはっきりと見えるようになっていた。見えてしまえばその意味は嫌でも知れた。
それは命だった。
ニュウは、この『ユラユラ』に触れることで、知らずに命を食べていたのだ。かつて彼女がユラユラを意識して触ると、それに繋が

っている木は枯れた。命をニュウに捕食されたことで死に、存在を終えたのである。そういうことが彼女にはできた。できるということをいま理解した。

ニュウは無数にゆらめく紐の一本に狙いを定めた。それは薄茶色の紐だった。ニュウはそれに意識して触った。かつてそうしていた以上に強く『食べたい』と意識し、紐に触れ、掴み、そして握り潰した。それは目の前のツチクイモドキに繋がる紐だった。

「ギイイイイイイイイイイイイイイイ！」

ツチクイモドキが突然、絶叫し、倒れた。大質量が地を叩きどすん、と大きな音が鳴る。両手を広げてニュウを庇っていたファイが「ひっ」と声を上げ、慌ててあとずさり、ニュウを抱きしめた。

屋敷の仲間たちも、離れた位置で仲間を襲う他の二匹のツチクイモドキも、みな一斉にニュウを向いた。ニュウは無感情な声でただ一言、倒れた虫に向けて呟いた。

おまえなんかいらない、と。

◆――◆――◆

「いま……なにがおこったんだ」

「ニュウちゃんが何も無いところに手を伸ばして、握りしめたら――」

「――ツチクイモドキが……死んだ？」

手のひらからツチクイモドキの命を食べたニュウは、しかし小さな声で「まだ足りない」と呟いた。

「ニュウ、あんた……」

「だいじょうぶ」ファイの声を遮り、ニュウは言った。「シグマは、

わたしが、なおすから」
ファイに抱きしめられたまま、再びニュウは手を伸ばした。
両手をすばやく動かし、無数の紐を、『食べないように』引っ張る。
彼女の世界は今やゆらめく紐に満ちていた。どこにも繋がっていない空気の紐を引っ張り、石に繋がる細い灰色の紐を引っ張り、森の木に繋がる緑色の紐を引っ張り、目当ての紐を紐でたぐり寄せる。そうして本体から引っ張ってきた薄茶色の二本を、ニュウは強く掴み、握り潰した。
庭に二つの絶叫が響き、二匹のツチクイモドキが絶命した。
それらと戦っていたラムダ、エータ、ガンマ、そしてシノビ六名は振り返り、握った両手を突き出したまま佇むニュウを見つめた。
「ちくしょう……っ」
倒れたままのシグマに目をやったラムダが地面に座り込んだ。

ニュウはファイの腕をほどくと、シグマの元に跪いた。
仲間たちが次々にシグマの元に集まりはじめる。
ニュウは目を凝らしてシグマを見つめた。シグマの体には紐が一本も繋がっていなかった。命の紐が、既に消えているのだ。
仲間たちが固唾を飲んで見守る中、ニュウは三度、虚空に手を伸ばした。ニュウに見える世界の中で、最も太く、最も輝きの強い紐――すなわち、ニュウ自身の紐を彼女は掴んだ。
そうしてその紐の先端をシグマの体に突き刺し、ニュウの命と接続した。
屋敷の仲間たちには、ニュウが手のひらをシグマの穴の開いた背中に当てただけにしか見えない。しかしその行為を誰もとめなかった。全員の心の中に「この子なら」という理由のない期待があった。
シグマの体から、緑色の光の糸が一本、ゆらりとたちのぼった。
二本、三本と糸は数を増し、やがて数えきれないほどの糸が束になり、その束が光の渦となった。それは命の紐を見ることのできな

い屋敷の住人たちにも見える、緑色の、小さな光の竜巻だった。誘拐初日にシグマのやけど跡を治しのがこれだと知っているのは、この場ではラムダ一人だ。しかし場の誰もがその温かい光に癒しの色を見ていた。

その小さな輝く竜巻を、ニュウはシグマの中に押し込み、『命令』した。

「なおれ」

光の竜巻が消え、シグマの体が薄く輝く。仲間たちは期待に顔を上げた。

しかしニュウにはわかっていた。これではまだ足りないと。虫を三匹食べた程度では、『命の複製』にはまだ足りない。たりない。もっと。もっとたくさん食べて、シグマにあげなくちゃ。ニュウは両手を高く上げて世界を凝視した。

――ひつようなのは、シグマいっこぶんを、ゼロから作るだけの命……

構成情報は知れている。

素材を。もっと素材を。

ニュウは再び世界に『命令』した。今度は「あつまれ」と。

命の紐がニュウの周囲に集まってくる。ニュウはその中から、とりわけ無機物の命を選び、手を伸ばしてはそれを掴み、次々と食べていった。庭の岩が突然まっぷたつに割れ、土が乾涸び、馬車がバキリと砕けた。大気が轟々と音を立て、高く上げたニュウの手のひらの上に光の竜巻があらわれる。それはぐるぐると回り、回るごとにどんどん命を取り込み、強く光り輝いていく。頭がひどく痛む。やめろ、やめろ、と深いところで誰かが言う。それでもニュウは食べることをやめなかった。

たりない。たりない。まだたりない。
もっと。もっと。もっとたくさん。

『ニュウ。これ、どっちがハナコで、どっちがタロウだったかな？』
『いやあ。おじさん、焼き鳥には目がなくてね』
『こらこら、オレンジ水は一日一杯までの決まりだろう？』

ニュウの心の中をシグマとの思い出がポップコーンのように弾けて暴れまわった。

『ニュウの髪は素敵だよ。夕陽を浴びた麦畑の色だ』
『ああ、なんて素晴らしいんだ。僕は――キミが欲しい』
『ニュウっていうのか。可愛いね。可愛いキミにぴったりの名前だ』

とうとうニュウは有機物に――生き物にまで手を出した。
森の全ての木から少しずつ少しずつ、命を略奪していく。鳥からも、獣からも、魔物からも、森のすべての生き物から少しずつ命を掠めとっていく。
やがて目を開けていられないほどの光が竜巻に宿ったとき、ニュウは『食べる』のをやめた。これ以上は制御できない、これ以上は纏められないという限界の量まで命を集め、ようやく竜巻の回転をゆるめた。

『お嬢ちゃん、おじさんと楽しいところに行かない？』
『いきます。つれてって！』
『えっ？』

「シグマ。いま、なおしてあげるからね」

呟き。見つめ。微笑む。
そうしてニュウは、その竜巻を。
彼女の紐と繋がるシグマの背中に、力いっぱい叩き込んだ。

「なおれえええええええええええええ！！」

命が暴走する。
生が捏造されてゆく。
ニュウとシグマを中心にして。
屋敷の全てを飲み込むほどの光が、天に向かって立ちのぼった。

１３．それからのおはなし（前書き）

ありがとうございました。

13．それからのおはなし

「ひろおい！」
「ここが僕らの新しいお家だよ」
「どんぐりやしきよりも広いわ！すごおい！」
「はっはっは。そうだろう、そうだろう」
「ちょっと。ここあたしの家なんですけど」
「今日からここは『どんぐり屋敷二号』だ」
「すごおい！」
「ねえちょっと。ねえったら」

◆――◆――◆

なんだこれは、と騎士が呟く。王女もまったく同じ気持ちであった。
黒の騎士ヨゾラと赤の王女ロカニが戻ると、どんぐり屋敷は瓦礫の山になっていた。
瓦礫の、かつて正面玄関だったあたりに皆が集まっており、中心にはシグマとニュウが手をつないで横たわっていた。
「何があった」
ヨゾラは若い男に聞いた。エータだった。
彼は「いや、あの」と目を泳がせた後、「先輩に聞いてください」とガンマに丸投げした。ヨゾラがガンマに目をやると、今度はガンマが目を逸らした。彼は言った。「ラムダに聞いてください」と。
いよいよきな臭い雰囲気である。ヨゾラはギロリとラムダを睨んだ。しかしラムダは真っ直ぐにヨゾラを見つめ返した。
「何があった」ヨゾラが言った。

「何も」ラムダが答えた。
周囲の仲間たちがゴクリと唾を飲み込む。このときラムダはいっぱいいっぱいであった。一方ヨゾラは彼らの放つ空気から『決意』を感じ取った。つまり、無理に聞こうとするなら戦争だ、という決意を。ヨゾラは溜息をついた。皆殺しにするのは容易い。しかし気分のいいものではなかった。ラムダが深く頭を下げた。
「王女殿下、ヨゾラ閣下。この度は我々をお助け頂き、ありがとうございました。謹んで感謝申し上げます」
うむ、と王女が頷く。ヨゾラが目を細める。ラムダは続けた。
「この御恩は必ずお返し致します。この先我らはずっと、命尽きるまでずっと、王女殿下の側(がわ)でありたいと思っております。王子ではなく、王女殿下の側で」
交渉のつもりか、とヨゾラは思った。彼は言った。
「ラムダさん。俺は、なぜ屋敷が潰れているのかと聞いているんだ。さっきの光と関係があるんだろう？」
「ツチクイモドキが爆発しました」
「……」
「……」
嫌な沈黙が流れた。それはねえだろう！と仲間たちは一様に胸中で叫んだ。
「西熊さんの――シグマさんの服に穴が開いているのはなぜだ」
「転んで破けたのです」
「なぜあの二人は寝ている」
「遊び疲れたのです」
「ツチクイモドキが三体も死んでいるのは？逃したのはこちらの落ち度だった。あなたたちで倒せるような魔物じゃない」
「我々も日々鍛えておりますので、なんとか倒すことができました」
「無傷でか」
「いいえ。エータ君が肩と腕に傷を負いました」
「ツチクイモドキの死体が無傷だと言ってるんだ」

「そ、ういうことも、あるかと」
「屋敷を壊して天まで光をたちのぼらせるような爆発をしたのにか」
「……そ、そういうことも、あるかと」
続け様のヨゾラの質問に対し、ラムダは死に物狂いでしらを切り通した。ニュウの力については隠しておいたほうがいい。全員で話し合い、そういう方向で動くことに決めたのだ。ラムダは中でも特にきびしい、王女と騎士への事態の報告という役目を一身に背負い、そして全うした。大事な『御主人様』の命を救ったニュウは、彼にとってもはや命の恩人よりも上位の存在であったからだ。最強の騎士はしぶしぶ納得し、王女はケラケラ笑った。この件でラムダは仲間たちから英雄のごとく褒め称えられることとなる。

「できれば、その娘のことは大事にしてやってほしい」
去り際、黒髪の騎士はそう言った。全てわかったうえで、それでもおまえたちの茶番に乗ってやるのだ、という様子であった。
「彼女が何をしたのかはおおよそ想像がつく。カミヤドリは狙われやすい。守ってやってくれ」
カミヤドリというのがなんなのか、わかる者はその場にいなかった。しかしわからずとも仲間たちは頷いた。彼らの思いは同じであった。即ち、当たり前だ、と。
しかして騎士と王女は――
「ヨゾラ、早く帰ってそなたに抱かれたい」
「俺もだよ。俺も早く、キミを抱きたい」
――無敵のバカップルは、瓦礫の山を去っていったのだった。

あのあと、ニュウはすぐに気を失った。
屋敷を瓦礫にした光の柱がゆっくりと消えていくと、その中点には手をつないで眠る二人がいた。シグマとニュウだった。ニュウは

シグマが『新しい命』を得たのを確認すると、満足の笑みを浮かべて意識を手放したのだった。それを知らない仲間たちは「大将だけでなくニュウまで！」と誤解し、クシーなどは声を上げて泣いた。のちにエータとガンマは気付く。ツチクイモドキとの戦いで負った自分たちの傷が完全に治っていることに。

瓦礫の中から掘り起こした毛布で一夜を過ごし、太陽が昇る頃、ニュウは目を覚ました。

不寝番（ふしんばん）のガンマとエータが大いに心配し、ラムダとシノビたちは感謝の意を込めてニュウを胴上げした。その掛け声と笑い声で皆が起きだし、あれよあれよという間にお祭り騒ぎとなった。自分を中心に大盛り上がりの仲間たちを眺め、なんだかわからないけど楽しいなあ、とニュウは思った。

ひとりひとりから理由不明な『ありがとう』を貰ったニュウは、ただ一人お祭り騒ぎに参加しなかった男の元へとテクテク向かった。その後ろを仲間たちがぞろぞろとついて来る。やがて毛布にくるまった男の前まで歩くと、ニュウは仲間たちを振り返った。

「やっちまえ」

ガンマが言う。その隣でクシーが親指をたてる。

「やっちゃえやっちゃえ」

エータが笑う。

「御主人様もお悦（よろこ）びになります」

ラムダが頷く。

「あんたのお仕事だもんね」

ファイが苦笑する。

ニュウは「うん！」とにっこり笑うと、瓦礫になったどんぐり屋敷の偉大なる大将さまに、助走をつけてジャンピング・ボディプレスをぶちかましたのだった。

「シグマ、朝よ！えいっ、えいっ、えいっ！」

毛布から「むぐうっ！」と声が上がる。
「ニュウ……痛いよ。おじさん死んじゃうよ……」
丁度その時、シノビのササノハが戻って来た。
彼女は息を切らしながら仲間たちのもとまでよろよろ歩き、そしてぼそりと呟いた。
「なんで、屋敷、ないんですか？」
瓦礫の庭は爆笑に包まれた。

◆――◆――◆

「やあルフォー。相変わらず綺麗だね」
「あらユーニ。相変わらず覇気のない顔ね」
「突然なんだけど、僕らをここに住ませてくれないかな」
「本当に突然ね。事情を聞きましょうか」
「こんな大きな屋敷に一人だなんて寂しいだろう？使用人もいないそうじゃないか」
「事情を話して、ユーニ。話はそれからよ」
「ラムダを貸すよ。好きに使ってくれていい」
「事情が先よ。勿論ラムダちゃんは貰うけど」
「どんぐり屋敷が潰れて、住むとこなくなっちゃったんだ。いや、参ったよ。はっはっは」
「……えっ？」

それは青い屋敷であった。

夜である。少ない荷物を壊れかけの馬車二台に積んだどんぐりズ一行が、魔女ルフォーの屋敷を訪れていた。どんぐり屋敷が文字通りの意味で吹き飛んだためである。モルイの街の外周部、囲郭都市

の壁の外側に建つ大きな屋敷。今はその門前でシグマとルフォーが交渉しているところであった。
「それは、一昨日のあの光と関係があるのかしら？」
青い髪の美しい魔女――かつてこの国の王の娼であった女が言う。シグマはわざとらしく肩をすくめた。
「そのことでキミに聞きたいことがあるのは事実だ、とだけ言っておくよ。なあ、中に入れてくれないかな。小さな子どももいるんだよ」
「子どもは嫌いだわ。だって若いもの」
「キミだって若いじゃないか」
「ユーニ。たしかあなたには借りがあったわね」
「そんなものは大したことじゃない。たかだか命を救ってあげた程度のものじゃないか。まったくもって、キミはそんなこと、気にするべきじゃあないね。もしどうしても気になるというのなら、そうだね。僕らに壁と屋根をお提供してくれる、というのはどうだろう？それでチャラにしようじゃないか。家事はうちの子たちに任せてくれていい。みんな優秀だよ」
「それは素敵ね」
ルフォーは妖艶に微笑した。
どんぐり屋敷二号、誕生の瞬間であった。
「よーし、許可が出たぞ。みんな入れー」
十日後、青の魔女はその生涯でただ一人、彼女を凌駕する才を持った弟子をとることとなる。
弟子の名前はニュウといった。

◆――◆――◆

★愛想う者／ニュウの独白

どんぐりやしきが壊れちゃったので、ルフォーのおうちに来ました。
いんせきっていうのが落ちてきて、壊れちゃったんだって。
ルフォーのおうちは、大きくて、青くて、かっこいいです。
わたしは青が好きです。黒はもっともっと好きです。
ルフォーはまじょです。シグマが言ってたの。
まじょ！すごい！
それから、ルフォーはとってもきれいです。ファイよりです。
わたしは、きれいなお姉さんいいなあなりたいなあ、と思いました。
どうやったらきれいなお姉さんになれるか聞いたら、ルフォーが甘いのをくれました。
「うふふ。素直なお嬢ちゃんにはキャラメルをあげましょう。この世界には殆ど無いものなのよ」
きゃろめろは甘くてクニクニしておいしかったです。でも歯についた！
ルフォーのおうちでもわたしはメイドさんです。
メイドさんのふくはおむねのところがひらひらしてるから、わたしは好きです。

ルフォーのおうちでは、わたしとおじいちゃんのお部屋は、べつべつになりました。
一人でいっこのお部屋なんて、お金持ちの人になったみたいです。
わたしは、うれしいけど、おじいちゃん寂しくないといいなあと思いました。
おじいちゃんは、だいじょうぶだいじょうぶ、と言いました。
おじいちゃんは、わたしのことが大好きです。

わたしもおじいちゃん大好き！
おじいちゃんは、さいきん、ふわふわしてます。
わたしは、ずっとおじいちゃんといっしょでうれしいなあと思います。

ルフォーのおうちに来てから、シグマがまえより、もっともっとやさしいです。
シグマがやさしいと、わたしはうれしくなって、おなかがもにもにします。
ルフォーのおうちでは、シグマのお部屋は2かいです。
わたしのお部屋も2かいです。
わたしは、朝ぎゅってするのがながくできるからいいなあと思います。

わたしは、こんなゆめみたいなのが、ずっとつづけばいいなあと思います。
わたしは、シグマとクシーとファイと、メイドみんなと、ガンマとエータとラムダと、タウと、みんなみんな仲良しで、みんなみんなずっといっしょだとうれしいなあと思います。

わたしは、げんきです。

◆――◆――◆

「ねえ、シグマ」
「なんだい、ニュウ」
「わたし、シグマのこと、好きだわ」
「僕も――いや、おじさんもニュウのこと、大切に思ってるよ」

「シグマが『ぴんち』になったら、わたしが助けてあげるわ」
「嬉しいことを言ってくれる」
「もしもわたしが『ぴんち』になったら、シグマは助けてくれる？」
「もちろんさ。ニュウを助けないなんて、考えられないよ」
「それはなぜ？わたしのこと、好きだから？」
「なぜって。そんなの、単純な話だ」
「なぜ？」

「僕は、身内には甘いのさ」

――――――――――――

『魔王誘拐』
第一章・了

１４．おつかい（前書き）

総合評価２０００を喜び、本日二話目。

14．おつかい

「空飛ぶ幼女が出たわ！」

◆――◆――◆

「空飛ぶ幼女ぉ？」

茹でたジャガを潰しながら、青年は素っ頓狂な声を上げた。

夕食どき、支度（したく）の最中のことだった。

「おうとも。外周の屋敷に出るらしい」

父親が脅すような声で言った。

何を言ってるんだこいつは――青年は胸の内で溜息をついた。この男の怪談に付き合わされるのはこれで何度目になるだろうか。青年はじとじとした目で父親を見つめた。少なくとも両手両足の指では足らないだろう。髭の本数でもおそらく足りない。子ども相手の仕事で疲れているのに、毎度毎度、頷いて聞いてやる自分は親孝行という言葉の体現者であろうよ。そんな風に彼は思った。父親の怪談はどれもありきたりでつまらなく、そしてなにより話し方が下手だった。

「こいつは俺が独自の経路で仕入れた話なんだがな」

お決まりの語り出し。父親は話しはじめる。

またかと青年は思う。青年の父は独自の経路が大好きだった。大概の場合、それは隣の老人の愚痴や肉入りスープ屋の売り子からの又聞きなどであり、話の多くが信憑性にかけた。

父親がその話を聞いたのは巡りの語り屋からであったという。

それは最近、北門広場の市の入り口を稼ぎ場にしている声の良い

語り屋であった。彼は若い女が好む話、たとえば英雄ヨゾラとロカニ王女の物語などをいくつか情熱的な調子でうたいあげた後、おまけのように、囲郭都市モルイの最新の怪談――『空飛ぶ幼女』の怪談を語ったのだった。

曰く、空飛ぶ幼女はモルイの街の壁の外、
外周村落の《青色屋敷》に住んでいるという。

青色屋敷と云えば、かの有名な魔女《青のルフォー》の屋敷だ。
青のルフォーは四年前まで王の愛妾だった女である。ルフォーは何をしでかしたか、四年前より、一級都市への――即ち壁を持つ囲郭都市・城塞都市への出入り一切を禁じられていた。噂では、彼女はモルイの街壁の外側に巨大な屋敷を建て、そこで霞を食んで暮らしているとのことであった。霞が主食かはともかくとしても、屋根も壁も青く塗られた大きな屋敷が壁の外にあり、そこで魔女が一人静かに暮らしていることは事実だった。門番も使用人もいない屋敷。住んでいるのは美女ひとり。そんな場所に不逞の輩が押し入らないのは、偏に屋敷の主人が魔女だからであった。青のルフォーに害なす者は丸まらないダンゴムシに変えられてエビ反りの目に遭う、というのが街で多くの者に信じられている噂なのだ。
さて、二十日ほど前からその屋敷に客が住み着いた。
それは三十人ほどの珍妙な団体だった。ときおり数人のメイドが西の大門を超えて買い出しに来るのが目撃されるくらいで、彼らの素性は街の人間たちにはまるで知れなかった。外周村落の住民の証言から、最近の青色屋敷は昼も夜も騒がしい、ということは本当とされている。真実その団体は屋敷に住んでいるのだ。彼らの多くは魔女ルフォーと同じように、昼も夜も屋敷とその庭だけを生活環境としているようだった。不健康な話であるが、しかし近隣に住む者たちはみな、魔女の客であるからと納得していた。
ある時、外周村落にひとつの噂が流れる。それは次のような内容

だった。

青色屋敷には空飛ぶ幼女がいる。

俄(にわか)には信じがたい話である。目撃者は村の女だった。

「見間違いなんかじゃないわ！真昼間のことよ。あたし、ケムリなんかやってないんだから！」

女は語った。

女はその日、青色屋敷の近くでキノコをとっていた。当初はそんなところまで行くつもりはなかったが、高く売れるキノコがぽつぽつと群生しているのを見つけ、欲が出たのだ。ふと気づくと女は屋敷の側(そば)まで来ていた。森の木々が隠れ布となり、ちょうど庭の方からは見えにくい位置だった。別段、深い理由があったわけではない。怖いもの見たさとか、金持ちの暮らしが気になったとか、その程度の動機だ。女は木陰からこっそりと鉄柵の向こう――庭の様子を眺めた。庭には小綺麗な格好をした六人のメイドがいた。一人などはまだ十そこそこと見られる子どもだった。彼女たちは楽しげな声をあげ、お喋りをしながら大量の洗濯物を庭に干しているところであった。

しかし、その方法が異様だった。

噂では、青色屋敷には三十人以上もの人間が暮らしていると聞く。いかにも、女には洗濯物の量が、三十人分といっても決して誇張にならないだけあるように思えた。大量の洗濯物を間隔をあけて干すためには広い空間が必要になる。屋敷の庭は確かに広かったが、趣味なのか、いたるところに石像が置かれており、洗濯物を干すには向いていなかった。

しかし、メイドたちは全ての洗濯物を、それぞれきちんと間隔をあけて干していた。方法は口で説明すれば簡単なものだ。庭の木から木へと物干しひもを結び、そこにズボンやらシーツやらをかけていくのである。これだけであれば難しいことなどなにもない。問題

はその高さだった。
庭の石像は、どれも大人の男が手を伸ばしたくらいの絶妙な高さで、必然、紐の位置はそれ以上の高さになる。それはちょうど、大人の男の頭の上にもうひとり男が立ったくらいの高さだった。当然、跳ねて届くような位置ではない。――そんな高さをメイドが飛んでいた。

「一番ちっちゃなメイドがね、洗濯物を持って飛ぶんだよ。ふわふわ、ふわふわって」

それは確かに飛行だった。跳躍ではなく飛行。まるで蝶のように、幼メイドはふわふわと空を飛んでいた。シャツを三枚ほど持ってふわり飛び上がり、それを干してまたおりてくる。降りた位置には別のメイドが干しやすい形に整えた洗濯物を持って待機している。絶妙なコンビネーションで行われる物干し行為を、女は口をあんぐり開けて眺めた。
やがてふと、幼メイドが森のほうを向いた。ちょうど空に飛び上がったときだ。見えてはいないだろう、と女は思った。しかし空と陸で視線はしっかり交わった。幼メイドはにこりと笑い、そして手を振った。「こんにちは」。そんなふうに口が動くのが見えた。
女は慌ててその場を離れた。そうして村に帰り、森で見たことを食客に報告した。
「空飛ぶ幼女が出たわ！」

「その食客が語り屋だったってわけさ」

へえ、と青年は言った。なかなか興味深い話だった。
いつもの「家を飲み込む大蛇が出た」や「二足歩行のでかい虫が虎を担いでいた」などの阿呆話よりはよっぽど現実味があるように思えた。

「語り屋が女から聞いたらしいんだが、その子の名前は『ヌーン』っていうらしい」
「ヌーンか。変わった名前だな」
「他のメイドがそう呼んでたらしい。『ヌーン、終わったらオレンジ水、飲みましょうね』って」
「空飛ぶ幼女はオレンジ水が好きなのか？ちょっとイメージと合わないな」
「いや。そこは、いっても幼女だからな。そんなもんだろう。俺は思うんだが……その子はもしかしたら、妖精なんじゃないだろうか」
「妖精って……あの妖精か？」
青年が言う。父親はああ、と答えた。
父親が言っているのは、これもまた街の噂の一つだった。モルイにある王立第三碩学院――通称第三アカデミーの校庭を夜な夜な妖精が飛びまわっている。そんな、学生たちの間で有名な噂だ。これは他でもない、青年が教えた話だった。彼はアカデミーで基礎魔法学の教員をしていた。
勿論、二人は妖精などというものの存在を信じてはいなかった。彼らは『妖精のような魔法』を使う人間がいるのではないか、という議論をかつてしたのだ。アカデミーで妖精の噂が流れ始めた頃のことである。空を飛ぶ魔法。それは未だ誰も発表していない魔法。発表されたなら歴史が動くほどの魔法。魔法にたずさわる者ならば一度は見る夢だ。父親が言っているのは、つまりそういうことだった。
「アカデミーの妖精と空飛ぶ幼女は同一人物だと俺は思ってる」
楽しげな様子で父親が言う。青年はふむ、と頷いた。今回ばかりは、父親の怪談が面白いものを呼び込みそうな予感があった。
俺の推理では、と父親が言う。その先の言葉は知れていたが、青年はあえて口を挟まなかった。父親の話に興奮している自分を青年は自覚していた。
しかして父親は言ったのだった。

「――青色屋敷の空飛ぶ幼女は、おまえの学校にいる誰かだ」

◆――◆――◆

「見ろよ。今日も幼女が飛んでるぞ」
「いつもより低いな。こりゃ一雨(ひとあめ)くるか？」
「どうかなあ。おーい、ニュウちゃん！今日どうよ、降(ふ)る？」
「わからなーい！でも、おなかがぴちぴちするわ！」
「あー、こりゃ降るわ、雨」
「降るなあ。『ぴちぴち』の日は小雨(こさめ)だっけ？」
「ああ。洗濯物いれるようメイド連中に言っとこう」
「おーい、ファイ！今日ぴちぴちだぞー！」
「うそっ！朝は『くるくる』って言ってたのにっ！」

エプロンドレスの少女が空に浮かんでいる。
裸の男の石像が無秩序に配置された青色屋敷の庭。その上空を『おししょうさま』の指導のもと、今日もふわふわとニュウが飛んでいた。
「ニュウちゃーん、そろそろ降りておいでー。キャラメルあるわよー」
屋敷の窓から青髪の女が言う。ルフォーである。自分のいる四階よりも更に高い位置を飛ぶニュウに彼女はひらひらと手を振った。
「はーいっ！」
元気に手を振り返し、にへにへ笑いながらニュウが降りてくる。両手に靴を持ち、手足をだらんと垂らして空中をゆっくり移動するその様子を、ルフォーはまるでミツバチのようだと思った。
やがてトン、と音を立て、ニュウは窓枠に着地した。ルフォーは

「おつかれさま」と言うと、袖から『森永』という謎の記号が印字された黄色の紙箱を取り出し、その中にある小さな四角い塊をひとつ可愛い弟子に与えた。ニュウは「ありがとう！」と喜び、窓枠に靴を置き、小さな塊の包み紙を剥がして口にいれた。甘いくておいしい。なんて素敵な味なのかしら！ニュウは思わずへら、と笑った。菓子である。名前をキャラメルという。ニュウはこれが大好きで、ルフォーと『おべんきょう』をするときには必ず一個もらうのだった。

ルフォーはゆったりした服の袖に紙箱を仕舞うと、いとおしむようにニュウの頭を撫でた。ニュウはえへへと笑ってルフォーの手に触れた。

「『飛行』に関しては、もうあたしに教えられることはなさそうね」

「ほんとう？わたし、すごいっ？」

「ええ、凄いわ。飛行師は結界師と並ぶレアだもの。それが発現するだけじゃなく、才能もあるっていうんだから、ニュウちゃんは大したものよ。学校の先生にもなれるわよ？そうしたら一生食べていけるわ」

レアという言葉はわからないが、褒められていることはわかった。ニュウの夢は『およめさん』であるから学校の先生になるつもりはないが、それでも褒められるのは胸がふわふわして素敵な気持ちだった。

人間の扱う魔法は大きく五つに分けられる。時間干渉・空間干渉・自然干渉・人体干渉・精神干渉の五つだ。魔法の道に生きる者は大概がこの中のどれか一つの才能を持っている。人体と精神、空間と自然など、二つに干渉する力を持つ人間もいるが、非常に稀で、まずもって国や力のある商家に囲わているものだ。初日の検査でルフォーの見せた『飛行』を即座に再現し『工夫』までしたニュウは少なくとも空間・自然・人体の三つに干渉するだけの力を持っていることになる。これはルフォーに勝るとも劣らぬ素質であった。ルフ

ォーはすぐにニュウを気に入った。ニュウを虐げた村を滅ぼさなかったことでシグマを責めたほどだ。優秀な者は優遇されなくてはならない、ルフォーはそう考えている。劣等が優等の上に立つことを許容できる人間ではないのだ。女だからという理由で優秀な王女が軽んじられるのは国民として許せるものではない、といって王子暗殺を企てた女である。王が恐怖するのも無理からぬ話だった。

「一応言っとくけど、それはまだ屋敷以外で使っちゃ駄目よ？騒ぎになっちゃうから。飛んでいいのは誰も見てない所でだけ」

「はあい！」

『おべんきょう』に魔法が追加されて以降、ニュウはめきめきとその才能を発揮していった。

切っ掛けはシグマだった。シグマはニュウの力を『心配』し、魔法研究家であるルフォーに相談した。その際、彼は『光の柱』の一件を仲間たちの証言も交えてルフォーに話した。ルフォーは目を大きく開いて言った。

「驚いた……それ、《神矢取り（かみやど）》よ」

「神宿り？」

「ええ、神矢取り」

「そういえば……よぞら君がそんなことを言っていたと聞いたな。カミヤドリは狙われやすいって。ルフォー、そのカミヤドリっていうのは何なんだい？」

シグマは聞いた。そうね、と言いルフォーは顎に手を当てた。彼女は説明した。

「《神矢取り》は、選ばれてしまった人間よ。あなたの世界の言葉でいうなら、『チェンジリング』かしら？」

「妖精の取り替え子か？」

「妖精じゃなく、神よ」

生まれたときから『魔法では説明のつかない現象』を起こすことができる人間を魔法研究家たちは《カミヤドリ》とよんだ。そして

カミヤドリの起こす不思議な現象は《奇跡》と。魔法研究家の間では、カミヤドリは何らかの大きな力と繋がって奇跡を起こしているのだとする説が多数派である。その大きな力は『神の矢』だと考えられていた。

この世界で一般的に神とされているのは『見えない矢を放つ大いなるもの』だ。

・朝起きるのは神の放った見えない矢が体をかすめるから。
・眠るのは見えない矢に意識を射抜かれるから。
・死ぬのは見えない矢に魂を貫かれるから。
・生まれるのは見えない矢が腹の中の子どもを起こすから。

神の矢を見ることができるのは生まれる前の胎児と死者だけとされている。

カミヤドリは生まれる前に母の胎内で見えない矢を掴んでしまい、世界から神と勘違いされた者と考えられていた。世界に神と思われているから、奇跡を許されているのだと。

ルフォーはニュウに興味を持った。それというのも、カミヤドリは魔法を使えない、という話を彼女は専門家から聞いたことがあったのだ。しかしニュウには魔法のもととなる力が確かにある。ルフォーの研究者としての血が騒いだ。魔法も奇跡も両方あつかうカミヤドリ――想像するだけで胸が踊った。彼女は企み、言った。

「ユーニ。カミヤドリの力は強大だわ。それと知られてしまえば色んな人や組織から狙われてしまう。《写本》だって動くかもしれないわ。だから、わたしがニュウちゃんを鍛えてあげる。なにかあっても、最低限自分の身を守れるように」

「ありがとう。頼むよルフォー。キミに相談してよかった」

完全には信用せず、けれども悪いようにはならないだろうという思いから、シグマはそうこたえた。結果としてそれは正解だった。

こうしてニュウの『おべんきょう』に魔法が追加されたのだった。

「さて、それじゃあニュウには単位修得の試験を受けてもらおうかな」
並んでベッドに腰掛けるニュウの髪をくるくるいじりながらルフォーが言う。ニュウは足をぶらぶらさせ「しけんー？」と聞いた。
ルフォーはええ、とこたえた。
「これに合格したら次のステップに進んで、あたらしい魔法を教えます。シグマのお手伝いができる魔法をね」
「やるわ！わたし、しけんやる！」
はしゃぐニュウをルフォーは微笑ましく見つめた。
そうしてルフォーは告げた。近頃過保護な誰かが猛反対するであろう試験内容を、楽しげに。
「試験は、おつかいよ。モルイの街のアカデミーに言って、学長先生にあるものを渡してもらうわ」
できるかしら？
挑発するようにルフォーが聞く。
対するはニュウである。
返答は明らかだった。
彼女は花のように笑い、答えたのだった。
「まかせてっ！」

15．冒険前夜

「シグマ、聞いて！わたし、おつかいに行くの！」
「おつかい！？――あの……え？それは、うん？あれかな、ニュウ一人で行くのかな？」
「うんっ！」
「誰に頼まれたんだい？ラムダかな？いやあ、もしそうなら、はっはっは。おじさんちょっと色々と考えなくちゃならないなあ」
「ちがうわ、シグマ。わたし、たのまれてなんかないもの。これは『しけん』なんだから」
「試験？」
「しけんよっ！すごい？」
「試験って……いや、凄いよ。凄いけどさ、でもニュウ。キミには、そういうのはまだちょっとだけ、ほんのちょっとだけ早いんじゃないかなあ？勿論、できないと言うわけじゃないんだ。ただ、物事には順番ってものがあって。鳥だって最初から飛べるわけじゃない。子どもの鳥は親鳥が飛ぶのを見て、羽の動かし方を練習して、それでようやく飛べるようになるんだ」
「わたし、もう飛べるわ」
「そのとおりだ。今のは喩えがわるかったね。おじさん失敗しちゃったよ。そうだな。つまり魚だって最初は泳げないわけで――」
「おさかながおよげなかったら、おぼれて死んじゃうわ」
「そのとおり。だから、僕が何を言いたいかというとね」
「うん」
「つまりだ。つまり、そう」
「うん」
「……気をつけて、行ってくるんだよ」
「はあい！」

◆――◆――◆

「ニュウちゃんの尾行ですか？」
青色屋敷の屋根の上。シノビのナンバースリー・ササノハが言った。この国の王家の者と同じ髪色、赤をなびかせる女だった。
隣に座る短髪の男が「ああ」と頷く。シノビの副隊長・ナノハナである。時刻は昼過ぎ、昼食の最中であった。
なんでも、とナノハナが言う。ササノハは茶を差し出した。
「ん、わるいな。――なんでも、魔女殿がニュウに課した試験の内容が『おつかい』なんだそうだ」
「ああ、そういえばニュウちゃん、ルフォーさんに魔法を習ってるんでしたっけ」
「ふよふよ飛んでるのが日常になってて忘れがちだがな」
「それをわたしたちが尾行すると？」
ナノハナはずずず、と茶を啜り首肯した。ササノハは首を傾げた。
「先輩。それは任務なんですか？なにか、危険があるとか」
いや、とナノハナは首を横に振った。「そういう訓練をしよう、という話だ」と彼は続けた。
「知っての通り、ニュウの『索敵能力』は凄まじいものがある。自室で大将閣下が『おつかい……尾行する必要が……』と仰られているのを聞いてな。俺たちはまだまだ未熟だ。そのことはツチクイモドキの一件でもわかってる。大将閣下がそうなさるように、俺たちもこの機を有効利用しない手はないと思ったんだ」
「なるほど、そういうことだったんですか。ニュウちゃんのおつかいを知って、すぐにそれを訓練に役立てようと考えるなんて……閣下はやっぱり、只者じゃありませんね」
「隊長が崇敬するお方だからな。幸い、この屋敷には魔女殿がいる。彼女がいる場所が危険ということはまずないだろうから、俺たちは

屋敷を離れて訓練に専念できる。もしかしたらあの呟きは、俺がいることに気づいていて、俺に向けて言ったものだったのかもしれない。いや、考えれば考えるほどそうとしか……そうだ。閣下は虫どもとの戦いで役に立てなかった俺たちに思うところがあるんだ。かといって、閣下は仲間を切り捨てるようなおひとじゃない。それで俺たちに訓練の機会を教えてくださったんだ。……そうか。あれは俺たちシノビへの『めっせえじ』だったんだ。おまえたちの成長を待つ、というめっせえじ。思えば閣下は頬に七粒のゴマをお付けになっていた。閣下がそんなみっともない真似をするなんておかしい。気付くべきだった。七は隊長を抜かした俺たちシノビの数。あれは隊長がいなくてもシノビ七人で力を合わせて成長せよという声なきお言葉だったんだ。……くそっ。虫との戦いで隊長がいれば、なんて――一瞬でもそんなことを考えた自分が憎いぜ」

風が吹き、沈黙が流れた。

実際には、彼らの隊長はラムダとしてその場におり、そして彼もまたツチクイモドキの変異体を相手に『盾』以外の仕事を果たせなかった。ナノハナが聞いたシグマの独り言にしても、単にニュウを心配しての呟きである。ゴマにいたっては彼の創作料理『ごまにくまん』の食べかすである。そんなことなど知らぬナノハナは心に炎を灯した。ここにもまた一つの、思いと思いのすれ違いが生まれる。

やがてササノハが、わたしは、と言った。彼女もまた悔しい思いをしていた。

「わたしはその時……その場にいませんでした。虫との戦いで誰より役に立たなかったのはわたしです」

手紙を届けた後、王女を抱いて走りだした騎士ヨゾラに、ササノハは一瞬で置いていかれた。駿足が自慢の彼女は、しかし流れ星のような速さで小さくなる騎士をまるで追えなかったのだ。そうして屋敷についた頃、全ては終わっていた。彼女は戦うことさえできなかった。

そういう意味では、あの一件で誰より辛酸を嘗めたのはこいつな

のかもな、とナノハナは思った。
ササノハはちらりとナノハナを見上げた。彼はなにも言わず、遠く下の庭を見つめた。そこにはニュウがいる。彼はただ庭を見つめ続けた。人を慰めて満足するような男ではない。身内にはとことん厳しい男だった。ササノハにはそれがなんだか嬉しく思えた。
「成長してやる」
屋敷の庭で土をいじるニュウの頭を見つめたまま、ナノハナは硬いものを飲み込むように己に告げた。それは決意のこもった声だった。
「今回の『おつかい』――無駄にするわけにはいかない。俺たちはシノビだ」
はい、とササノハが言った。彼女は力強く頷いた。
「絶対に成長しましょう、先輩。隊長が帰った時に、驚いて腰を抜かすくらいに」
ああ、とナノハナが頷く。こうしてシノビの尾行訓練は決定されたのだった。

「俺たちはシノビ。俺たちがみんなを守るんだ」

◆――◆――◆

「おちびのおつかいを尾行？エータがか？」
「尾行っていうよりは、物陰からこっそり見守るって感じだろうな。張り切ってた」
「あー。あいつ、おちびに対して妙にお兄ちゃんぶってるとこあるからな。心配なんだろ」
「ちょっと甘やかし過ぎな気もするけどな」
「そうなのか？」

「よく飴とか甘いもんやってる」
「甘やかしってそういう意味か。虫かっての」
「おい、虫の話はやめろ」
「……すまん」
「まあ、エータより年下の子っていったら、ニュウちゃんとクシーちゃんと、あとはパイぐらいしかいねえからな。パイはあんなだし、クシーちゃんに至ってはエータよりずっと大人だ。小っちゃい子を可愛がりたい、大事にしたいって気持ちもわかるよ。ニュウちゃんいい子だしな」
「おちびはいい子だぜ、ほんと。おちびぐらいのもんさ、俺の肩を叩いてくれんのはよ。ファイなんか茹で鍋もって『骨が砕けてもいいなら』とか言いやがる」
「なんだ、肩凝ってるのか？俺、叩いてやろうか。うまいぞ」
「男はお呼びじゃねえよ。ガキでもいいから女よんでこい」
「そりゃファイも嫌がるわな」
「けっ」
「しかしあれだよなあ。ニュウちゃんも、そのうち大人になるんだよなあ……。そうしたら男ができたりするわけだ。そのときは俺たちにも紹介してくれるんだぜ、きっと。『わたし、この人とお付き合いしてるの！』って元気よく、あの笑顔でさ」
「おいやめろ馬鹿野郎、そういうのやめろ。もみあげぶっこ抜くぞ」
「なんでだよ」
「そういうのは駄目だ！許さん！」
「おまえ、エータのこと笑えねえよ」
「俺のは親心とか親戚心とか、そんな感じだ。エータとは違う」
「おまえ、その理屈はちょっと――」
「おい、ちょっと聞いてくれよ！」
「なんだあ？」
「なんだよ。おまえ扉にどんぐりの絵ぇ描く許可は貰えたのか？」
「なんだよじゃねえよ。それどころじゃない。ローが帰ってきてる

って話だ。おまえらもう聞いたか？」
「ほんとか！？」
「うっそ、いつの間に！」
「ああ、まだ聞いてなかったか。いやどうも、ファイが裏の森で会ったらしくてよ」
「久しぶりだなあ。半年になるか？今回はどれぐらい居られるんだ？」
「あいつ、特殊任務とやらで忙しいみたいだからなあ」
「どれくらいとかはわからん。ファイとちょこっと話して、すぐに森の奥へ行っちまったらしいから」
「おうおう。女どもが騒ぐぜ、こりゃ。パイなんかべたべたにくっつきたがるぞ」
「ローは、あれちょっと、あの顔、ズルだからな」
「ズルだな」
「ズルだ」
「おまけに頭も人当たりもいいってんだから、世の中どうなってんだか」
「あんな顔に生まれたら、俺なら間違いなく嫌な奴になるね」
「俺もだな」
「俺もだ」
「女遊びとか超するぜ。率先してする。道でちょっとでも可愛い子を見つけたらすぐに声かけてよ。そんでおまえらには『僕の恋人達を紹介するよ。ええと、一番は誰だったかな？』なんて自慢しちゃうね」
「それは顔がどうこうの問題じゃねえよ。生まれつきのクズだ」
「ファイの奴、なんか言ってたか？つまり……アレについてさ」
「ああ、言ってた」
「なんて？」
「ローの奴――また若返ってたってさ」

◆――◆――◆

「これも入れるの？」
「うんっ！」
「これは要らないんじゃない？」
「いるわっ、ぼうけんなんだからっ」
「水筒まで持っていくの？」
「水がないと、さばくに行ったときにたいへんだもの」
「『かいちゅーでんと』まで持っていくの？」
「シグマがくれたのよ！これ、すごいんだから。ここを、こうやって押すとね――ほら見て、ピカって光るの！」
「もう、知ってるわよお。わたしも持ってるもの」
「おそろいね！おじいちゃんももらったって言ってたわ」
「大将さん、仲間みんなにそれと『ぼーさいせっと』をくれるのよ。ほんとう、綺麗よね。こんなにツルツルして滑らかで。おまけにピカピカ光って……これ、なにでできてるのかしら？」
「『しいる』におなまえ書いて、はったのよ！ほら、ここ！」
「ほんとだ。ふふふ。『にゅう』って書いてある」

二人の少女がいた。
光石（ひかりいし）の灯りの下、桃色の小さな背嚢（はいのう）に少女が次々と『ひつじゅひん』を詰め込んでいく。隣に立つもう一人の少女は苦笑しながらその様子を見守っていた。ニュウとクシーの仲良しコンビである。時刻は夕食の片付けを終えてから二時間ほど後。ニュウの部屋でのひとこまだった。
おつかいの『しけん』を明日に控えたニュウは、その支度（したく）をこれでもかと楽しんでおこなっていた。楽しむことには真剣だ。楽しむ

とは、即ち「楽しい」の意を事物に付与する行為である。彼女は次々と楽しくなりそうな物、楽しいことに繋がりそうな物をシグマから貰った桃色の背嚢、『りゅっくさっく』に詰め込んでいった。たのしいなあ、とニュウは思う。明日を楽しむための楽しい下準備であった。

やがてそれが終わると、二人は居間に下り、それぞれの想い人と仲間たちに挨拶してニュウの部屋へ戻った。近頃ふたりの間で大流行の『おとまり』である。昨日はクシーの部屋だったので、今日はニュウが『ほすと』だ。日記を書き、水差しから『ねるまえのおみず』を飲み、くすくす笑いながらベッドに入る。光石に布をかぶせ、ひとつのベッドの中、乙女たちは夜のおしゃべりに興じた。話題はクシーが服に施すおしゃれな刺繍のことであったり、ニュウの『そらとぶまほう』のことであったり、青色屋敷の地下室のことであったり、モルイの街の怪談であったり、或いはそれぞれの『すきなひと』のことであったりした。

「明日はいつ出るの？」

「九時のカネがなったらよ」

「お昼はどうするの？」

「ルフォーがおかねをくれたの。輪銭（りんせん）が3こと、銅貨が1こ。銅貨はなにかあったときのためだから、使っちゃダメなんだって」

「道はわかるの？」

「門をはいってまっすぐの、いちばんおっきなたてものよ」

「危ない人に声をかけられたらどうするんだっけ？」

「『あおいろやしきのニュウです』って言うの」

「迷子になったら？」

「ならないわ。わたし『れで』だもの」

「れで？」

「おねえさんのことよ」

「おねえさんだって迷子になるわ。そうしたらどうするの？」

「そういうときは、しかたないから、飛んでもいいってルフォーが

言ってたわ。とんでここまで帰ってくるの」
「そう。なら、安心ね」
「あんしんだわ」
クシーが笑い、ニュウもまた眠たげに笑う。下の階から誰かの笑い声がした。
ふとクシーは思い出し、尋ねた。
「ねえ。そういえば、どうして魔法の試験がおつかいなのか、ニュウは聞いてる？」
返事はなかった。ニュウは既に夢の世界へと旅立ったあとだった。
クシーは微笑み、ニュウの体に毛布をかけ直すと、自分もまた口まで毛布をかけて目を閉じた。
さら、さら、と。
そんな宵の音が今にも聞こえそうな、月の小さな夜だった。

◆――◆――◆

★ニュウの日記

あしたは、まほうのしけん、の、おつかいです。
わたしは、あしたが、たのしみです。とっても。
きょうは、まほうのおべんきょうは、しなかったでした。
それは、るふぉが、いまはもうおしえることない、といったからでした。
きょうのおひるのあとは、わたしは、しぐまのおくつの、こするのをしました。
それは、ふぁいは、にゅううまくなってはやくなった、といいました。

わたしは、うれしいとおもいました。すごくでした。
きょうのいまは、わたしは、あしたのじゅんびをしました。
あしたのじゅんびは、おつかいの、じゅんびです。
それは、くしーといっしょでしました。
くしーは、にもつすくないほういい、といいました。
わたしは、すこしだけ、じゅんびをすくなくにしました。
わたしは、しぐまはしんぱいしてるなあ、とおもいます。
それは、わたしはあしたおつかいにいくから、だからでした。
わたしは、しぐまはしんぱいしてかなしいけどうれしい、とおもいます。
それは、しぐまがわたしがすきで、だからでした。
わたしはあしたは、しぐまにおみやげとる、とおもいました。
きょうのこれからは、わたしは、くしーといっしょでねます。
わたしは、くしーと、おはなししてねます。
わたしはげんきです。

おしまい。

１５．冒険前夜（後書き）

お話を読んでくれる誰かがいる。
お話を楽しんでくれる誰かがいる。
他の誰かにも読ませたいと思い、行動してくれる誰かがいる。
こちらはその誰かの顔を知らない。
その誰かもまたこちらの顔を知らない。

素敵すぎて死にそうになる。

16．少年幻想

「そんなに荷物を広げて、何を探しているの？」
「ちょっと、服と武器をね」
「でもそれって……ああ、もしかして彼の？」
「そういうこと。わかっているだろうけど、内密に頼むよ」
「あなたの強みは人脈と道具の数々、そして『秘密』ね」
「強い生き物の何が素晴らしいかって、争わずに済むことさ。弱者は偽装するんだ。キミにはわからないだろうけどね」
「あなたが弱者なら、この世に強者なんているのかしら？」
「キミがいる」
「ええ。弱者に救われたあたしがいるわ」
「そろそろ出るよ」
「過保護なのね」
「彼女には借りがある」
「嘘つき」
「嘘つきだって？」
「あら、怒った？」
「いいや。最高の褒め言葉だ」

◆――◆――◆

「ハンカチ持った？お金はちゃんとお腹のとこにしまった？学長さんに渡すお手紙も持ったわね？――よし、それじゃあ行ってきなさい」
「はあい！」
白と黒のエプロンドレス。頭にはフリルのカチューシャ。背中に

は桃色の小さな背嚢（はいのう）。肩からは水筒を提（さ）げ、万端の用意を整えてニュウがゆく。装備の数が自信を生む。彼女はいま、これまでの彼女の中で最強の彼女だった。心は軽く、しかし適度な緊張感もある。おつかい任務の開始である。ニュウは見送りのメイド仲間たちに手を振ると、屋敷の門を出て、街へ向かって歩き出した。

少女の背中が見えなくなった頃、シノビたちが動き出した。

「武器の手入れはいいな？存在度の稀釈は万全か？匂いは消したか？術の装填もしているな？――よし、いくぞ」

「「「はっ！」」」

目立たない服装。わざと目立たないように施された化粧。背中には服の色と相まって目立たない灰色の背嚢。その中には危険物の数々。袖の下には暗器を忍ばせ、抜かりなき隠密武装のもとシノビたちが往く。仲間への想いが覚悟を生む。彼らはいま、いつにもまして真剣だった。心は締り、緊張感を切らさない。訓練の開始である。シノビたちは仲間の暮らす屋敷に頷くと、それぞれの配置に向かい音もなく走りだした。

少女の大冒険とシノビの尾行訓練はこうして始まったのだった。

屋敷の裏。木剣の素振りを終えたエータは芝に寝転がった。青空が眩しい。汗を掻いた体に風が心地よかった。

エータは憧れの英雄――騎士ヨゾラのことを考えていた。

どんぐり屋敷の『隕石落下事故』のあと、エータとラムダは山へと入り、虫の巣穴を見に行った。そこで見たのは想像を絶する光景だった。エータ、ラムダ、ガンマの三人がかりでも倒せなかったツチクイモドキが死体となって、巣穴の中に、周囲に、無数に転がっていたのだ。それらの死体は、体にはどこを探しても傷がなく、みな一様に頭だけを破壊されていた。酷いものなどは頭に手のひらの形の穴があいており、穴のまわりは摩擦熱で熔けていた。呆れたことに、あの騎士はガンマの斧をも弾く虫たちを、素手の一発で殴り

殺していたのだ。エータは感動した。そんなことをなす人間がこの世に存在することを喜んだ。エータは言った。
「ラムダさん。頑張れば、僕もいつか彼のようになれるでしょうか」
無理ですよ、とラムダは笑った。その笑みに平時のあたたかさは無かった。彼は震えていた。
「あれはあまりにも違いすぎる。見たでしょう？瓦礫の山に戻ってきたときの騎士ヨゾラを。汗ひとつ掻かず、返り血も浴びず、まるで散歩帰りのような姿で帰ってきた彼を。あんなものを目標にしてはいけません。あれはただ憧れ、畏怖すべき対象です。人の身では決して届かない」
エータはごろりと転がった。草が頬にあたり、チクチクした。そうなのだろうか、と彼は思った。本当に無理なのだろうか、と。努力もせずに諦めなくてはならないほど『違う』ものなのだろうか？騎士ヨゾラもまた、かつては今の自分のように必死になって修行をしたのではないのだろうか。こうして鍛錬を続けていれば、自分もいつかは彼の域に至ることができるのではないのか？そんなふうにエータは思った。彼は知らない。強さを求めるという意味合いにおいてヨゾラが努力をしたことなど一度もないということを。若さゆえの全能感は残酷だった。のちに彼は自分の才能に絶望する。

「あれっ。おまえ、まだこんな所にいたのか」

ふいに声がかかる。
エータはよいしょと上体を起こし、声の方を振り返った。研究部のリーダー・タウだった。
「どうしたんですか、タウさん」
エータは聞いた。タウは「おう、いや」と頭を掻いた。
「おまえ、今日はニュウちゃんの『すとおきんぐ』するんじゃなかったのか？」
「ええ。そうですけど」エータは首を傾げた。「それがどうかした

んですか？あ、もしかしてタウさんも行きたいんですか？いいですよ、別に」
「いや、そうじゃなくてよ。おまえはまだ出ないのかなーと思って」
「まだ出ないって、何がです？」
「だから、すとおきんぐだよ。ニュウちゃん、もう出たぜ？」
門のほうを指さしてタウが言う。エータは一瞬ぽかんと呆けたあと、「午後からじゃなかったの！」と叫んで駆け出した。
残されたタウはため息をつくと、芝に転がる木剣を拾い、苦笑した。
「あいつ、いつもどっか抜けてるよなあ」

◆――◆――◆

屋敷の中。シグマの部屋では、シグマの顔をしたシグマでない者が書類の仕分けをしていた。処理未処理を分別し、重要度ごとに分け、命じられた仕事を終えると『偽物』は大きく背伸びをした。それは屋敷の仲間たちも違和感を抱かぬであろう、シグマそっくりの動きだった。一目見て自分を「ちがう」と見抜けるのは一人だけであろう、と『偽物』は思う。即ち（すなわ）、初対面で『偽物』の変身を見破っている人間――ニュウだ。
ドアがノックされる。『偽物』はシグマの声で「どうぞー」と気の抜けた返事をした。入ってきたのはルフォーだった。
ルフォーは机の『シグマと同じ顔の誰か』をじっと見つめ、やがて「どっち？」と聞いた。偽物は「偽物の方ですよ」とシグマの声で答えた。ラムダだった。
ラムダは、かつて自分が魔王とされた原因の能力を《変幻自在》と呼んでいる。《変幻自在》は、握手に応じた相手の形、声、匂いを自分の体で再現する魔法だ。彼には物心ついた頃からこれができ

た。今となっては、ラムダは元々の自分がどんな顔であったかもわからなかった。
「ラムダちゃん、ここで何してるの？」
ルフォーが言った。彼女は革表紙の本を持っていた。ラムダはシグマの顔で苦笑し、シグマの声で「影武者です」と言い、手元の書類をぴらり、つまんで揺らした。
「ご存知かと思いますが、御主人様は今ニュウさんを尾行しています。《旅人協会》からの荷物が今日あす中に届く予定ですので、受け取りのできる『本人』が屋敷に残る必要があったのです」
ほんとに便利よねえ、と流し目でルフォーが言う。彼女はラムダの能力を気に入っている。ラムダはそのことを知っていた。彼はルフォーから何度も「解剖させてほしい」と言われていた。
ラムダは言った。
「ところで、ルフォーさんはどういったご用件でこちらに？」
「これよ」
ルフォーは持っていた革表紙の本を机に置いた。それはシグマがアカンナの王宮から持ち出した秘宝だった。シグマはその本を『使える』ようにできないかルフォーに相談していた。そのことを知るのは当事者二名とラムダだけであった。
どうでした？とラムダが聞く。ルフォーは首を横に振った。
「駄目ね。『ぷろてくと』がかかってる。やっぱり、アカンナ王国の中でしか機能しないみたい。ここでも使えれば、ユーニにまた一つ武器ができたのにね」
そう言ってルフォーは革の表紙をぽんと叩いた。
それは《予言の絵本》だった。

◆――◆――◆

モルイの街を黒髪の美少年が歩く。
彼は前方をゆく、よく知る人物の肩をぽんと叩いた。エータだった。
エータは振り向き、美少年を見て目を丸くした。彼は言った。
「先生……先生じゃないですか！ファイさんが言ってたのは本当だったんですね！」
風が吹き、二人の髪が揺れた。
肉串屋台の屋根で小鳥が鳴いた。
レジスタンス組織《重苦の刃》の副リーダー・ローは薄く笑った。

「ただいま、エータ。半年ぶりだね」

17．冒険

二人の美少年が小声で話している。道行く女たちは彼らをひと目見ると一様に溜息をついた。一人はくすんだ金髪の、活発な印象の少年。一人は陽の光で黒髪を紫に輝かす、悪巧みを好みそうな顔の少年。エータとローだった。外見の年こそ開きはないが、実年齢は倍ほどにも違う二人。彼らはガラガラと音を立てて進む肉串屋台の陰に隠れてニュウを尾行していた。

「なゆほろ」肉串をはむりと噛んでローが言った。「そんなことがあったのか」

ローは半分ほど食べると隣のエータに串を差し出し、「いる？」と聞いた。結構です、とエータがこたえる。ローはそう、と興味なさ気に言い、残りを食べた。どんぐり屋敷崩壊の一件を懇切丁寧にエータが説明し終えたところであった。この人は変わらないな、とエータは思った。姿も中身も変わらない、と。

（――いや。むしろ若返って……）

「それであの惨状かあ」

ローは串をぺろりと舐め、笑った。

「森を抜けたら屋敷が崩れてる。なんだかよくわからないデカい虫が死んでる。みんなはいないし、学者っぽいナリの火事場泥棒が瓦礫を掘り返してる。……いやはや、あのときは俺の頭がどうかしたのかと思ったよ」

「今の屋敷に引っ越したこと、よくわかりましたね」

エータが不思議そうに言う。ローはにやりと笑った。

「そんへんは、俺の『力』なら朝めし前」

「先生の力って何なんです？いい加減、教えてくださいよ」

「切り札を見せる奴があるか。教えたろ？本当に大事なことは身内にも隠せって」

「教わりましたけど、納得はしていません。僕は先生の秘密をばら

すつもりなんてないし、みんなだって仲間の秘密を売るような真似はしない。そんなこと、最初期から組織にいる先生なら、わかってるはずでしょう」
　エータは毅然たる目を師に向けた。黒い目と髪を持つ少年は苦笑し、エータの頭をぽんと叩いた。そうして彼は大通りをてくてく歩くニュウを指さし、「なあ」と言った。
「今からあの子を殺すと言ったらどうする」
　唐突だった。エータは一瞬かたまったあと、「そんなの」と言った。
「止めるに決まってるじゃないですか。ニュウは大切な仲間です」
　無理だね、とローは言った。
「エータじゃ俺には勝てない。正々堂々、剣と剣、こぶしとこぶしで戦えば別だけど、何でもありになったら俺が勝つよ。負ける気がしない。だって俺は、おまえに能力を知られていないんだから」
「僕だってこの半年で成長してます。やってみなきゃわかりません」
「じゃ、それでいいや」
「えっ？」
「それでいいって言ったんだ。俺はニュウちゃんとやらを殺そうとして、エータに止められる。失敗だ。めでたしめでたしだ。だがエータに捕まった俺はこう言おう。『おまえの秘密を教えなければ死んでやる』。さて、その場合エータはどうする？俺を見殺しにするかい？それとも自分の秘密をばらす？言っておくけど、嘘を言ったって俺は見抜くぜ？」
　エータは黙り込んだ。彼はローの言わんとすることを理解した。それをさとり、ローは笑った。子を見つめる親の笑みだった。「そういうことだよ」。優しげな声で彼は言った。
「自分より強い奴が現れてニュウちゃんを――彼女じゃなくてもいい、仲間を人質にしたら？『それ』を話さなければ大事な誰かが害されるとき、傷つくとき。そんなとき、エータはそれでも自分の秘密を、或いは仲間の秘密を守り通せるかい？その自信があるかい？

俺は無理だ。そんな自信はない。シグマにも、ラムダにだって無理だろう」
　だから隠すんだ、とローは言った。エータは口を尖らせ、がりがりと頭を掻いた。やがて自分を納得させるような声で「すみませんでした」と言った。ローは屋台のゴミ入れに串を放り、「気にするな」と言った。串は外れた。エータが拾った。
「若い内は誰だってそんなもんさ。大事なものと正しいものを混同してしまう。俺もおまえぐらいの歳の頃はそうだった。今の俺が正しいと思っていることだって、年寄り連中からしたら物笑いの種かもしれない」
「自分より若い外見をした人に言われると、奇妙な気分になりますね」
「ぬかせ。これでもシグマやラムダと同い年だぞ」
　エータはわざとらしく肩をすくめた。ローがなにか言いたげな目を向けたが気にしなかった。エータは目の前の少年を思った。『少年』というカタチをした彼。自分がシグマに『誘拐』してもらった五年前から――それよりもっと昔から――ずっと『十五歳』を続けているローのことを。聞かないと決めてもやはり気になる。『不老』という人類の夢の一つ。この人はいったいどんな魔法でそれを成し遂げたのだろうか、と。
「おまえは本当に真面目だね」
「先生が不真面目すぎるんです。それで優秀なんだから腹が立つ」
「言うじゃないか」
「逆らわない奴ばかりじゃつまらない。先生が言ったんじゃないですか」
　エータがニヤリと笑う。ローはそっぽを向いて口を尖らせた。それでいて目は笑っている。その様はまさに素直になれない十五歳の少年の姿であった。
「揺らぎ無く高度に最適化された全体システムは、大きな外的変化が起きればたちまち破綻（はたん）する」

「はい？」
「システムを最適化するには、想定外の動きをする『揺らぎ』の要素が必要だってこと。その割合は一割かも知れないし二割かも知れない。正確なところは俺にはわからない。でも、それがあることによって全体は成長していくんだ」
「つまり、先生の不真面目はその『揺らぎ』だってことですか？」
「或いはシグマもね」
「大将がさぼるところなんて想像もできないけど……でも、確かにわざとそう見えるように振る舞っているようなところはありますね」
「……みんなシグマを崇拝しすぎだと思うけどなあ。あいつ、おまえやみんなが言うほど凄い奴じゃないぜ？」
「どういう意味です？」
ローは答えなかった。エータは首を傾げた。大将が凄い奴じゃないって、どういうことだ？なにかの暗号か？エータは考えた。答えは出なかった。
「おっ」
やがてローが屋台の陰から身を乗り出した。エータは思考を中断した。
「どうしたんです？」
「ああー……やっちゃったな。ちょっとまずいことになったぞ」
見てみろ、とローが指さす。エータはさされた方向に目をやった。そこにはニュウがいる。ローは言った。
「あの子、財布おとした。ほらあそこ」
エータは慌てた。
どうしよう。出ていくか？でも、そうしたらおつかいの試験は失敗ってことになるんじゃないのか？どうするべきだ？どうするのが正しい？彼は悩んだ。
ローは腕を組み、唸った。こちらもまた少女を心配する表情だっ

た。
ニュウは落とした財布に気づかず、目的地に向けてのしのし進んでゆく。
やがて屋台のおやじが言った。
「兄ちゃんたち、いいかげん邪魔だよ」

◆――◆――◆

（財布を――落とした！）
（ニュウちゃんが財布を……っ！）
（落とした……っ！）
（まずい！まずい！まずい！）

シノビたちは慌てた。
それは一瞬のことだった。ニュウがぽとりと財布を落としたのである。目立たぬ服装で彼女のあとをつけていたシノビたちは、顔に出さず、みな一様に苦悩した。彼らは未だ、ニュウにこの尾行訓練を気取られていなかった。彼らの悩みはすなわち、財布が落ちたことをニュウに伝えるか否かだ。直接でないにせよ伝えるとすれば、今の安全な配置を変更し、何らかのイレギュラーな行動を起こさなくてはならない。伝えないとするならば今のままでよい。そこに危険は無い。後者を選び、このあとも慎重に動けば、訓練は途中までは成功するだろう。ニュウがアカデミーの学長に手紙を届け、街を出るところまでは、ばれずに尾行を続けることができるだろう。そのことはシノビの誰もが感じていた。
シノビとして、成長するための訓練を第一に考えるならばどちらを選ぶべきか。
思考は一瞬。七名の心はすぐに決まった。

『配置変更』

帽子を目深にかぶったシノビの副隊長ナノハナは、鼻をこすって合図した。「『しすてむ』を最適化するには、想定外の動きをする『揺らぎ』の要素が必要だ」。ナノハナはかつてのローの言葉を思い出していた。いかにも、この不測の事態はまさに『揺らぎ』なのだ。シノビたちは一斉に頬を掻き、目を擦り、髪を掻き上げ、或いは靴を脱いで引っくり返すなどして了解の合図を返した。

配置を変え、合図を取り、シノビ七名は指示と行動を伝え合う。優先すべきは仲間の無事か、自分たちの成長か。考えるまでもない。それは繋がっているのだ。自分たちが成長し、強くなればなるほど仲間の安全は高く保証されていくのだ。

『拾う・財布・自分が』
『任せる・援護する・おまえを・自分が』
『援護する・自分も』
『気を引く・周囲の・自分が』
『了解・待機する』
『了解・待機する』

少女に財布を届けるべく、彼らは一斉に動き出した。
初めての買い食いが出来ず小さな仲間が顔を曇らせるなど、シノビとして許容できることではなかった。

◆――◆――◆

ふとよく知った『命』を感じ、ニュウは立ち止まった。振り返っ

てみたが、知り合いは見当たらなかった。気のせいかしら。彼女は首を傾げた。ニュウの世界には『命の紐』が無数に揺らめいている。それは人の多い場所にいくほど密度を増す。多くの人がいればよく似た紐もある。彼女は、このような街の中ではよほど集中しなければ個人の紐を特定することはできないのだった。無論としてシグマの紐は例外であるが。

ニュウは歩みを再開した。

良い匂いがした。さきほどから彼女の後ろをゴトゴトと音を立てて歩いている肉串の屋台だ。前を見つめてテクテク歩きながら、買っちゃおうかしら、とニュウは思った。いまの自分にはお金がある。お昼をちょっと少なくすればいい。いっこだけなら大丈夫。そんな考えが頭をよぎった。ニュウは首を振り、「だめ」と呟いた。お手紙を届けるまでは余計なことはしないのよ？わかった！約束よ？ゆびきりね！――クシーと約束したのだ。誓いを破るわけにはいかない。街は誘惑がいっぱいだった。

いっぽう街の者たちは、桃色の小さな背嚢を背負いエプロンドレスを揺らして歩くニュウを、いったいどこの貴族の使いだろうか、と思いながらチラチラ見つめていた。あんな小さな子を一人で歩かせるからには名の知れた大貴族なのであろう。身なりも綺麗で、金の髪は美しい。大事に育てられた子の雰囲気がある。使用人の教育が行き届いたさぞ素晴らしい職場環境なのだろう。自分の娘を預けるならそんな所が望ましい。彼らは口々にそんなことを言い合った。一ヶ月前まで隣国で魔王候補でした。そう告げたら何人が信じるだろうか。

「これこれ、お嬢さん。落とされましたよ」

ニュウは振り返った。背嚢の中身が揺れてガチャ、と鳴った。人のよい笑みを浮かべた禿頭の老人が立っていた。「これ、お嬢さんのでしょう？」。老人は手に持ったものを差し出し、言った。それ

はニュウの『がまぐち』だった。シグマから貰った大事なお財布だ。ニュウは慌ててお腹の留め紐を確認した。財布を縛り付けていたはずのそこにはなにもなく、結び目の僅かな緩みだけがあった。ニュウは財布を受け取ると元気よく礼を言った。ありがとうとごめんなさいはおはようの挨拶以上に大事だとファイから教わっていたためだ。老人は「いえいえ」と言って路地裏へと去っていった。ニュウは今度こそ落とさぬよう、財布を手に持ってゆくことにした。

少女は再び歩き始めた。アカデミーはもうすぐだった。

◆――◆――◆

路地裏ではナノハナが老人に金を渡していた。

「本当に、こんなに頂いてよろしいので？」

「勿論だとも。助かったよ」

「あのお嬢さんは、もしやどこかの貴族さまの――」

「ご老人。我々や彼女の素性については詮索しない約束だろう？」

「す、すみません。そんなつもりじゃないんです。ほんとうに」

「それじゃあ失礼する。もう会うこともないだろう。わかっているだろうが、くれぐれも――」

「はい、決して誰にも」

「結構」

銀貨を握りしめて佇む老人を残し、ナノハナは尾行に戻った。

尾行対象の目的地、王立第三アカデミーはもうすぐだった。

◆――◆――◆

「ちょっと聞いてくれ」
「なんだよ。いま玄関に描くどんぐりの絵の構図を考えてるんだが」
「大将とルフォーさんはできてるんじゃなかろうか」
「あん？」
「だから、大将とルフォーさんだ。あの二人、できているだろう。俺はそう思う」
「突然なにを言い出すかと思えば」
「突然ではない。前から思っていた」
「ルフォーさんは男に興味ねえだろ。研究ができればそれでいい、って人だ。王様の妾だった人だぜ？愛だの恋だの考える人に、そんな仕事は務まらねえよ」
「大将は凄い人だ。だからルフォーさんとできてる」
「論理が無茶苦茶だぜ。おまえはいつも言葉が足りねえ」
「そんなことはないだろう」
「あるよ」
「ない」
「ある。おまえの中ではわかってるんだろうが、それを説明しきれてねえんだ。たとえば俺が『彼は二十歳だ。だから飯を食う』なんて言ったらおまえどう思う。まるで意味がわからんだろうが」
「いやわかる。そいつは二十歳まで飯を食わず、水だけで生きるという誓いを立てていたのだ。そうすれば病気の母親が治るとジョンは信じていた」
「誰だジョンって。変な『えぴそおど』くっつけて感動系にするのやめろ」
「だが母は治らなかった。そして明くる日――」
「おいそのはなし長くなるか？」
「――ジョンは自殺した」
「思いのほか短かった」
「とにかく大将とルフォーさんはできていると思うのだ俺は」
「まあ、わかったよ。言いたいことはわかった。で、それがおまえ

にどう関係があるってんだ？」
「うん。俺はどうやらルフォーさんに惚れているようなのだ。だからもしかしたら今後、意図しない形で大将から彼女を寝取る事態になってしまうかもしれん」
「待て。ちょっと待て。もういっぺん頼む。耳が盲（めしい）になったみたいだ」
「俺はルフォーさんに惚れている」
「おおう。断言しやがった」
「確かに彼女は研究にしか興味のない女性（ひと）だ。男など扱いやすい三本足の生き物ぐらいにしか思っていないだろう。大将と付き合っているのにしたって、おそらくは、俺たちの知らない大将の能力に惹かれてのことだろう――」
「いや、大将とできてるってのはあくまでおまえの想像だけどな」
「――だが、それが何だと言うんだろうか。愛されていなければ愛してはいけないのか？恋の報われる条件は相思相愛か？そんなことはないはずだ。そもそも見返りを求める心が愛であろうはずもなし。恋とはすなわちただ恋しく想うこと。それを伝えるのが愛だ。俺は彼女を正しく愛したい」
「おまえ……ちょっとすげえな」
「俺の能力《五里霧中》は、クシーほどではないが充分に『れあ』だ。もしかしたら彼女の研究の役に立てるかもしれん。その可能性を示せるだけでも彼女に気持ちを伝える意味はあるはずだ」
「それで、おまえは何を得るんだ」
「なにも。言っただろう。俺の愛は無償の愛だ」
「正直おまえのことはただの変わり者と思ってたが……なんだか今は恰好よく見えるぜ」
「ありがとう。俺は頑張るよ」
「おい、ルフォーさんが来たぜ。どうするんだ、ほんとに行くのか？」

「行く。行ってこの想いを伝える」
「本気なんだな？」
「ああ、行ってくる。――ルフォーさん！」
「あら？あなたは、ええと……」
「『営業部』のデルタです。あなたに伝えたいことがある」
「なにかしら？」
「自分はあなたを愛しています」
「ありがとう。用はそれだけ？」
「はい」
「じゃ、また夕食時にね」
「はい。夕食時に」

「どうだった。いや、完全に脈無しだったのはわかるが」
「うん。なんというか、あれだ」
「なんだ？」
「相手にされないのは……苦しい」
「無償の愛はどこいった」

◆――◆――◆

「あおいろやしきのニュウです。がくちょうさんにお手紙を持ってきたの」

アカデミーの前に着いたニュウは、門番の男に告げた。連絡は既に入っている。男は門を開け、ニュウを通した。
「どうぞ、お嬢さん」
「ありがとう！」
ニュウは校舎に向かって歩き出した。

間髪入れず、門に二人の少年がやってきた。金髪と黒髪の、どちらも美しい少年だ。黒の方が言った。
「青色屋敷のローです。見学に来ました」
これもまた連絡は受けている。門番はローを通した。
「じゃ、そういうことだから」
門を挟んだ向こう側。エータに向けてローが言った。エータは門番とローの顔を二度ずつ見てから「え？」と言った。
「先生。僕は？」
「エータは許可をとってないんだろ？じゃあ入れないよ」
「でも、先生と一緒なら大丈夫なんじゃ……」
「そんなわけないだろう。事前に連絡を入れて許可をとったのは俺ひとり。なら入れるのも俺ひとりだ。当たり前じゃないか。見学許可なんか一時間もあれば下りるぜ？」
呆然とするエータを残し、ローはさっさとニュウを追っていった。
「おまえはもうちょっと下準備の重要性を理解するべきだね」
そんな忠告が空虚に響いた。

18．アカデミー

「わああ」

ニュウはぽかんと口を開け感嘆の声をあげた。

王立第三碩学院は石造りの巨大な城だった。壁や柱に施された獅子・鳥・魔物・聖獣などの浮き彫りがニュウの乙女心を刺激し、人の密度はニュウを大いに興奮させた。校舎の中は子どもだらけで、中にはニュウより幼い子どももいた。ニュウのテンションはやかんの笛のような音を立てて上昇した。ニュウは『すきっぷ』したくなるのをなんとか我慢した。全てが初めて見るものだった。

「がくちょうさんはここのてっぺんにいるのね。……もうすぐだわ！」

魔王の城に乗り込む勇者のように、かつて魔王にされかけた少女がいさましく歩き出した。

学長室に向かって廊下をてくてく進む。ふと上を見上げ、ニュウは不思議に思った。建物はかなり新しいのに、天井には、ほんの一月ほど前までニュウが祖父と二人で暮らしていた家にあったような、古い黒くなった木が何本も何本も、お祈りのときの指のような形に組まれている。これは近年スズカゼ王国の建造物に多く見られるようになった変則的なボールト天井の細工なのだが、無論ニュウにそんなことはわからなかった。彼女は思う。あれはなにかしら？かざり？それとも、おばけのとおり道？幼き乙女は好奇心をフル回転させ、目を輝かせた。『飛行』の魔法を使いたい。そしてもっと近くで見たい。ちょっとだけなら。いいえ、ダメよ！でも、ほんとうにちょびっとなら――歯の裏側がむずむずした。ニュウは頭の中で、邪悪な好奇心を得意の砂投げによって遠くへと追い払った。ニュウは「ふん」と鼻を鳴らして何度も頷いた。ルフォーとの約束が好奇

心に勝利した瞬間だった。

いっぽう周囲の学生たちは、天井をチラチラ見上げては「ダメよ」だの「ゆびきりげんまんしたもの」だのとブツブツ呟いて歩くエプロンドレスの幼女を不思議に思いながら見つめていた。なぜアカデミーにメイドが――それもあんなに幼いのがいるのかと。

「おいキミ、メイドさんがいるぞ」

「メイド？……おおう、ほんとうだ。なぜ校内にメイドが」

「随分小さいな。初等部（プライマリ）の子だろうか？」

「メイドの格好をしているんだ、ここの学生じゃあなかろう」

「やだ。桃色の背嚢、可愛い」

「手に何をもっているのかしら？お財布？」

「どっかの貴族の使いかなあ。届け物とか」

「そうだとしたら寮生ではなく、モルイの街に別邸を持つ貴族の使いということになりますわね」

「スズカゼではあんなに小さなメイドを屋敷の外へ使いにやるものなのかね？我が国では考えられないことだよ。まったく、危なっかしく仕方ない」

「それが危険にならないお家の子なのでは？報復を恐れて誰も手を出さないような」

「チャイブか」

「チャイブだな」

「チャイブ家で決まりだろう」

「チャイブ公爵家のメイドさん？道理で可愛いわけだ」

「ふむ。言われてみればどこか高貴な雰囲気があるね」

「なんでもいいがね、諸君。あの背負い鞄は相当に可愛いと思わんか」

「同意」「同意」「強く同意」

そんな学生たちの会話など耳に入らぬニュウは、のっしのっしと目的の学長室を目指すのだった。

廊下を進み、階段を登り、時には『りゅっくさっく』に座って水筒のお茶を飲み、そうしてまた進む。大事な『がまぐち』をちゃんと手に持っているか十歩ごとに確認し、『かいちゅーでんと』の『でんち』が無くなっていないかも二度確認した。

がくちょうさんはどんな人かしら？ルフォーのおともだちだって言ってたわ。がくちょうさんも『まじょ』なのかしら？がくちょうさんはなに色のまじょなのかしら？

ニュウのわくわくはとどまるところを知らない。蟻のようにたくさんいる学生たちも、柱の立派な彫刻も、壁にかけられた綺麗な絵も、いまや全てがニュウを主役にした物語の挿絵だった。

「きゃあっ」

最上階。廊下の曲がり角。学長室までもうすぐという所でそれは起こった。衝突事故である。角から突然あらわれた誰かにニュウは突き飛ばされた。『りゅっくさっく』のおかげで中途半端なブリッジの体勢になり、頭を打たずに済んだのは幸運であった。ニュウはよいしょと起き上がり、そしてすぐにしゃがんで足元をキョロキョロと見回した。理由も意味も無い行為である。あまりに突然のことに、彼女は軽い混乱状態にあった。

「ご、ご、ごめんなさい！」

頭上から大きな声をかけられる。ニュウははっと我に返り声の主を見上げた。それはニュウよりほんの少しだけ背の高い少女だった。

――きれいな青いかみのけ。それに、青い目。ルフォーとおんなじだわ……。

ニュウは少女の顔を無言で見つめた。

慌てたのは青髪の少女である。もしかして打ち所が悪かったの！？と彼女は冷や汗を掻いた。彼女は言った。

「あの、大丈夫ですか？メイドさん？」

ニュウは「うん！」と元気よく頷いた。少女は「よかったぁ」と

呟き、息を吐いた。
「すてきなかみのけね！」
ニュウはにこりと笑って言った。
「……へっ？」
少女はきょとんとした。そんなことを言われたのは兄以外では初めてだった。こんなわけのわからないタイミングで言われたのは正真正銘の初めてだ。曲がり角でぶつかった相手に髪を褒められる、そんな事態を誰が想像できるだろうか。少女は混乱した。
「わたし、青い色って、大好きだわ！」
それだけ言うと、呆然とする少女をその場に残し、ニュウは再びてくてく歩き出した。頭の中ではシグマがときおり鼻歌でうたっている『ろっきいのてえま』が流れていた。途中からわからなくなるのでオリジナル曲になるが、むしろそこからがニュウの好きな部分だった。一度シグマがその鼻歌のオリジナル部分を聞き「なんでボーントゥビーワイルドを知ってるんだ……」と呟いたことがあったが、意味はさっぱりわからなかった。ニュウはにへにへ笑ってシグマの背中にのしかかり、雨後の森のようなシグマのにおいを楽しんだものである。

さて、残された少女はストロベリー・ブロンドの幼メイドが去った方向を口を開けて眺めていたが、やがてよだれが落ちそうになった頃、慌てて口を閉じた。
「なんだったのかしら？」
少女は呟く。こちらの不注意でぶつかってしまったのに、にこにこ笑って自分の髪を褒めてくれた。不思議なメイドさんであった。
ふと気づくと、足元に、水色のやたらとテラテラした素材でできた『なにか』が落ちていた。
どうしよう、今のメイドさんが落としたのかな？少女は慌ててその『なにか』を拾った。そうして彼女は驚いた。
「うわあ……なんてつるつるした手触り。色も綺麗で、金具もすっ

ごく丁寧に作られてる。すごい……これ、何でできてるんだろう。もしかして、さっきのメイドさん、とんでもないお金持ちの家のメイドさんなのかなあ……」

そうに違いない。だからあんなに浮世離れしていたのだ、と彼女は思った。

届けなきゃ。きっと、とっても高価なものだ。無かったら困るはずだ。少女はよしと頷いた。

少女ルクリアは知らない。

それはニュウがかつてシグマから貰った『えなめる』の『がまぐち』だった。

◆――◆――◆

ローは学長室を目指してのんびり歩いていた。

制服のローブを着ていない彼を学生たちがちらちらと見る。その視線の中にいくつもの女の匂いを伴うものがあること、そしてまた嫉妬の重い色を持つものがあることに、彼は気づいていた。自分の美貌は知っている。これは武器だ。

思えばこの姿には長く世話になってきた。革命組織、レジスタンス、テロ組織――様々な肩書きで呼ばれる《重苦の刃》。その副リーダーとして、ローはこの姿を交渉材料に、武器を、資金を、アジトを、情報を、そして同志を手に入れてきた。黒髪と聞いて《重苦の刃》の支援者たちが思い浮かべる顔。それは大将たるシグマのものではなく、ローの美貌だった。直接にローを味わい協力者となった女がいた。彼に集まる女たちを求めて山ほどの金貨をなげうった男がいた。そんな者たちとつながりを持とうと更に多くの人間が集まった。集まった者たちに仮面で顔を隠したシグマが民主主義の思想を語った。それは未知の概念だった。密室の中、多くの者たちが

熱狂した。組織の呼び名がまた一つ増えた。即ち、新興宗教という肩書きが。
長い足で大股に、ゆっくりと歩きながら、ローは薄く笑みを浮かべた。《重苦の刃》の中で、誰よりも強く民主化を願っているのはローだった。そして彼は、願うだけではなにも起こらないことを知っていた。
この顔(ぶき)にはこの先もまだまだ世話になるだろう、とローは思った。
最上階までのぼり、学長室の見える位置までやって来たローは、目当ての扉の前をうろうろと行ったり来たりしている少女に気付いた。彼女はニュウの『がまぐち』を持っていた。ローは眉をひそめた。なぜ、あの子は、あれを持っている？廊下には他に学生や職員はいない。いるのは彼女とローだけだ。ローは廊下を進んだ。
少女ルクリアは向かってくる誰かに気付き、ピタリと足を止めた。それは息を飲むほど美しい顔をした、黒髪の少年だった。制服を着ていないから、学生ではないのだろう。こんなに綺麗な人がいるんだ、とルクリアは思った。すこし怖く感じてしまうほどだった。
「やあ」とローが言った。
「えっ」とルクリアが言った。
ローは微笑み、「ここで何をしてるの？」と言った。
ルクリアは慌てた。
「あの、えっ。あの、えっと」
意味を成さない声が出る。もともと人と話すのが苦手な娘である。くわえて相手はとつぜん話しかけてきた見ず知らずの男。それも十一歳の彼女よりはどう見ても年上だ。どうしよう。年上の男の子なんて、お兄ちゃん以外と、まともに話したことないよ。――ルクリアの頭の中は一瞬でグチャグチャになった。
「それのことを聞きたいんだけど」
「えっ？」
ローは『がまぐち』を指さした。
「それだよ、その財布」

ルクリアを衝撃が襲った。サアッと血の気が引いた。
「ここ、これ、お財布だったんですか！？」
なんてことを、とルクリアは思った。ああ、それだったら、拾ったりするんじゃなかった。お金持ちのメイドさんのお財布を拾っちゃうなんて、そんなことがバレたら何をされるか。ああ、でも、お財布が無くちゃメイドさんは困るだろうし……どうすればよかったの？お母さんお父さんごめんなさい。折角アカデミーに入れてもらったのに、わたしは学者さんにはなれそうもないです。いまにも犯罪者になりそうです。アノマテカもごめんなさい。もう一緒に遊べません。少女は涙目になった。
この反応に対し、ローはおや？と思った。
「キミ、それが財布だって、知らなかったの？」
「知りませんでした！……だって、これ、落し物で。それでわたし、届けてあげようと思って。あの、メイドさんのなんです。そこの角（かど）でぶつかったときにメイドさんが落としたものなんです。わたしより少しちっちゃいくらいのメイドさんで――本当なんです！わたし泥棒なんかじゃないんです！」
少女の必死な様子に、ローは理解した。そういうことかと。そうしてローの口から出たのはマヌケな台詞だった。
「そういうアレかあ」
どういうアレであろうか。実年齢３５歳ともあろうものがこれである。泣ける話だった。
よかった、信じてもらえた。ルクリアはほっとした。
「それで、あの、このお財布がどうかしたんでしょうか？」
彼女は聞いた。ローは、いや、とこたえた。
「いいんだ。届けてくれるつもりだったなら、それで」
「もしかして、メイドさんの家族のひとですか？」
「そんな感じです。キミは――」
「あ、ルクリアっていいます」
「――ルクリアは、メイドさんが出てくるまで待ってるつもり？」

「はい。……あ、でも、お兄さんが家族の人なら」
そこまで言ってから、ルクリアは「あっ」と思った。
ローはくすくすと笑った。ルクリアが首を傾げた。
「家族だっていうのが嘘だったら財布を盗まれちゃう――そう思ったんだろう？」
「あの、いえ、」
ルクリアはあわあわとせわしなく手を振った。
「大丈夫。渡せなんて言わないよ。わけあって、今日ここに来てることは、彼女には秘密なんだ。初めてのおつかいってやつでさ。家族が手を貸すわけにはいかないだろ？だから、できたらそれは、ルクリアからニュウに渡してあげてほしい。お願いできるかな？」
ニュウっていうんだ、とルクリアは思った。彼女は「はい」と答え、そうして笑った。このひとはいい人だ、と彼女は思った。少しだけお兄ちゃんに似てる――そんなふうに思えた。
ローは「ありがとう」と笑い返し、それから「手を出して」と言った。
「手、ですか？」
「うん。お礼にいいものをあげる」
ルクリアは不思議に思いながらも右手を出した。ローはその手に黄色い小さな紙箱を握らせた。ルクリアは紙箱とローを二度ずつ見てから「ありがとうございます」と言った。言ったが、これが何であるかはまるでわからなかった。それはね、とローは言った。
「キャラメルっていうんだ。使い方はニュウに聞いてごらん。きっと気に入る」
ルクリアは紙箱をちょっと振ってみた。カラカラと音がする。中になにか、小さいのがいっぱい入ってる？ルクリアは首を傾げた。
「別に危ないものじゃないよ。――じゃあ、俺はもう行くね。ニュウが学長室にちゃんと着いたことはわかったから」
「あっ、はい。ありがとうございました、これ」
「こちらこそ、うちの子の財布をありがとうございました」

「まだ、渡してないです」
ローが微笑み、ルクリアも笑った。そうして手を振り、ローはエータの待つ校門まで戻ったのだった。

「あれ？」
名も知らぬ少年が去ったあと、紙箱を眺めていたルクリアは、ふとあるものに気付いた。
「この模様って……」
『森永』という謎の記号。その『森』の方をルクリアはどこかで見たことがあるような気がした。
しばし考え、やがてルクリアは思い至った。
「これ――古代ニホン文明の文字だ！」
それは選択科目の考古学で、最初の授業のときに先生が黒板に書いた、いま現在で意味が解明されている数少ない古代文字の中の一つだった。
少年の去った方を見つめ、少女は呆然と呟いた。

「意味はたしか……林、だっけ？」

◆――◆――◆

ニュウは学長室の硬いソファに『りゅっくさっく』を抱いて座り、足をぶらぶらさせていた。その正面には彼女の渡した手紙を熱心に読みながら「やや」とか「ほう」とか唸っている老人がいる。眼鏡をかけ、長靴みたいな形の帽子をかぶった白髪白髭の老人だ。彼こそはルフォーの師にして王立第三碩学院の学長、カルフェボその人である。

ニュウはカルフェボ学長の長い髭が彼自身の吐息で揺れるのを面白がって眺めていた。次は左に揺れる、次こそは右、と予想しながら立派な髭を見ているのは飽きなかった。おじいちゃんもおひげのばしたらいいのになあ、とニュウは思った。でも、おひげがあったらスープのお皿に口をつけられないかしら？それは深刻な問題だった。ファイに台所を許されるようになってから最初に作る料理は、『クチバシ豆とお肉のスープ』と決めている。肉は豚ではなく鳥を使う。シグマと祖父の大好物だ。髭のせいで美味しく食べてもらえないのは悲しいことに思えた。

やがてカルフェボは手紙から顔を上げ、「ふむ」と言った。次は右だと予想していたニュウは、いきなり髭が前を向いたのでびっくりした。カルフェボはふむふむ、と繰り返し、そうして言った。

「手紙を読んだ限りでは、やはりキミはカミヤドリで間違いないようじゃの」

ニュウは首を傾げた。カルフェボはフォッフォッと笑い、「わからんでもよい」と言った。そうして独り言のように続けた。

「奇跡の本質はヒルマ君の《概念掌握》に似ているようじゃ。名付けるとしたら《命の運用》……いや、《生殺与奪》といったところか。何にしても魔法では再現できぬ力よ。生きとる内に四人もカミヤドリを見ることができるとは。ホホッ。年はとるものじゃて」

手紙を渡してすぐに黙りこんでしまった面白そうな老人が、ようやく話し始めたと思ったら、その内容がよくわからない。ニュウはなんだか仲間はずれにされたような気分になった。なんとか会話を成立させようと思い、ニュウはとりあえず気になったところから拾ってみた。

「ねえ、がくちょうさん。ひるまくんってだあれ？」

カルフェボはうむ、と言って黒い茶を啜る。ふう、と息をついたときには白い髭が豪快に着色されていた。茶碗を卓に置き、彼は言

った。
「そういう名前のカミヤドリがおったのじゃ。獣の言葉を話す聖女様でな。一昨年に死んでしまったが。本当に惜し者をなくしたものじゃ」
「死んじゃうのはかなしいわ」
「うむ。まったくもって」
カルフェボが目を閉じる。ニュウもそれにならった。ゆっくりねてね、とニュウは顔も知らぬ誰かの穏やかな眠りを祈った。
「カミヤドリっていうのはなあに？わたしもカミヤドリなの？」
「さよう。カミヤドリというのは、魔法使いよりも大きな魔法を一つだけ使える者のことじゃ。非常に珍しい存在で、そうそう生まれるものではないと言われとる。儂の知る限り、キオ・ミカサナギ、ヨゾラ・ナツノ、そして二年前に消えたヒルマ・ナツノ。この三人しかおらん。いや、お嬢ちゃんも入れれば四人じゃの」
「わたし、すごいまほうなんてつかえないわ。つかえるのはいっこだけだもの」
「手紙で読んだよ。お嬢ちゃんは『飛行』を使えるんだったの」
「言えないわ。ルフォーとのやくそくだもの」
カルフェボは髭を揺らしてフォッフォッと笑った。ニュウが不思議がったが、彼は笑うだけでなにも答えなかった。
かつてカルフェボはその半生をかけて『飛行』の魔法を研究し、そして完成させた。それを余さず教えたただ一人の弟子がルフォーである。彼はそのことをニュウに教えようとし、しかしやめた。お師匠様のお師匠様、というポジションに落ち着くのは癪だと思えたからだ。まだまだ残したいものがある。そして残す先に相応しい相手が目の前にいる。そう思うことこそルフォーの狙いであると、カルフェボは存じていた。
「お嬢ちゃん――いや、ニュウよ」
「なにかしら？」
窓の外を一羽の鳥が飛んでいくのをニュウは見た。

長靴帽子の老人は真面目な顔をつくり、そうして眼鏡を光らせ、少女に提案するのだった。

「もしよかったら、儂のところで本格的に魔法を勉強してみんかね？キミのその『不思議なユラユラ』についても、儂ならば正しい使い方を教えてあげられると思うんじゃ」

19．友達と仲間

学長室を出たニュウは扉の前に立つ少女に気付いた。曲がり角でぶつかった青髪の少女だった。さっきの子だわ！とニュウは思った。ルクリアである。ニュウにとってルクリアは『いちど話したことのある綺麗な髪の女の子』だ。お姉さんというほどには大きくない、ニュウが初めて『おはなし』をした年の近い子どもだった。おつかいを終えて良い具合に緊張感のとれたニュウは名も知らぬ少女への興味をむくむくと膨らませた。この青い子ともっとお話がしたい、仲良くなりたい――ニュウは強くそう思った。ただ優しくされるのでなく、対等に仲良くなりたいと。ニュウは漠然と、彼女とならばそれができるような気がしていた。理由はニュウにもわからなかった。

「こんにちはっ」

ニュウは元気よく挨拶した。

紙箱をためつすがめつ眺めていたルクリアは、はっと顔を上げた。彼女は慌て、「ええと、拾ったお財布が、ええと」と手をパタパタ動かしたあと、「あの、はい、こんにちは」とこたえた。ニュウがにへらと笑う。可愛い子だなあ、とルクリアは思った。ルクリアもつられてくすりと笑った。

「あの、これ、メイドさんのだよね？」

ニュウは水色の財布を見、なにも持っていない自分の手を見、そしてもう一度財布を見てから「あーっ！」と叫んだ。

「甘い……すごい！こんなに美味しいもの、わたし初めてたべたよっ！」

キャラメルを口に入れたルクリアは、顔を輝かせてそう言った。その言葉を聞いたニュウは「そうでしょ！そうでしょ！」と子を褒

められた母親のように喜んだ。場所は中庭の木の下。少女たちはそこの長椅子に腰掛けて話し合っていた。
財布を受け取りお礼を言ったニュウは、黄色い紙箱の秘密を教えるため、座れる場所に案内するようルクリアに頼んだ。立ったままでものを食べるのは行儀が悪いとファイから教わっていたためである。午後まで授業のないルクリアはこれを承諾。そうして中庭の隅、巨人蓬（きょじんよもぎ）の木の下までくると、ニュウはさっそく紙箱の蓋を開け、中から四角い固形物を取り出したのだった。金の少女はにまにま笑い、蒼の少女はきょとんと首を傾げた。
「これを、どうするの？」
「たべてみて。きっとびっくりするわ。あっ、そのうすい紙はたべちゃダメよ。それはちょうだい。ポイしたらいけないの」
財布とキャラメルをきっかけに壁が薄くなった二人は、お互いに自分自身のことを語った。ニュウは『がっこう』で『おべんきょう』をするルクリアを面白がり、ルクリアはかの青色屋敷でメイドをしているというニュウに驚愕した。どちらもが自分に無いものを持っている相手を羨み、そして素敵に思った。二人はすぐに互いを気に入り、意気投合した。ニュウに仲間以外の『おともだち』ができた瞬間だった。
ルクリアはニュウにキャラメルを半分与え、ニュウは水筒の茶を分けた。二人はアカデミーに夜な夜な現れるおばけの話をし、青色屋敷の地下に出るおばけの話をし、或いはモルイの街に出るおばけの話をした。ニュウは喜び。ルクリアは怖がった。もちろん怪談以外にも、互いの『おともだち』のことも話した。ニュウはクシーやエータやファイやメイド仲間のことをこれでもかと両手を振って一所懸命に説明し、ルクリアは街の外に住む年の離れた友人・アノマテカのことを教えた。二人は新しい友人を喜び、いつか一緒に街で遊ぼうと約束した。
「――それでね、クシーはガンマのおくつばっかりていねいにやるのよ。めろめろなのっ」

「めろめろ？」
「とっても、とっても好きで、ひとりだけのどんぐりなひとのことよ」
「も、もしかして……その二人は、恋人同士なのっ？き、キス、とかしちゃうのかな？」
「きす？二人は恋人じゃないわ。クシーがひとりでめろめろなの」
「でも、ガンマさんはクシーさんが刺繍を入れた服をいつも着てるんだよね？」
「そうよ。いつかけっこんする！ってクシーはいつも言ってるわ。おさいほうでキラキラをいっぱいつけておけば、ガンマに女のひとがよってこないんですって」
「そ、そうなんだ」
　もしやガンマという男は酷い女誑しなのではないだろうか。この友人のお姉さんはそいつに騙されているのではないだろうか。ルクリアはまだ見ぬ健気なメイドさんが心配になった。本人のあずかり知らぬ所でガンマの株は暴落した。
「それじゃあ、わたしにこの『きゃらめる』っていうのをくれた人はなんていう人なの？黒い髪の、すっごくカッコいい男の人」
「それはシグマね。シグマはわたしのだんなさまなの。とってもカッコよくて、とってもとってもやさしいのよ。すごいんだから！」
　ニュウの知る黒い髪をした人間は二人だけ。即ちシグマと、王女の騎士だけだ。恰好いいという条件がつくならば、それはもはやシグマ以外に考えられなかった。シグマが来ていると聞いたニュウは心を研ぎ澄ました。命の紐は見えないが、たしかにこの近く――アカデミー周辺にシグマがいるのを彼女の心は感じとった。他にも数名のよく知る命を感じたような気がしたが、そちらは気にしないことにした。
　一方ルクリアはニュウの話を聞き、そっかシグマさんっていうのかあ、とそのまま納得した。恰好いい、優しい、という説明から、ならば彼で間違いないだろうと判断したのである。旦那様というこ

とは、青のルフォーの夫であろうか。青色屋敷の魔女さんって結婚してたんだ。知らなかったなあ。今度お兄ちゃんに教えてあげようっと。ルクリアは間違った知識を身につけた。
「ニュウちゃんのおつかいはもう終わったの？」
「そうよ。がくちょうさんに、ちゃあんとお手紙を届けたもの」
「学長先生、いい人だったでしょ？」
「おひげがみょーってなってたわ。白いおひげっ。こんなふうよ、こんな！それに、こんな、ぐーんって、お肉をとりにいく時のガンマのおくつみたいなぼうしをかぶってたわ！」
大きく手を動かして説明するニュウの様子に、ルクリアは思わず笑った。
「ルキィはがくちょうさんとおともだちなの？」
ニュウが言う。お友達っていうわけじゃないけど、とルクリアはこたえた。
「学長先生にはとってもお世話になってるの。わたし、ジソの生まれなんだけど、わたしのお家はあんまりお金が無くて、アカデミーには入れないはずだったのね。わたし、本を読むのが大好きだからアカデミーの図書館に行ってみたかったんだけど、やっぱりお金がなくちゃ入れなくて」
ニュウは水色の財布をぎゅっと握りしめた。お金はたいせつ、とニュウは思った。
「そしたら、ある日ね、王様が『試験をする』って仰ったの。提案なさったのは王女様で、それは、合格したらちょっとのお金でアカデミーに通えるよ、っていう試験だったの。わたし、それに合格してジソの第二アカデミーに行けることになったの」
「すごおい！」
ニュウはここぞとばかりにはしゃいだ。自分のことのように嬉しかった。ルクリアもそれがわかって嬉しかった。やがてルクリアは「すごいことだったんだと思う」と言った。そして彼女はそれからのことを語った。

学術都市ジソは王都とバビに次ぐ大都市である。貴族や大商人の別宅も多く、当然アカデミーにはその子息が多く通っている。中には金があり既に入学しているにも拘(かか)わらず王の『試験』を受けた者も多くいた。そんな中、満点の結果を出し見事試験に合格したのはルクリアと騎士ヨゾラの二人だけだった。目立つのは必然だった。そして入学前から陰湿な嫌がらせが行われることもまた必然だった。

家に落書きがされ、扉の前にゴミを置かれた。直接的な力にうったえる者もあった。

それらの多くは王女の鶴の一声（と黒の騎士による雷嵐業火のごとき圧倒的暴力）で片付けられたが、当然として全てが解決するわけではなかった。

――せっかく合格したのに、アカデミーに行ったらまた虐められる。

――王女様や騎士様だって、いつでも助けてくれるわけじゃない。

ルクリアは悩んだ。それ以上に悩んだのは彼女の兄と両親だった。もうすぐ入学という日になっても三人は悩み続けた。将来と引き換えに、酷い目に遭うとわかっている場所へ娘を送り出すのは是か否かと。そんな時、その老人は現れた。遠くモルイの街にある王立第三碩学院の学長にして創立者、カルフェボだった。

「うちにおいで。第二の学長は根の腐った暗愚じゃて、学生の質も施設・設備も濡れた雑巾じゃ。学費は要らんよ。寮も整っとる。キミが優秀なことは試験で知れとるからの。いずれは学者になって我がアカデミーの先生をする、というのが条件じゃ。どうかね？うちには平民出も多くおる。図書館はたしかに第二より狭いが、椅子と蔵書は多いぞい」

願ってもない申し出だった。好きなだけ本が読める。好きなだけ勉強ができる。結果を出せば将来は学者だ。神様はいたんだ、とルクリアは思った。両親は寂しがったが、最後には「娘を宜しくお願いします」とカルフェボに頭を下げた。兄などは声を殺して泣いたものであった。こうしてルクリアは第三アカデミーの学生となった。

それからの日々は世界が輝きに満ちていた。選択授業を殆どとらず図書館にこもるルクリアを気味悪がる者はたしかにいたが、虐めはまるでなかった。「あの子はそういう子だから」と誰もが納得したためだ。理解できない人間を理解できないなりに受け入れる心を第三アカデミーの学生たちは持っていた。それというのも、第三アカデミーは国内はおろか近隣諸国でも類を見ない『学生の自主性を尊重する』という気風をもった学院であった。それは平凡な感性を持った者から見れば異常な考え方である。進みすぎている、とも言える。そんな所に好んでやってくる学生は変わり者が多かった。親も教員もまたしかりだ。好きなことをしろ、という場所で好きな事をしている学生を――まして物言わず他人に迷惑をかけない者を――避難しようという人間はこの少世界にはいなかった。近い者で、優秀な学生が自分の教科に興味を持ってくれず寂しがる教員、というのが少数いたが、彼らにしても実害はまるで無かった。そもそも自分のしたい研究を次から次と飽きるまでしていく教員たちが、好きで図書館にいるルクリアを悪く言うのもおかしな話であった。大義なく優秀な学生の成長を妨げる真似をすれば二つの意味で首が飛ぶ。そのことを教員たちはみな知っていた。学長カルフェボは『怠惰』と『才なき者の嫉妬』を何より嫌う。そして彼は王の無二の親友だ。良くも悪くも彼の方針に逆らえる者は皆無であった。

そんな場所で二年も暮らしているルクリアもまた、周囲からは、「本の虫にも限度がある」として変わり者と見られているのだが、本人はそのことに気付いていなかった。「ああ、あの特待生か。実家が大手の貸し本屋なんだろ？」とアカデミー中に自分の間違った情報が流通していることも彼女は知る由もないのであった。

『おともだちのしるし』として互いの持ち物を交換し、ばいばいを告げると、ニュウはアカデミーを後にした。ニュウのあげた『HB』という謎の記号が掘られた『えんぴつ』をルクリアは「すごい！これすごいよニュウちゃん！」と絶賛した。ニュウもまたルクリ

アから貰った、組み紐の先に輪銭を割ったものがつけられたお守りを「きれい！きれい！」とたいそう喜んだ。ニュウもルクリアも知らないことだが、硬貨を半分に割って組み紐で繋ぐのは、遠くモニアケス帝国の古いお守りの作り方だ。意味は『子に降りかかる災いをはらいたまえ』である。

◆――◆――◆

シノビたちは苦戦していた。アカデミーの敷地内には貴族や商人の子息を護衛する同業者が何人もいる。アカデミーそのものに雇われている者もあり、その中には自分たちより明らかに格上とわかるシノビも数名いた。そんな者たちの目を掻（か）い潜（くぐ）ってニュウを尾行するのは困難を極めた。我らは《重苦の刃》のシノビ、世界を変える革命家たちを陰から支えるシノビなのだ――そんな思いがナノハナを、ササノハを、みなを動かしていた。

『対象・出る・建物から・向かう・木へ』

合図があった。四階の窓から暗号を送ったのは、校舎の中まで入りニュウの様子をつぶさに観察していたササノハだ。その合図を全員が確認した。

木というのはあれか？ナノハナは中庭の隅に目をやった。そこには巨人蓬の木と長椅子がある。ニュウはあの長椅子に向かう、ということなのだろうか？疲れて座れる場所を探している、ということか？

ともあれ、ササノハは優秀なシノビである。詳細がわからないながらも彼女を信じ、ナノハナは仲間たちに指示を出した。

『散開・監視せよ・玄関を・木を』

『了解・移動する・西へ』
『了解・移動する・西へ』
『了解・移動する・北へ』
『了解・移動する・速やかに・東へ』
『了解・隠れる・校舎の陰へ』
ナノハナ以下六名は一斉に、しかし静かに行動を開始した。街での尾行と違い、アカデミーの敷地内ではニュウだけでなく他のシノビからも姿を隠さなければならない。こうなるといま着用している『街で目立たない服装』はまるで迷彩性を成さなかった。自分の腕と仲間の援護だけが頼りである。やがて校舎二階の窓からササノハが飛び降りて現れたとき、長椅子に最も近い位置に潜むナノハナはおや、と首を傾げた。
（あいつ……なんであんな、嬉しそうな顔をしてるんだ？）
音もなく着地したササノハは幸せを噛み締めるような顔をしていた。自分と二人の時にだけ見せるものと思っていた緩みきった表情に、ナノハナは僅かな不快感をおぼえた。そうして再度、首を傾げた。なぜそんな気持ちになるのかナノハナ自身にもわからなかったからだ。まさしくササノハの積極的アピールが実を結んだ瞬間だったのだが、そのことを知るものは本人たちを含めても未だゼロであった。のちにササノハはクシーに抱きつくことになる。「ありがとうクシー！やっぱり女は押しだったよ！誠実な人こそ押されて落ちるんだよ！」。そんな言葉にクシーもまた己のやり方は正しかったのだと自信をつけ、ますますもってガンマ陥落へ向けた攻勢に出るのだが、それはいますこし未来の話である。
ササノハが丁度よい位置につき、周囲を警戒しながらしばらくの時がたった頃、その瞬間はおとずれた。
ナノハナは瞠目した。ササノハがどうだという顔をした。残る五名もまた一様に驚き、破顔し、そしてこぶしを握りしめた。
ニュウが、青い髪の少女と、手を繋いで現れたのである。

（あれはまさか、友達！？）
（ニュウに友達ができたのか！？）
（友達だ！チビに友達ができた！ついに仲間以外の友達が！）
（歳も近そうだ！身長はほとんど変わらねえ！）
（クソッタレ、今すぐ帰ってみんなに知らせたい……っ！）
七名は興奮し本来であれば不必要なはずの合図を送り合った。
『疑問・友達？』
『肯定・友達』
『肯定は・早計・友達・不明・まだ』
『友達・絶対・友達・手・手・手』
『友達・おそらく』
『友達・絶対』
『おまえら・しごと・しろ』
シノビたちは手に汗握り、ニュウと『謎の青髪少女』を一心に見つめた。長椅子にいちばん近い位置に隠れるナノハナにも二人の会話は聞こえない。彼らは目視するよりほかニュウと青髪少女の関係を確かめる術はないのだった。しかし声は聞こえずともわかることはある。見ただけでそれと知れるものは確かにあるのだ。『きゃらめる』を分け合い、水筒から茶を回し飲みする二人の乙女はどう見ても『おともだち』であった。
やがて二人がそれぞれの持ち物を交換して別れるのを見届けると、ナノハナは腕で目をぐいと拭（ぬぐ）った。そうして彼は速やかに指示を出した。
『訓練再開・それぞれの配置につけ』
『了解・再開する』
『了解・配置につく』
『了解・最高』
『了解・歓喜』
『了解・欲しい・酒』

『了解・尾行を続ける』

尾行は再開された。

涙と鼻水が訓練に支障をきたすことは明白であった。

20．大人になるということ

ふとニュウは立ち止まった。

西の大門から街を出て、屋敷へと帰る道でのことだ。まっすぐ屋敷へ繋がる道の左手、そこに広がる森の奥に、紐(ひも)こそ見えないが、大きな命を持った生き物を感じたのである。それはニュウが今まで見た中、感じた中で、大木や川などを除けば二番目に大きな命を持った生き物だった。どうやら動物のようだが、動かず、ただじっとしている。嫌な感じはなかった。

「おおきいのがいる……なんにもしないで立ってる。ヘンな感じ……」

ニュウは不思議に思った。しかし彼女は、この時は特段その『なにか』に強く興味を向けることはなかった。いま最も重要なのは屋敷に帰ることだ。早く帰ってシグマに褒めてもらわなくてはならない。そうしてルフォーには、あの『へんなぼうしのがくちょうさん』に魔法を教わってよいか聞かなくてはならない。ニュウは森の奥の大きな生き物への関心を完全に『消した』。興味・関心を自分の中から外へと捨てる――尋常の者であれば意識してできるものではないこの心理行動が、しかしニュウには楽にできた。シグマの命を複製したあの一件以来、あらゆるものの命を無防備に感じ、見てしまう状態にあったニュウが、その幼い自我を保護するためにここ最近で自然と身に付けた自己防衛手段の一つであった。こうするとニュウはあっという間にその生き物の命を感じなくなり、ユラユラも見えなくなるのだ。

森の奥への関心をなくしたニュウは、水色の財布を握りしめて再び歩き出したのだった。

他方、ニュウから最低でも二十メトゥルの距離をおいて森に散ら

ばるシノビたち（これより接近すると気付かれるのである）は、少女の様子を見て一様におや、と思った。はじめは気付かれたかと慌てたものだが、どうもそうではないようだ。それでは彼女はなぜ立ち止まり、森の奥を見つめるような真似をしたのか。

ナノハナは『そのまま継続せよ』と部下たちに合図を出した。そうして自分はニュウの立ち止まった地点を探りに向かった。ニュウに『生き物の存在を感じる力』があることは今や仲間全員が知るところである。虫の一件で、事の本質を誰より早く見抜いたのは彼女だった。またもや自分たちの見落としから取り返しの付かないなにかが起こるのではないかと、ナノハナは心配した。山にいたツチクイモドキ、その存在に気付けなかったシノビ。そのことを誰より悔いているのはナノハナだった。

ニュウの立ち止まった場所の近く、彼女が振り向いてもかろうじて見えない位置にしゃがみ込み、ナノハナは森を見つめた。そこにはなにもない。なにものの気配も感じられない。ナノハナはふむ、と一つ頷くと、手鏡を動かし、光の反射でシノビの一人に合図を送った。

『探る・森・自分が・訓練はそのまま続行・自分を除いて』

シノビ一番のお調子者・クスノキは迷うように一瞬だけ動きを止めたが、すぐに『了解』と合図し、ナノハナに背を向け尾行を再開した。

さて、なにもなければいいが。

ナノハナは緊張を保つために小さく息を吸い、速やかに森へと踏み込むのだった。

◆――◆――◆

エータとローは街の食堂で昼をとっていた。

ニュウの尾行は既に打ち切っている。シノビに止められたためだ。アカデミーを出てきたニュウをこそこそとつけていたところ、背後から突然オイと声をかけられ、「俺たちがちゃんと見てるからおまえらは要らん。邪魔だ」と制されたのである。背中をとられたことに気づけなかった彼らに真っ当な言い訳などできるはずもなく、二人は不承不承（ふしょうぶしょう）引き下がったのだった。

小麦の麺を肉入りスープに浸して食べる美少年二人を店主や他の客はたいそう珍しがった。普通、麺はどろどろにといた餡を絡めて野菜と一緒に食べるものだ。麺を頼めば餡も細切りの野菜も一緒に出てくるのが当たり前である。それを、やって来るなり「麺とスープ二つずつ。餡はいらないよ。代わりに肉いれてね」である。店主は首を傾げたものだ。そうして言われたとおりに出してやれば、麺をスープに浸し、ズルズルと音を立てながら美味そうに食うではないか。そんなものを見ては気になるのが人情というものである。客の一人が同じものを注文した。彼は『スープの絡んだ麺を啜って食う』という芸当に苦労し、むせたりもしていたが、やがて小さな声で「これ、うめえな」と呟いた。客が一斉に興味の視線を向けた。そうだろ、と黒髪の少年が嬉しそうな声を上げた。ローである。

「俺の故郷の料理なんだよ。こっちじゃ麺ってあんまり売ってないだろ。家で作るようなもんでもないし。そうなると店で食べるしかないんだけど、この辺りじゃどこに行っても小麦の麺は餡掛けだ。参るよ」

「最初、大将から聞いたときは『えー？』って感じでしたけど、今はもうこっちに慣れちゃって」麺を啜りながらエータが言う。「うちの仲間はみんなこの食べ方です。僕も今ではスープ無しじゃ食べられない体ですよ」

ほう、と店主が言った。

「そりゃあ、なんていう料理なんだ？」

「うどんだよ。もっと味が濃くて麺がしっかりしてればラーメンって言えなくもないかな。スープがぐつぐつに熱ければもっと美味い

んだけどね」
「それ、大将も同じこと言ってましたよ」
「そりゃ、俺が美味いと思うもんはあいつだってそう感じるだろうさ」
「実家が同じ街なんでしたっけ？」
「同じ町っていうか……まあ、同じといえば同じか。家の近所に蕎麦屋があってさ、そこで出すうどんがまた美味いんだ。当時の仲間と、学校帰りによく行ったよ」
「ソバヤって何です？」
「蕎麦っていう、そば粉を使った麺料理があるんだよ。麺はこれよりもっとずっと細くてザラザラしてる。それを出す店。まあ、そこの蕎麦はてんで不味かったけどな。どん兵衛の方が美味いレベルだった」
「どんびえっていうのはよくわかりませんけど、美味しいなら食べてみたいですね。いつか連れていってくださいよ」
「……まあ、そのうちな」
うどんか、と店主が言った。彼は顎に手を当てて黙りこみ、やがてひとりで頷き呟いた。
「考えてみるか」
その言葉は、麺を啜る音でエータとローの耳には届かなかった。
のちにモルイの街の名物となる『ウドンメン』――その誕生に大きな影響を与えたのは二人の美少年であったという。彼らの名を知る者はいない。当の二人もそれが自分たちであるなどと知ることはなかった。半年後、この店は毎日外まで行列が出来、貴族の屋敷に招待されるほどの有名店となるのだが、それはまた別の物語である。

食事を終えたエータとローは街をぶらつくことにした。
ニュウの尾行という当初の目的を失った二人は暇だった。エータはニュウに菓子を買い、ローは市（いち）の露店をひやかすなどしてそれぞれ時間を潰した。

現在、二人は闘技場の客席でケンケラの練習を見ている。
ケンケラは馬と人間の綱引きだ。馬が勝っても特典は無いが、人が勝てばその人間には自由が与えられる。即ち、馬の相手をするのは奴隷であった。人が馬より足腰が強いならば馬車は要らないことになる。馬に勝つような例外もいるにはいるが、基本的には奴隷が引きずり回されるのを金持ちが手を叩いて眺める遊びであった。
青色屋敷の厩舎にいる馬たちより一回りも大きい馬が岩の載ったソリを引く様子をぼんやりと眺めていたエータは、やがて小さく溜め息をつき、呆れの色を多分に滲ませた声で言った。
「先輩は、アレに勝ったんですよね」
ガンマのことである。ローは笑い、「ああ」とこたえた。
「あれは見ものだったぜ。もう十年になるか。当時のあいつの飼い主様も、見物に来てた貴族連中も、それから馬も、闘技場全体がシーンと静まり返ってな。俺だけが爆笑してたよ」
「それ、まったく同じことを大将も言ってましたよ」
「えっ、うそ」
「どうせ二人でゲラゲラ笑って、横でラムダさんが呆れてたとか、そんな感じなんじゃないですか？だいたい想像できます」
「あー、そうだったかな。……いや、うん、そうだった気もしてきた」
ローは曖昧に言い、頭を掻いてあははと笑う。先生はすぐ恰好つけるんだから、とエータは苦笑した。
ケンケラで馬に勝利したガンマは奴隷の身から開放される筈だった。しかし土壇場になって雇い主がそれを突っぱねた。本来であればそのような暴挙は許されない。相応の理由が必要だ。彼はガンマが馬に毒を飲ませたと主張した。それというのも、この時、馬とガンマは飼い主が同じ人物だったのである。彼はその催しの後、ケンケラに使った馬を、怪力男に勝った馬として貴族に売るつもりでいた。それがどんな手違いか、勝ったのが怪力男の方というのだから笑えない。奴隷に負けた馬の価値など高が知れている。奴隷を失い、

くわえてこれから売ろうという馬の価値まで落としたのではまるで救いがない。馬も怪力男もまだまだ金になるのだ。どうにかしてこの窮地を乗り越えなければならない。――そんな思惑から出た嘘であった。

しかしそんな企みも上手くは回らなかった。闘技場からの帰り道、雇い主の男が何者かに襲われ、ガンマも馬も奪われてしまったのだ。むろん襲ったのは《重苦の刃》だった。事前にシグマの手引きで多くの貴族と『握手』をして『姿』をストックしていたラムダが、裏から手を回したのである。

「この道は封鎖だ」

「ここから先は通行止めだ」

「わしが誰だかわからんのか平民ども！道を譲らんか！」

道を封鎖したとされる貴族たちは誰一人としてそれを認めず、結局、一人の男が損をしただけの結果に終わった。その尊い犠牲の影でガンマは自由の身となり、《重苦の刃》は優秀な人材を得たのであった。

「ラムダさんの能力って、凄いですよね。一瞬で誰にでも変身できちゃうなんて。ラムダさんが敵だったらと思うと――」

怖いですよ。エータはそう言った。ローはわざと大袈裟に肩をすくめる。彼は言った。

「誰にでもってわけじゃないさ。握手に応じた相手、それも同性だけだ。時間制限もあるし、決して万能じゃあない」

「そりゃ、そうですけど……それでも十分に凄いですよ」

ローは自然な表情を装ってエータの横顔を見つめた。エータはぼうっと馬を見ている。

エータはラムダの能力を誤解している。他の仲間達もまた、シグマを除けば誰一人としてラムダの能力を正しくは知らなかった。全員が騙されているのだ。

ラムダは自身の能力《変幻自在》を仲間には『握手に応じた男の姿に一時間だけ変身できる力』と説明している。シグマもこれを認める発言をしている。しかしこれは真っ赤な嘘だ。ラムダの能力に課された制限は、握手を求め、これに応じられることだけである。男でも女でも、文字通り自在に姿を変え、その姿から成長・老化することさえできる。もちろん時間制限などあるはずもない。仲間たちが『ラムダ』として認識している普段の姿からして、十六年前に手を握った男の成長したカタチなのだから。

ラムダがそのことを仲間に隠しているのはシグマの指示によるものだ。「おまえの能力はいざという時の切り札として使える。仲間にも隠せ」シグマはそう命じた。ラムダにもラムダなりの考えがあり、彼はこれを受諾。以後、この秘密は誰にも明かされず『一時間しか変身できないのはそれ以上は頭に負荷がかかりすぎるから』『異性に変身できないのは体の構造を理解しきれないから』などともっともらしい嘘の理屈で守られてきた。ラムダの《変幻自在》をいたく気に入る青のルフォーでさえ、彼の本当の能力については知らないのだった。

三時の鐘が鳴った。

ローは背伸びをして肩の骨を鳴らした。エータもそれにならう。風の冷たさがやがて来る季節を教えた。モルイの街は山に近い。ひと月もすればこのあたりは雪で埋まるな、とエータは思った。

「そろそろ帰るか」ローが言う。

「そうですね」エータがこたえる。

二人は屋敷へ戻るべく腰を上げた。まあ、とローが言った。

「帰っても、俺はまたすぐ出るんだけどな」

「出るって、どこにですか？」

「仕事に決まってるだろ」

「えっ？」

「俺は営業部のリーダーだぜ？俺が仲間や支援者を探さなくてどう

するんだ」
「帰ってきたばかりじゃないですか！挨拶は！？みんなへの挨拶はどうするんですか！？」
「だから、それをしに帰るんだよ。なにも言わずに出るのはやっぱり気持ちがよくないからな。今日は楽しかったぜ、エータ」
エータはいよいよ慌てた。ローが帰っているとファイに聞いてから、エータには目的があった。それはローの特殊任務に連れて行ってもらう、というものだった。
革命組織《重苦の刃》の最終目標はアカンナ王国の民主化である。そのための同志はひとりでも多いに越したことはないし、武器や食料などの物資も多ければ多いほどよい。エータはローの『勧誘活動』やガンマの『各地の活動組織への支援』のような仕事に憧れていた。だが彼に任される仕事は戦災孤児への援助や難民の生活指導などといった、いわゆる『人気とり』ばかり。組織の株が上がるのは望ましいことだ。エータもそのことはわかっているが、しかし数字として結果を実感できない仕事に、気持ちを持て余していたのだった。そんな折にローの帰還だ。これはもう頼み込むしかないと彼は考えた。
「先生」
「うん？」
「あの、実はお願いがあって……」
しかして屋敷へ戻る道、エータは思いきって切り出した。自分を先生の仕事に連れていってくださいと。必ず役に立つ、足を引っ張るようなことにはならないからと。
ローの答えは一言、「駄目」であった。
「なんで駄目なんですか。僕だってもう子どもじゃない」
「用心は深くして川は浅く渡れ、ってね」
「どういう意味です？」
エータは口を尖らせて聞いた。不貞腐れている自覚があった。ローは苦笑し、こたえた。

「エータは、思いついてから行動するまでが早すぎるんだよ。それはもちろん長所だけどさ、時には短所にだってなるんだ。全てが全て思ったとおりに行くわけじゃない。ガンマみたいになれとは言わないけど、せめてシグマと同じくらいには用意をしてから動いてほしいと俺は思うね」

「大将と同じなんて……そんなの、できるわけないじゃないですか。あの人は僕たちとは違うんですから」

そんなことはないさ、とローは言った。

「俺はガキの頃からあいつを見てる。あいつのことは誰より知ってるつもりだ。その俺が断言するよ。シグマなんかより、おまえや他の連中のほうが、ずっと立派だ」

それは本心からの言葉だった。

エータが訝しむ顔でローを見る。ローは肩をすくめ、「なんにせよ」と言った。

「アカデミーに行く子を尾行しようっていうのにアカデミーに入れなくて頓挫、なんてことは、今後は無いようにしときな」

エータは俯いた。その頭をローが優しく叩いた。

「いつかおまえを俺の隣に立たせてやる。いつかおまえに俺の秘密を教えてやる。いつかはおまえに頼る時も来るだろう。――でも、エータ。それは今じゃないんだ。ゆっくり、ゆっくり大人になれ。それが今の、おまえの仕事だ」

エータは答えず、ローもそれ以上なにも言わなかった。

この日、青色屋敷でローを主役にした宴会が盛大に執り行われた。急な用事で出掛けたというラムダだけは姿がなかったが、それ以外はシノビも交代々々で全員参加の宴となった。女たちは寂しがり、研究部のパイなどは普段のニヒルぶった態度をかなぐり捨て、ローの腰に抱きつき声を上げて泣いた。

そうして夜明け前。みながだらしなく寝転がる広間の中、ローはエータだけをそっと起こした。

「俺はもう行くよ」
「みんなには何も言わなくていいんですか？」
「おまえから言っといてくれ」
「次に帰った時には、絶対、連れてってもらいますから」
「ガンマが悲しむ」
「先輩は過保護なんですよ」
ローが笑い、エータは笑わなかった。
ローがこぶしを差し出す。
そこにエータがこぶしをぶつける。
「またな」
ローが言い。
「はい、先生」
エータがこたえた。
そうしてローは屋敷を出ていった。
エータは気付かない。
帰ったばかりで屋敷にも寄っていないというローがいつアカデミーの見学許可をとったのか。果たしてそんな時間があったのか。
エータは気付かない。ローの秘密に。ローの能力に。
森の奥で鳥が鳴いた。
ガンマの足を抱くクシーが幸せそうな唸り声を上げた。
エータは仲間を起こさぬよう静かに広間を出ると、木剣を持って裏庭へ向かった。
はやく大人になってやる。
強く、強くそう思った。

◆――◆――◆

★ニュウの日記

きょうは、わたしは、おつかいにいきました。
わたしは、おつかいは、ひとりでいきました。すごい。
わたしは、がくちょうさんに、おてがみをわたしたでした。
がくちょうさんは、おひげで、ぼうしで、すごいへんでした。
わたしは、がくちょうさんの、せいとをします。まほうです。
るふぉが、いいよにゅうちゃんがんばれえ、といったからでした。
わたしは、まほうとかがんばるからしぐまのやくにたつ、とおもいました。
わたしは、それから、きょうは、ともだちができました。
ともだちは、るきで、ほんとうはるくりあだから、るきです。
わたしは、るきと、ともだちのこうかんのやつを、しました。
わたしは、るきに、2こしかないけど、えんひつのやつをあげました。
るきは、わたしに、ひものおまもりのあおいのを、あげてくれました。
わたしは、るきと、こんどあそぶから、ゆびきりげんまんしました。
わたしは、るきに、ゆびきりげんまんのやりかたを、おしえてあげました。
わたしは、おひるは、おつかいだから、ひとりでかってたべるやつをしました。
わたしは、うどうんの、すぷのないのやつを、たべました。
わたしは、おいしいでもすぷもあればもっといい、とおもいました。
わたしは、おいしかったから、まんぞくでした。
しのびは、きょうは、なのはなが、にゅうをみてたんだぜえ、といいました。
わたしは、しのびすごいきづかなかたすごい、といいました。

しのびは、うれしいかおでした。ささのははないた。
なのはなは、きょうは、もりのおくできのおばけたすけてくれた、といいました。
わたしは、もりになにかいるから、わかるので、それだな、とおもいました。
わたしは、それはわるくないのだからいいんだよ、といいました。
なのはなは、じゃあよかった、といいました。
わたしは、よるのごはんは、みんなで、さわいでたべるのをしました。
いつもより、もっとさわぐやつです。
それは、ろーがいないくなるからでした。
わたしは、さわいでよくてたべるのはおもしろいからすきだよう、とおもいます。
わたしは、おひるのやつよりもみんなでたべるのほうがすきか、とおもいました。
ろーは、にゅうちゃんおつかいすごいかったな、といいました。
わたしは、うんといいました。
わたしは、ろーのひみつのことが、わかってます。
わたしは、でも、ひみつにしてるのはだいじだからとおもうから、いわないです。
わたしは、いま、したのひろまのおへやにいって、そこでねます。
きょうは、とくべつです。

わたしはげんきです。

21．恋心

「『たびびときょうかい』っていう所からお客さまがいらしたわ。とってもカッコいいお姉さんよ。シグマにお荷物のかくにんおねがいしますって」
「もう来たのか。思ったより早かったなあ」
「おむねに赤いお花の『おさいほう』があったわ」
「それはまた随分な大物だな」
「おおもの？」
「赤の着用を認められるくらいだからね。よほど名の通った《旅人》なんだろう」
「あのお姉さんはすごいお姉さんなの？」
「たぶん、一級の《旅人》だろう」
「一級のたびびとさんはえらいの？」
「《旅人協会》は《旅人》を使った配達屋さんなんだ。一級の《旅人》ともなれば特殊な魔法で大陸中どこへでも三日もあれば荷物を届けてくれる」
「すごいのね」
「そう。すごくて、とても便利だ。国が特権を与えて囲いたがるほどにね。誰も逆らえないから、自分は偉いと思い込んでしまう人が多い。――さて、今日の《旅人》はどうかな」

◆――◆――◆

晴れ渡った枯季の空を大鷲が飛ぶ。大鷲は瓦礫の山の上空をぐるり三度まわると、やがてモルイの街の方角へと嘴をむけた。吹く風にはやや水気が足りなかった。

青色屋敷に配達人がやってきたのはメイドたちが昼の用意を始めた頃だった。
「おーい。お嬢さん、ちょっといいかい」
庭で紫人参の泥落としをするニュウに声をかける者があった。没頭していたニュウは一度目は気づかず、再度「メイドのお嬢さん」と呼ばれて顔を上げた。柵門の前に女が立っていた。豚の頭が入るくらいの木箱を片脇に抱えた女だ。女はおいでおいで、とニュウを手招きした。なにかしら？お客さんかしら？ニュウはたらいに人参を戻し、門へと向かった。
女はファイより年上であろうと思われた。右頬の深い刃物傷が目を引く女である。しかしニュウが気になったのはそこよりも、彼女の着ている上掛けだった。胸元にほんの小さなものだが、赤い薔薇の刺繍があるのだ。赤いお花？いいのかしら？ニュウは思う。赤はえらいひとの色だから、着ちゃいけないんじゃなかったかしら？ニュウはシグマから、『赤』はスズカゼ王国において特別な色で、王族とそれに認められた一部の人間にしか着用を許されていないのだと聞いていた。赤に似た別の色かしら？色の名前はいっぱいあるものね――ニュウはそう納得することにした。
「お仕事中ごめんね」
傷の女はにこりと笑った。ううんいいわ、とニュウはこたえた。
「どんなご用かしら？」
「ここに、シグマ・ユーニって人が居るでしょう？その人に荷物を持ってきたんだ」
「シグマのお客さんね！」ニュウははしゃいだ。「いま門のカギを持ってくるわっ」
「ちょっと、ちょっと！」
コートの女は慌てた様子で手を振った。
「駄目だよ、事前に連絡のない相手をそんな簡単にお家に上げちゃ。お姉さんが悪い奴だったらどうするのさ」

ニュウははっとした。そうだったわ。うそつきのひともいるから、門は勝手に開けちゃいけないんだった！ニュウは考えた。客への対応は教わっている。ルフォーへの客は全て無視し、他の仲間たちへの客はシグマかガンマに知らせるのだ。知らせる時はどうするんだっけ？ニュウはうんと頷く。少女はすました声で言った。

「すぐに主人を呼んできますわ。お名前とごようけんをお聞きしてもよろしいかしら」

「《旅人協会》から来たって言えばわかるはずだよ。荷物の確認をお願いします、って伝えてもらえる？」

「わかったわ。ちょっとだけお待ちになって」

ニュウはスカートの裾をつまんで一礼すると、シグマの部屋へ走った。

パタパタ走ってゆく少女の背を見つめ、女はボソリと呟いた。

「満面の笑みで主人を呼び捨て……まさか、あの歳で愛妾（そばめ）に将来しぼってるの？」

そうだとしたらすごい根性だ、と女は思った。夢の無い世の中だ、とも。

「それじゃあ、あたしはこれで」

「お茶くらいお出しするが」

「冗談。《旅人》は速さが命だよ」

「縁があったらまた。今度はこちらから頼むかもしれない」

「どうかな。余所者に任せる必要もないと思うけど」

「わかるかい」

「それなりに優秀なシノビを飼ってるみたいだ。七人、いや八人かな」

「その『赤』はどなたに？」

「王子殿下から賜ったわ。直接にね」

「なるほど、大物だ」

「ありがと。――じゃあね、お嬢ちゃん。巡りがあったらまた会いましょう」
「またね、お姉さん。気をつけておうちに帰ってねっ」
「……あなたの空に風の恩寵があらんことを」
女はニュウの頭を撫で、風のように去っていった。ただの比喩にとどまらぬ、突風を巻き上げるその速さに、ニュウは「すごおい！」と歓声を上げた。一方シグマは女の自分へ向ける視線に棘があったような気がして首を傾げた。自分はなにかしただろうかと。
屋敷に戻るシグマの背中を見送る。紫人参の泥落としを再開しながら、ニュウは女の持ってきた木箱を思った。あの箱には何が入っていたのかしら？重いのかしら、軽いのかしら？――女が片脇に持っていた時には軽そうに見えたそれを、シグマは両手で重そうに抱えていった。そのことが不思議でならなかった。昨日の宴会でローが見せてくれた『ぱんとまいむ』だろうか？なにもない場所で見えない壁にぶつかったり重そうに空気を持ち上げたりするあの『魔法』は本当に愉快だった。ローにできることがシグマにできないはずはない。さっきの箱も『ぱんとまいむ』なのかしら、とニュウは思った。
通常、一級の《旅人》が依頼で運ぶ荷物には、どんなに小さなものにも盗難防止の魔法がかけられる。それは荷物の重量を増して盗まれにくくするものだ。同様の理由で『一級』に依頼するような者は配達を頼むに際して箱の中に重しを入れるのが常識であった。配達が完了し盗難防止の魔法が解かれても、鉛のたっぷり入った木箱はニュウよりなお重いのだ。しかしそんな真相など少女は知る由もないのだった。

◆――◆――◆

昼食を終えたニュウはさっそくシグマの部屋を訪れた。木箱の中身がどうしても気になったためだ。青色屋敷に引っ越して以降、ニュウはメイド見習いの仕事とは別に、仲間たち一同の薦挙によりシグマ専属の走り使いと世話係を兼任している。これによって彼女はシグマの部屋への自由な出入りと会議への参加（お茶汲み係）をなかば公認されている状態にあるのだった。

ノック（戸を叩くことをこういうとシグマから聞いた）をし、「どうぞー」の返事をうけて戸を開けると、シグマが大の字になって床に転がっていた。ニュウは大いに慌て、二人で食べようと思ってとっておいたキャラメル二個を廊下に置き、愛する夫に駆け寄った。

「シグマ、どうしたのっ！」

床にはシグマ以外にも様々な物が転がり散乱している。散らばっているのはニュウには読めない『阿部一族・舞姫／森鴎外』という謎の記号が表紙に印字された赤い綺麗な本であったり、金属製の不気味な仮面であったり、一面が九つの正方形に区切られた色鮮やかな立方体であったり、そうした物々が入っていたであろう白い蓋なしの箱であったりした。しかしそれらの不思議な物たちもニュウの気をひくことはできない。少女はシグマの頭を膝に載せ、優しく、優しく撫でた。

「けがはない？痛いところはない？かゆいところはない？」

「耳の後ろが痒いかな」

「かいてあげるわっ。どう、元気になった？」

「ありがとう。元気百倍だ」

「シグマ、何があったの？おばけがらんぼうしたの？」

「ええと――」

さてどうしたものか。見下ろすニュウの顔をぼんやり見つめながら、シグマは気まずい思いで口篭った。木箱の蓋がなかなか開かず、無理に引っ張ったら転んで棚にぶつかり、積んでいた『使用頻度・低』の箱が落ちてきたというのが現状の出来上がった経緯である。いかなシグマといえど、瞳に涙を浮かべて自分を心配する少女を前

にしてそんなことを言えるほど雰囲気の読めない男ではなかった。
《重苦の刃》の大将・シグマは言った。
「――いや。あの、ちょっと、いろいろあってね」
何がいろいろだろうか。
もうすぐ三六歳になる男の発言がこれである。泣ける話だった。
一方ニュウはこの発言を自分なりに解釈した。即ち、なにか大変なこと――それも自分に言えないようなことがあったのだと。男の秘密を詮索してはいけない、とは先輩メイドの言葉である。ニュウは聖母もかくやという微笑みを浮かべて言った。「わかったわ」と。いよいよシグマの罪悪感は滅多打ちにされ、弾けよとばかり腫れ上がった。

シグマをベッドに座らせ、ニュウは床の片付けをする。おじさんがやるよ。指を切らないように気をつけるんだよ。おろおろするシグマに手を出させるほどファイの教育は甘くない。ニュウは散らばる小物や本や鉄仮面を白くて軽い箱（はっぽすちろりんっていったかしら？）にせっせと詰めていった。やがてニュウが最後の一個を拾い上げた時、「懐かしいなあ」とシグマが言った。
ニュウはシグマを見、手に持った綺麗な立方体を見つめ、そして聞いた。
「これのこと？」
ああ、とシグマはこたえた。ニュウの特に好きな優しい声だった。シグマはニュウの手から立方体をひょいと奪うと、カリカリ、キリキリ、と音を立ててそれをねじった。ニュウは「わあぁ」と声を漏らした。少女はその立方体が、一面を九分割する直線にそって回せるように作られていることをすぐに見抜いた。きれいですてき、というのがニュウのもった最初の感想だった。それはすぐに「おもしろそう」にかわる。やがてシグマが何度かねじり、ニュウの手に立方体を戻した時、はじめ、皿に盛られた豪華なサラダのようだったそれは面ごとに白、赤、青、緑、黄、橙、と色が統一され、キビキ

ビした感を全面に押し出していた。ニュウは思わず歓声を上げた。
「これ、なあに！？シグマ、これなあにっ！？すごおい！」
シグマはよいしょとニュウを抱き上げ、ベッドにおろして隣に座らせた。シグマは再度ニュウの手から立方体を受け取り、「これはね」と言ってまた数回ねじった。
「これは、ルービックキューブっていうんだ」
「るびっきゅるーぐ？」
「ルービックキューブ。バラバラにしてから色を整えて遊ぶ、おじさんの故郷のおもちゃだよ」
「るびっくきゅうぶ……ウソみたいにツルツルだったわ。かいちゅーでんととおんなじ木で作ったの？」
「おじさんが作ったわけじゃないよ。それに、素材は木じゃなくてプラスチックだ」
「ぷらちっく……それは鉄なの？」
「金属とはまた違う。合成樹脂――っていってもわからないか。うーん。ゴムの仲間、かな」
「ゴムって、お金持ちの子が持ってるたまのこと？」
「そうそう。あれのお友達がこのプラスチック。鉄より軽くて錆びないし、木より丈夫で腐らないんだ」
「シグマって、とってもものしりねっ。わたし、ものしりな人、好きよ」
「嬉しいことを言ってくれるじゃないか」シグマはニュウの手にぽんと立方体をのせた。「そんなキミにはルービックキューブをあげよう」
「いいの！？」
こんな素敵なものを貰えるなんて！ニュウは大いにはしゃいだ。
まわしてごらん、とシグマが言う。ニュウはキューブをねじった。思ったよりかたい。でも、たのしい。ニュウはシグマを見上げた。
「ほんとうに、もらってもいいのっ？」
いいとも、とシグマは笑った。

「僕はもう使わない。箱の奥で眠っているより、ニュウに遊んでもらえた方がその子も喜ぶだろうさ。ただ、屋敷の外に持っていっちゃいけないよ。キューブには赤があるからね」
「ありがとう、シグマ！」
キャーと声を上げ、ニュウはシグマに抱きついた。
「おっと」
ニュウをひっつかせたままシグマがベッドに倒れる。窓の外を大鷲が飛んでゆく。バルコニーでササノハが息を飲む。彼女はシノビの仲間たちに合図を送る。『噂・真実・大将・ニュウ・愛・愛・愛』。それを受けたナノハナが合図を返す。『秘密厳守・されど・応援』。
こうしてシグマとニュウの関係に関する情報は、真実とかけ離れたかたちでシノビ七名に伝わったのだった。

◆――◆――◆

「へんなの。おてがみをもってくるのに重いはこを使うなんて、つかれちゃうわ」
「荷物を無事に届けるための《旅人》の知恵、荷物の中身を誰にも知られないための工夫だよ。手紙を奪おうとする悪い奴は、手紙を持っていそうな《旅人》を襲う。壷を奪おうとする奴は壷の入りそうな箱を持った《旅人》を襲う。それじゃあ、《旅人》みんなが同じような大きさの箱を持っていたらどうだろう？誰を襲っていいかわからないだろう」
「ひとのものをどろぼうするのは悪いことだわ」
「まったくもってその通り。でも、そういうことをする悪い奴も世の中にはいるんだ。困ったことにね」
「なんだか悲しいわ」

「ほんとうにね」
「どんな――あっ。なんでもないわっ」
「どんな手紙だったかって？」
「聞かないわ。わたし、せんさくしない女の子ですもの。男のひとのおしごとのことは聞いちゃダメなんだから」
「ただの業務報告書だよ。遠くで働いている仲間からの、仕事の状況を知らせる手紙。今回はこれこれこういうお仕事をしました、こういう結果になりました、自分はこう考えます、大将はどうですか？っていうお手紙さ」
「わたしにおしえてもいいの？シグマ、おこられない？」
「細かな内容や相手は教えられないよ。勿論ニュウだけじゃなく、誰にもね。でも、どんな手紙かくらいは話してあげられる」
「シグマってやさしいのね。わたし、やさしいシグマが好きだわ」
「やさしさなんかじゃないさ」
「そうなの？」
「キミはこれからいろんなことを学んで大きくなる。いろんな人と会って、いろんな人と話して、いろんなことを聞いて成長するんだ。知らない人と話すのは簡単じゃない。知らない人にものを聞くのは簡単じゃない。でも、今は僕がいる。相手が僕なら、聞きたいことはなんだって聞いてくれてかまわない。答えられないことは答えられないと言うけれど、それで怒ったりはしないから。聞くことは悪くないんだ。間違えたって、大抵のことはやり直しが効く。そうじゃないことを知るために、たくさん大人に聞いたらいい。それができる時期が今なんだ。探究心を無理やりに抑えつけちゃいけない。キミはゆっくり大人になりなさい。急かしたりなんて僕はしないから」
「……うん」
「よし。いい子だ」
「……」
「――――」

「……あの」
「なにかな？」
「……なにかしら？」
「うん？」
「へんなかんじなの」
「へんな？」
「いま、おむねがぎゅってしたの。まだしてるわ。おなかとおむねの真ん中がとってもあつくって、でも体はちょっとだけさむくって、苦しいのにふわふわして……とってもへんなかんじ。これ、なにかしら？」
「お昼を食べ過ぎちゃったかな？僕も――おじさんもニュウくらいの頃によくあったよ、そういうの。食べたあと、しばらくして急に苦しくなるんだ」
「そうなのかしら？」
「きっとそうさ」
「……そうなのかしら」

◆――◆――◆

「わたし、ちょっとお庭でおさんぽするわ」
「そうするといい。用事があったら窓から呼ぶよ」
「またね、シグマ」
「またおいで」
シグマの部屋を出たニュウは、戸にもたれかかり、胸をおさえて首を傾げた。シグマのそばにいたくない。そんなふうに思ったのは初めてのことだ。ニュウは大いに戸惑った。なにかから逃げるような気持ちが胸の奥にある。そばにいたいのにいたくない。近付きたいのに離れたい。理由の掴めない不安がある。これ、なにかしら？

ニュウは自分自身を不思議に思った。
ふと足がなにかを蹴った。
それは包み紙にくるまれた二粒のキャラメルだった。部屋に入る前に廊下に置き、そのままにしていたものだ。ニュウはキャラメルを拾い、一つを包み紙から取り出して口に入れた。美味しいけれど、なにかが違うと思った。胸の奥が痒いような気がした。その痒みは掻いても消えないような気がした。
階段を慎重に降り、玄関の扉を開けて庭に出る。
庭には祖父とガンマがいた。ガンマが振り向き、次いで彼と話していた祖父ノルフが顔を上げた。ノルフはガンマの新しい靴を作っているところだった。
ニュウは無言で二人の元へ歩いた。その様子にガンマは首を傾げ、ノルフはふむと頷いた。
「なにかあったか？」
ガンマが聞いた。
「わからないの」
ニュウがこたえた。
「わからないって、なにがだ？」
「わからないことがたくさんあって、なにがわからないか、わからないの」
「むう」
それでは俺にもわからん、とガンマは思った。元より不器用な男である。奇妙に静かなニュウの話を聞いてやろうと考え、それがかなわず黙りこむあたりに彼らしさがよくあらわれていた。クシーがガンマに惚れた理由、その第三位がこの不器用さだった。
ニュウは革を測っているノルフに近付いた。ノルフは作業を止め、しわしわの顔をニュウに向けた。そうして彼は薄く笑った。そこに言葉はなく、ただ思いだけがあった。
「おじいちゃん。これ、あげるわ」
ニュウが手を差し出す。ノルフは手のひらを出し、小さな塊を受

け取った。
「キャラメルっていうの。とってもあまいのよ」
「そうかい」ノルフは歯を出して笑った。「ありがとうな、ニュウ」
ニュウは笑い返すと、「じゃあね」と手を振り屋敷の裏へと向かった。
ちょうどエータが素振りをしている時間である。ニュウは兄貴分の稽古を邪魔にならない場所でぼんやり眺めようと思った。
裏庭にはエータがいた。いつもどおり素振りをしている。ニュウは石像の台座にすわって木剣の動きを眺めた。
エータがニュウに気づく。しかし素振りの手は止めない。ニュウは黙ってそれを眺めた。
今日は風がないなあ、とニュウは思った。風が吹けばいいのに、と思った。理由はニュウにもわからなかった。ただ、風が吹いてほしい気分だった。

「今のはなんだったんです?」
ガンマが言った。無論ニュウのことである。あんなニュウは見たことがなかった。
「心当たりがありますじゃ」
ノルフは作業を止めず、下を向いたまま言った。
「むかし、死んだ娘が、今のあれと同じ顔をしたことがありました」
「心を病んだのですか?」
「心配するようなものじゃあありません。ぐっすり眠れば朝には元に戻ります」
それはなんです、とガンマは聞いた。
「病といえないこともない」
ノルフは寂しげに笑い、そうしてやはり寂しげにこたえたのだった。

「孫は恋をしたのでしょう。それに気づいておらんで、戸惑っとるんだ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2766w/

魔王誘拐

2011年9月25日02時41分発行